

# 友松3号遺跡発掘調査報告書

—友松住宅開発事業に係る発掘調査—

2021

東広島市教育委員会





SK03出土の主な遺物





## は し が き

東広島市は、広島県のほぼ中央に位置し、「未来に挑戦する自然豊かな国際学術研究都市～住みたい、働きたい、学びたいまち、東広島」を将来の都市像として、地域イノベーションの積極的な展開、希望ある未来へ挑戦する新たなプロジェクトの展開、次の時代を見据えた地域共生社会の実現、豊かな自然環境の保全と活用、国際色豊かなまちの形成を目指しています。

そのため、誰もがいきいきと活躍できる快適な生活環境を形成して、自然と利便性が共存する魅力的な暮らしのあるまちづくりや、また都市成長基盤の強化・充実、交通ネットワークの強化などに取り組んで、学術研究機能や多様な人材の交流から新たな活力が湧き出すまちづくりなどに取り組んでいるところです。

こうした中、西条地域の整備構想の中では寺家新駅周辺整備に取り組み、良好な居住環境や近接する医療機関機能を活かすためのアクセス環境を整えることを目指して、新駅周辺におけるコンパクトで機能的な拠点の形成を進めています。

現在、寺家新駅周辺地域では、公共事業の進捗に伴い、民間の宅地開発事業も急速に進みつつありますが、広島県内で遺跡の宝庫として知られる東広島市にあって、当該地域は、特に遺跡が集中する地域として知られており、開発と遺跡の保護の調整を図っているところです。

友松遺跡群周辺においても、近年急速に宅地開発が進んでおり、今回報告する友松3号遺跡でも宅地造成事業が計画され、それに先立って発掘調査を実施したものです。

今回の調査によって、主に弥生・古墳時代の集落跡や中世の鍛冶関連遺構などを検出しました。特に、弥生時代では県内でもまだ類例の少ない前期の集落跡や、中世の鍛冶関連遺構では全国的にも類例が知られていない特殊な鉄製品が出土するなど、貴重な資料を多く確認することができました。

本遺跡の成果が、郷土をはじめ歴史研究の資料として広く活用されますとともに、文化財に対する理解と関心をより一層深められる一助となれば幸いです。

最後になりましたが、ご理解とご協力、ご指導をいただきました関係各位並びに地元関係者の皆様に心から厚くお礼を申し上げます。

令和3年3月

東広島市教育委員会  
教育長 津 森 毅

## 例 言

- 1 本書は、平成31年度に発掘調査を実施した友松3号遺跡(広島県東広島市条町寺家)の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査及び整理・報告書作成作業は、サンユープランニング株式会社から委託を受けて、東広島市教育委員会が実施した。
- 3 発掘調査及び基礎整理作業は、平成31年度に生涯学習部文化課専門員藤岡孝司、埋蔵文化財調査員日浦裕子、竹野菜つみが担当し、整理・報告書作成作業は、令和2年度に藤岡、埋蔵文化財調査員石井亜希子が担当した。
- 4 発掘調査における遺構の実測、写真撮影は藤岡、日浦が行い、整理・報告書作成作業における遺構の製図は竹野、石井、遺物の実測・製図は株式会社四航コンサルタントに委託して行った。また、遺物の写真撮影は藤岡が行った。なお、友松1号遺跡S B O 1出土遺物の実測は、友松1号遺跡調査担当者による。
- 5 鉄製品及び土器の一部については、株式会社島津テクノロジーに委託して、X線CT撮影及び蛍光X線による定性分析を実施した。
- 6 本書の執筆は、IIを石井が、その他を藤岡が行い、石井の協力を得て藤岡が編集した。
- 7 発掘調査及び整理作業にあたっては、広島大学教授野島永、比治山大学教授安間拓巳、島根県埋蔵文化財調査センター調整監角田徳幸の各氏にご教示いただいた。
- 8 遺物実測図番号と写真図版の遺物番号は同一である。
- 9 第1図は、国土交通省国土地理院発行の1:25,000地形図『安芸西条』を使用した。
- 10 本書で使用した方位は、世界測地系座標北(国土座標第Ⅲ系)である。
- 11 本書で使用した遺構の表示記号は、次のとおりである。

S B : 竪穴住居跡、S K : 土坑、S D : 溝状遺構、S X : 性格不明遺構
- 12 調査で得られた資料については、すべて東広島市教育委員会で保管している。

# 目 次

I	はじめに	1
II	位置と環境	2
III	調査の概要	5
IV	遺構と遺物	9
1	概要	9
2	竪穴住居跡	9
3	土坑	16
4	溝状遺構	24
5	性格不明遺構	34
6	流路	44
7	遺構外出土遺物	46
	遺物観察表	48
V	まとめ	60
1	大型住居（S B 0 4）について	60
2	友松遺跡群の弥生集落について	62
3	中世遺構（S K 0 3）について	67
VI	おわりに	68

## 挿 図 目 次

- |      |                |      |                    |
|------|----------------|------|--------------------|
| 第1図  | 周辺遺跡分布図        | 第29図 | SD02出土遺物実測図③       |
| 第2図  | 友松遺跡群位置図       | 第30図 | SD02出土遺物実測図④       |
| 第3図  | 友松2・3号遺跡 遺構配置図 | 第31図 | SD02出土遺物実測図⑤       |
| 第4図  | 友松3号遺跡 遺構配置図   | 第32図 | SD02出土遺物実測図⑥       |
| 第5図  | SB01遺構実測図      | 第33図 | SD02出土遺物実測図⑦       |
| 第6図  | SB01出土遺物実測図    | 第34図 | SD03出土遺物実測図        |
| 第7図  | SB02遺構実測図      | 第35図 | SD04遺構実測図          |
| 第8図  | SB02出土遺物実測図    | 第36図 | SD04出土遺物実測図        |
| 第9図  | SB03遺構実測図      | 第37図 | SD05遺構実測図          |
| 第10図 | SB03出土遺物実測図    | 第38図 | SX01遺構実測図          |
| 第11図 | SB04遺構実測図①     | 第39図 | SX01出土遺物実測図①       |
| 第12図 | SB04遺構実測図②     | 第40図 | SX01出土遺物実測図②       |
| 第13図 | SB04出土遺物実測図    | 第41図 | SX01出土遺物実測図③       |
| 第14図 | SB05遺構実測図      | 第42図 | SX01出土遺物実測図④       |
| 第15図 | SK02・03遺構実測図   | 第43図 | SX01出土遺物実測図⑤       |
| 第16図 | SK03遺物出土状況図    | 第44図 | SX01出土遺物実測図⑥       |
| 第17図 | SK03出土遺物実測図①   | 第45図 | SX01出土遺物実測図⑦       |
| 第18図 | SK03出土遺物実測図②   | 第46図 | SX01出土遺物実測図⑧       |
| 第19図 | SD03・SK04遺構実測図 | 第47図 | SX01出土遺物実測図⑨       |
| 第20図 | SK05～SK11遺構実測図 | 第48図 | 流路遺構実測図            |
| 第21図 | SK05出土遺物実測図    | 第49図 | 流路出土遺物実測図          |
| 第22図 | SK07出土遺物実測図    | 第50図 | 遺構外出土遺物実測図①        |
| 第23図 | SK10出土遺物実測図    | 第51図 | 遺構外出土遺物実測図②        |
| 第24図 | SD01遺構実測図      | 第52図 | SB04建替の変遷          |
| 第25図 | SD01出土遺物実測図    | 第53図 | 友松2・3号遺跡 弥生時代の遺構   |
| 第26図 | SD02遺構実測図      | 第54図 | 友松1号遺跡SB01出土遺物実測図① |
| 第27図 | SD02出土遺物実測図①   | 第55図 | 友松1号遺跡SB01出土遺物実測図② |
| 第28図 | SD02出土遺物実測図②   |      |                    |

## 図 版 目 次

- 巻 頭 SK03出土の主な遺物
- 図版扉 遺跡から龍王山を眺む（南から）
- 図版 1 南側調査区調査前近景（南から）  
調査前近景（南西から）  
北側調査区調査前近景（西から）
- 図版 2 遺跡から西条盆地を眺む（西から）  
友松 3 号遺跡全景（上から）  
北側調査区全景（南西から）
- 図版 3 SB01完掘状況（北から）  
SB01遺物出土状況（東から）  
SB01遺物出土状況（東から）
- 図版 4 SB02完掘状況（南から）  
SB03完掘状況（南東から）  
SB03遺物出土状況（南東から）
- 図版 5 SB04・05完掘状況（西から）  
SB04・05完掘状況（上から）  
SB05完掘状況（西から）
- 図版 6 SK02・03完掘状況（南から）  
SK02完掘状況（南から）  
SK03完掘状況（南から）
- 図版 7 SK03ピット完掘状況（北から）  
SK03遺物出土状況（南から）  
SK03遺物出土状況（南東から）
- 図版 8 SK03遺物出土状況（南から）  
SK03炭化層検出状況（南から）  
SK03炭化層検出状況（南東から）
- 図版 9 SK04完掘状況（東から）  
SK05～11完掘状況（南東から）  
SK05・06完掘状況（東南から）
- 図版10 SK05完掘状況（東から）  
SK06完掘状況（南西から）  
SK06遺物出土状況（南西から）
- 図版11 SK07～10完掘状況（東から）  
SK10完掘状況（南西から）  
SK10遺物出土状況（南西から）
- 図版12 SD01完掘状況（南から）  
北側調査区全景（南西から）  
SD02完掘状況（南西から）
- 図版13 SD02完掘状況（北東から）  
SD02完掘状況（南西から）  
SD02北壁土層堆積状況（南から）
- 図版14 SK04・SD03完掘状況（東から）  
SD04完掘状況（北から）  
SX01完掘状況（東から）
- 図版15 南側調査区全景（南西から）  
流路完掘状況（南から）  
流路遺物出土状況（西から）
- 図版16 遺物（SB01・SB02・SB03・SB04・  
SD01・SD03）
- 図版17 遺物（SK03）
- 図版18 遺物（SK03）
- 図版19 遺物（SK03）
- 図版20 遺物（SK05・SK07・SK10・SD02）
- 図版21 遺物（SD02）
- 図版22 遺物（SD02）
- 図版23 遺物（SX01）
- 図版24 遺物（SX01）
- 図版25 遺物（SX01）
- 図版26 遺物（SX01・流路・表採）
- 図版27 遺物（施文技法）



## I はじめに

平成29年3月7日及び同年12月18日付けで、東広島市教育委員会教育長（以下、「市教委」という。）に対して、約4,105㎡の寺家友松住宅開発事業について文化財等の有無及び取扱いについて協議書が提出された。

これを受けて、市教委では分布調査を実施し、隣接地で広く遺跡が確認されていることなどから、開発計画範囲全域について試掘調査が必要である旨回答した。その後、平成30年3月6日付けで試掘調査の依頼があり、試掘調査を実施した結果、すでに確認され、一部発掘調査を実施している「友松3号遺跡」が当該開発計画範囲全域にも広がっていることを確認し、その旨回答した。

事業者であるサンユープランニング株式会社代表取締役山下雅司（以下、「事業者」という。）との間で、遺跡の保存について協議した結果、一部は開発計画から除外することとし、その他予定どおり開発計画を進める範囲については可能な限り盛土保存することとなった。その上で、開発計画を進める範囲約3,887㎡について、事業者から平成30年5月25日付けで埋蔵文化財の発掘の届け出が提出された。その内、止むを得ず切土となる宅地部分の一部と道路部分の約1,350㎡について発掘調査を実施するよう通知した。

平成30年10月15日付けで事業者から市教委に対して発掘調査の依頼があり、平成31年度に発掘調査、平成32年度に整理作業及び報告書作成作業を実施する旨、回答した。

事業者と東広島市との間で友松住宅開発事業に係る発掘調査について、平成31年4月11日付けで平成31年度に現地調査及び基礎整理作業を実施する業務委託契約及び平成32年度に整理作業及び報告書作成作業を実施する覚書を締結し、現地調査は令和元年5月7日から9月3日まで約4か月間実施した。また、令和2年4月3日付けで整理・報告書作成作業を実施する業務委託契約を締結し、計画どおり整理・報告書作成作業を実施した。

なお、調査区域の遺跡の全容がほぼ明らかとなった7月29日～31日の3日間、調査を行っている時間帯で随時参加形式による遺跡現地説明会を開催し、地元住民の方をはじめ市内外から延べ132人の参加者があった。夏休み期間中ということもあり、小学生から高校生まで子どもたちの参加もあり、広く遺跡に触れる機会となった。

本書は、以上のような経緯を経て実施した発掘調査の成果をまとめたものである。調査にあたっては、事業者、株式会社明成(代表取締役尾原睦明)をはじめ、地域の方々に多大なご協力をいただいた。記して感謝の意を表したい。

なお、友松遺跡群について、これまで「友松遺跡」「友松2号遺跡」「友松3号遺跡」「友松4号遺跡」「友松5号遺跡」とそれぞれ呼称していたが、今後は「友松遺跡」を「友松1号遺跡」と呼称することとする。



## Ⅱ 位置と環境

友松3号遺跡は、東広島市西条町寺家に所在する。東広島市は、広島県南部のほぼ中央に位置し、標高約200～400mの西条盆地など比較的平坦地に恵まれている。北は特別天然記念物であるオオサンショウウオが生息する自然豊かな豊栄町から、南は海に面し瀬戸内の島々を擁する安芸津町まで、面積635.16km<sup>2</sup>、人口約19万人の都市である。本遺跡のある寺家周辺の地域は、古代から山陽道が通り、現在も山陽自動車道、JR山陽本線、東西に延びる国道2号線及び南北に延びる国道375号線と交差する国道486号線(旧国道2号線)が通るなど交通の要衝となっている。平成29(2017)年にはJR寺家駅が開業し、宅地造成工事など各種開発事業が現在も進められている。本遺跡は、西条盆地の北側にある龍王山(標高575.1m)の南西方向の山裾の低丘陵の先端に立地し、西側には黒瀬川が南東方向に流れている。現在1～5号まで確認されている友松遺跡群の一つである。

東広島市は県内でも遺跡の多い地域として知られており、旧石器時代から近代に至るまで多数確認されているが、特に弥生時代に遺跡が急増している。中でも西条町から高屋町にかけて特に多くの弥生・古墳時代の遺跡が確認されている。

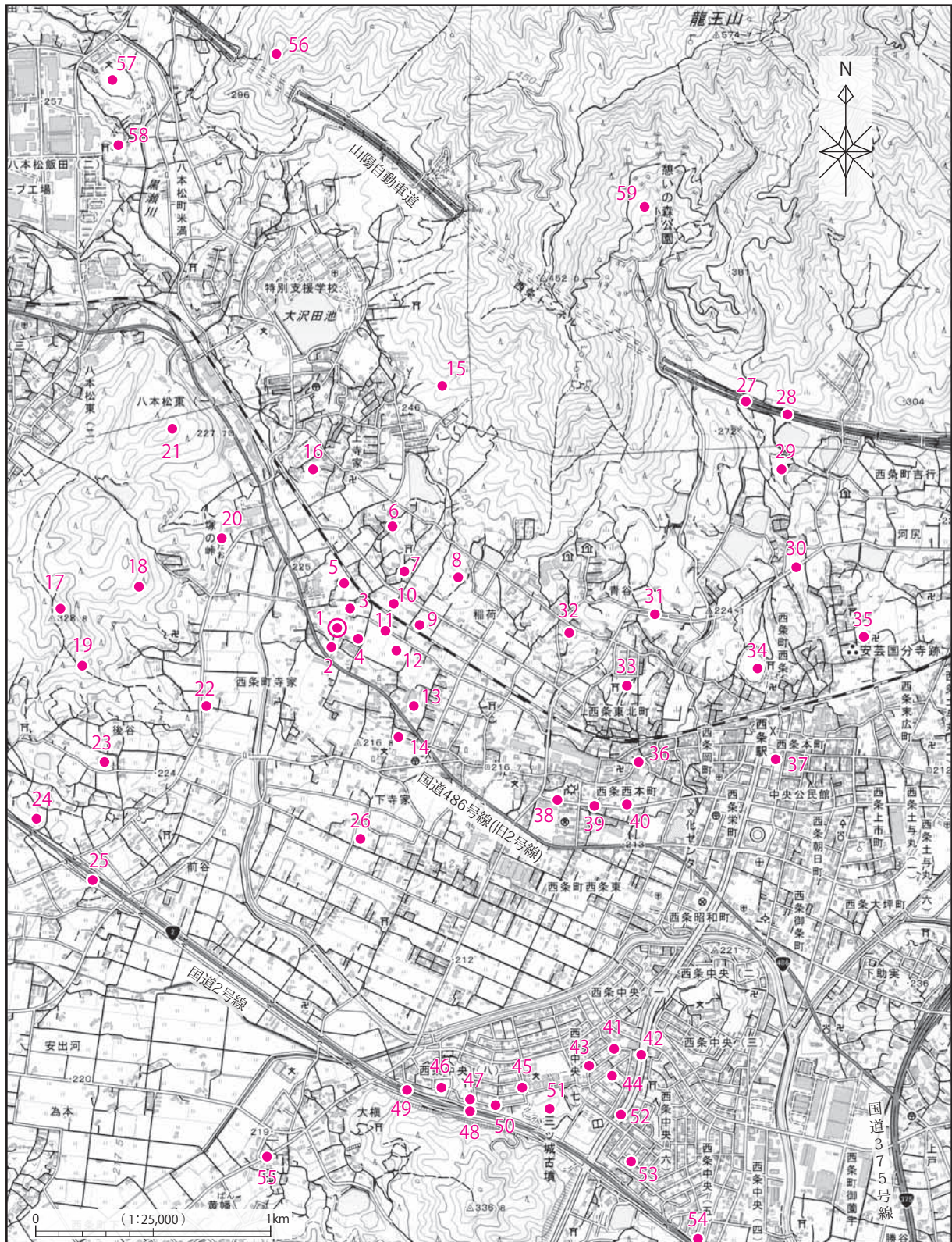
旧石器時代や縄文時代の遺跡の確認数は少ないが、五楽遺跡<sup>(27)</sup>や鐘鋳原池遺跡<sup>(29)</sup>などで旧石器や縄文土器が採集されている。広島大学構内の西ガガラ遺跡では、旧石器時代のナイフ形石器や住居跡が検出されている他、三ッ城第1号古墳<sup>(51)</sup>の墳丘盛土からも縄文晩期の土器や石器が出土している。

弥生時代前期から中期の遺跡は少ないが、前期では黄幡1号遺跡<sup>(55)</sup>から土器とともに多量の木器が出土している。中でも水路を構成する木樋とされていた大型の木製品は近年、準構造船の一部を木樋として再利用されたものであることが確認された。その他、団子遺跡<sup>(26)</sup>、諏訪神社南遺跡<sup>(36)</sup>、小西遺跡<sup>(38)</sup>では集落跡が確認されている。中期では、本遺跡と同じ遺跡群の友松1号<sup>(2)</sup>・2号<sup>(3)</sup>遺跡、諏訪神社周辺遺跡<sup>(33)</sup>で竪穴住居跡や溝状遺構などの集落跡が確認されている。諏訪神社周辺遺跡では平成29年の発掘調査でガラス製小玉が出土している。後期に入ると、遺跡は市域全体に拡大して増加する。その中でも横田1号遺跡<sup>(8)</sup>では独立棟持柱建物や細形銅剣の破片、ガラス製管玉やガラス製小玉が出土し、大槇3号遺跡<sup>(49)</sup>では細形銅戈転用の斧やベッド状遺構が検出されていることから、この二つの遺跡は地域社会で上位の地位を占めていたと考えられる。

古墳時代の集落跡は、本遺跡(平成24年度調査)<sup>(1)</sup>や横田1号遺跡、弥生時代中期から続く助平2号遺跡<sup>(50)</sup>などがある。古墳は、5世紀に県内最大の前方後円墳を含む史跡三ッ城古墳が築造される。その近隣には、三ッ城第1号古墳の埴輪に類似した埴輪が出土している大槇第1号古墳<sup>(47)</sup>がある。6世紀代になると大型の石室を持つ古墳が多く築造され、龍王山の麓に位置する花が迫古墳群<sup>(59)</sup>や新木古墳群<sup>(15)</sup>がある。

古代には、安芸国分寺<sup>(35)</sup>が建立され、古代山陽道は国分寺の南側を通過していたと考えられている。大地面遺跡<sup>(30)</sup>では铸造や鍛冶に関わる工房の一部と考えられる建物跡が確認され、青谷1号遺跡<sup>(31)</sup>では円面硯や転用硯が出土しており、この周辺は古代において重要な地域であったと考えられる。





- 1 友松 3号遺跡 2 友松 1号遺跡 3 友松 2号遺跡 4 友松 4号遺跡 5 友松 5号遺跡 6 福原遺跡 7 福原南遺跡 8 横田 1号遺跡 9 横田 2号遺跡  
 10 湯谷迫 2号遺跡 11 貞松遺跡 12 貞松 2号遺跡 13 有吉遺跡 14 菰原 1号遺跡 15 新木古墳群 16 狐川 1号遺跡 17 団子山 2号遺跡  
 18 団子山 3号遺跡 19 団子山 4号遺跡 20 塚の峠遺跡 21 塚の峠鉄塔下遺跡 22 田中遺跡 23 祇園遺跡 24 寺家城跡 25 近信遺跡 26 団子遺跡  
 27 五楽遺跡 28 鐘鑄原上池遺跡 29 鐘鑄原池遺跡 30 大地面遺跡 31 青谷 1号遺跡 32 青谷 2号遺跡 33 諏訪神社周辺遺跡 34 御建遺跡  
 35 史跡安芸国分寺跡 36 諏訪神社南遺跡 37 四日市遺跡 38 小西遺跡 39 山崎 2号遺跡 40 山崎 1号遺跡 41 助平 3号遺跡 42 古市 1号遺跡  
 43 古市 2号遺跡 44 古市 3号遺跡 45 助平 1号遺跡 46 大槨 1号遺跡 47 大槨第 1号古墳 48 大槨 2号遺跡 49 大槨 3号遺跡 50 助平 2号遺跡  
 51 史跡三ツ城古墳 52 狐が城跡 53 古市 4号遺跡 54 道照遺跡 55 黄幡 1号遺跡 56 煎汁が城跡 57 徳政遺跡 58 棋の前遺跡 59 花が迫古墳群

第 1 図 周辺遺跡分布図



中世になると、寺家城跡<sup>(24)</sup>や祇園遺跡<sup>(23)</sup>、狐が城跡<sup>(52)</sup>、煎汁が城跡<sup>(56)</sup>、道照遺跡<sup>(54)</sup>などで山城や城館跡が確認されている。近隣の貞松遺跡<sup>(11)</sup>、山崎2号遺跡<sup>(39)</sup>では中世から近世の遺構が検出されている。御建遺跡<sup>(34)</sup>では中世山陽道の一部と推定される道路遺構が確認されている。

近世以降の遺跡としては、屋敷跡が検出された近信遺跡<sup>(25)</sup>がある。近世山陽道沿いに発展した宿場町である四日市宿に係る四日市遺跡<sup>(37)</sup>では戦国時代から近代までの遺構と遺物がこれまでも多く確認されており、現在も道路事業に係る発掘調査が行われている。

※（ ）内の番号は、第1図周辺遺跡分布図に記載する番号と一致する。

## 参考文献

- 津田真琴編 『友松2・3号遺跡発掘調査報告書ービバーチェ寺家宅地造成工事に係る発掘調査ー』 東広島市教育委員会 平成26(2014)年
- 石垣敏之・盛菜つみ編 『友松5号遺跡発掘調査報告書ー(仮)寺家住宅団地造成工事に係る発掘調査ー』 東広島市教育委員会 平成30(2018)年
- 藤野次史編 『広島大学東広島キャンパス埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』 広島大学環境保全委員会埋蔵文化財調査室 平成16(2004)年
- 石井隆博編 『史跡三ッ城古墳発掘調査報告書』 財団法人東広島市教育振興事業団 平成16(2004)年
- 鍛冶益生編 『黄幡1号遺跡発掘調査報告書』 財団法人東広島市教育文化振興事業団 平成17(2005)年
- 中山 学編 『団子遺跡発掘調査報告書』 東広島市教育委員会 平成16(2004)年
- 石井隆博編 『諏訪神社南遺跡発掘調査報告書』 東広島市教育委員会 平成17(2005)年
- 藤岡孝司編 『小西遺跡発掘調査報告書』 財団法人東広島市教育文化振興事業団 平成10(1998)年
- 妹尾周三編 『諏訪神社周辺遺跡発掘調査報告書』 東広島市教育委員会 平成7(1995)年
- 松尾祥子編 『横田1号遺跡発掘調査報告書』 大成エンジニアリング株式会社 平成24(2012)年
- 道上康仁編 『大槓遺跡群 西条バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』 建設省中国地方建設局広島国道工事事務所・財団法人広島県埋蔵文化財調査センター 昭和60(1985)年
- 植田千佳穂編 『西条第一土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(Ⅰ)』 広島県教育委員会・(財)広島県埋蔵文化財調査センター 昭和58(1983)年
- 藤岡孝司編 『西条第一土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』 東広島市教育委員会 平成5(1993)年
- 吉野健志編 『大地面遺跡発掘調査報告書ー都市計画道路吉行飯田線街路事業に係る発掘調査ー』 財団法人東広島市教育文化振興事業団 平成20(2008)年
- 石井隆博編 『青谷1号遺跡発掘調査報告書』 財団法人東広島市教育文化振興事業団 平成14(2002)年
- 松村昌彦・新木清二編 『寺家城遺跡・近信遺跡』 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター 平成5(1993)年
- 鍛冶益生編 『道照遺跡 西条バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』 広島県教育委員会・(財)広島県埋蔵文化財調査センター 昭和57(1982)年
- 石垣敏之編 『貞松遺跡発掘調査報告書ーアサヒ分譲住宅開発事業に係る発掘調査ー』 東広島市教育委員会 平成21(2009)年
- 吉野健志編 『山崎2号遺跡発掘調査報告書』 財団法人東広島市教育文化振興事業団 平成11(1999)年
- 吉野健志編 『御建遺跡発掘調査報告書Ⅰー都市計画道路西条駅北線道路改良事業に係る発掘調査ー』 財団法人東広島市教育文化振興事業団 平成22(2010)年
- 中山 学編 『四日市遺跡発掘調査報告書』 東広島市教育委員会 平成14(2002)年

### Ⅲ 調査の概要

今回調査を実施した範囲は、現況は田で、北側は標高およそ222.3～223.0mの低丘陵上に立地し、南側は一段低く標高およそ220.5mの谷部に立地する。

調査は、試掘調査の結果を基に、まずは重機により遺構検出面まで表土(耕作土+床土)を掘削し、その後方眼測量及び水準測量を実施した。重機の提供及び測量については、事業者の提供を受けた。なお、当初の測量は世界測地系座標北(国土座標第Ⅲ系)によるものではなかったため、調査終了後にデータを修正し、本報告書では世界測地系座標北(国土座標第Ⅲ系)を使用している。

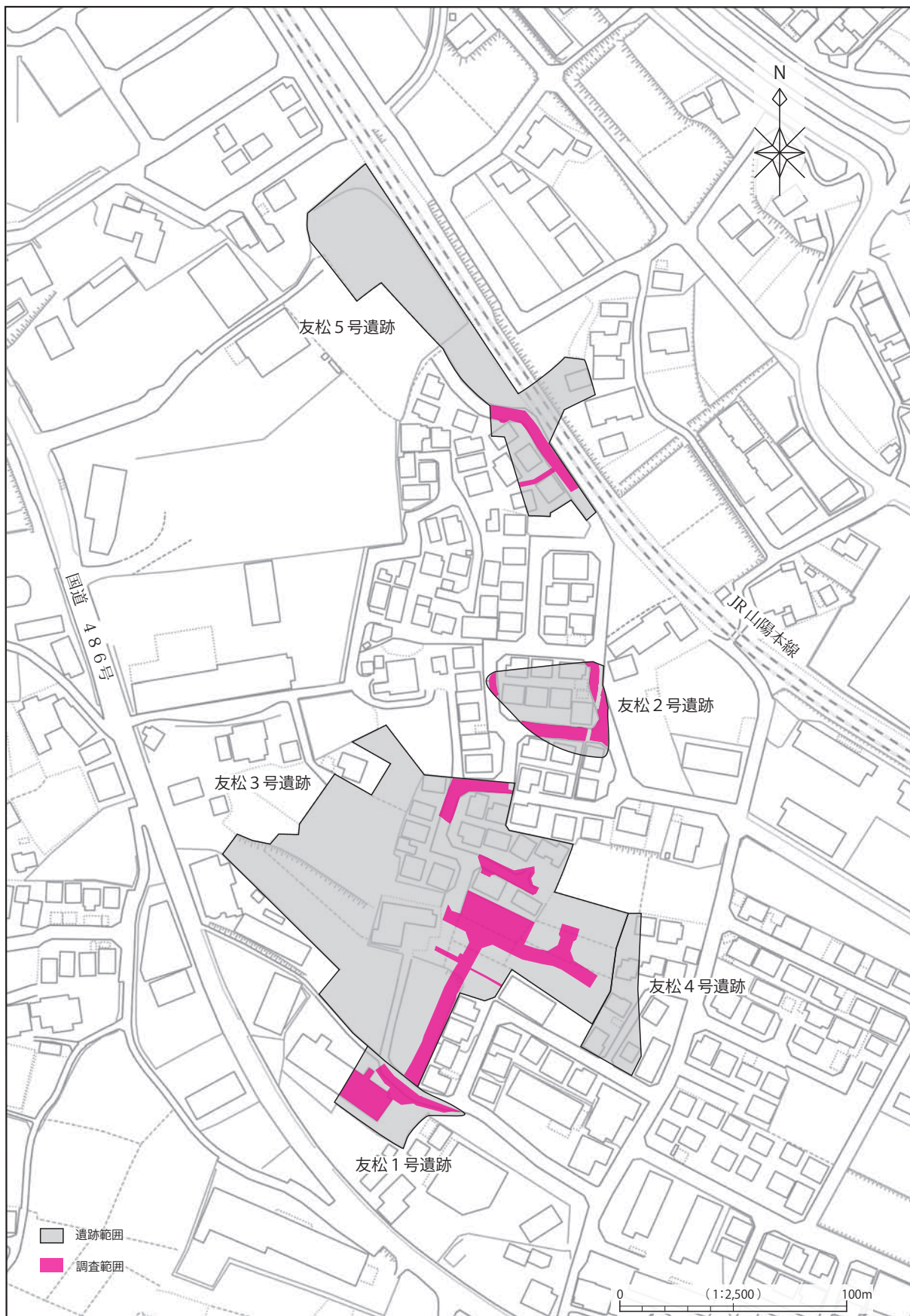
梅雨時を考慮して、調査は2段階で実施することとし、まずは南側の谷部から開始した。X座標-173,540mあたりから南側が谷部となるが、縁辺部は削平されて絶壁になっていることから、本来の地形は、さらに南に低丘陵が延びて谷に向かっていたものと考えられる。したがって、この縁辺部に近いほど大きく削平されている可能性が高い。約30～70cmの表土(耕作土+床土)直下に、灰白色粘土層の遺構検出面を検出したが、晴天が続くと非常に堅く、雨天の後は歩くと波打つ程に柔軟になる状況であった。遺構は、調査区南側で流路を検出したが、南端は検出できず、南に隣接する道路下にさらに続くものと考えられるが、道路を挟んで南側に隣接する友松1号遺跡の北側で調査区域外へ展開する不定形な落ち込みを確認していることから、これに続く可能性も考えられる。南側の谷部については、降雨により、雨水が大量に貯水され、民家や道路に隣接して危険性もあることから、調査終了後直ちに埋め戻しを行った。

続いて、調査区北側の調査を実施した。約30～50cmの表土(耕作土+床土)直下は、黄褐色土層の遺構検出面となるが、調査区東側約20mの範囲は浅い谷地形となっており、黒灰色粘土層である。なお、田が段状に造成されていたことから、大型住居跡などを検出した面から南側は一段削平されており、本来存在していた遺構が一部は削平されている可能性も考えられる。また、大型住居跡などを検出した面も遺構の遺存状況などから当時の生活面が削平されている可能性が高く、全体的に遺構の遺存状況は決して良好とは言えない状況である。

調査は、表土除去の後、遺構の検出作業、精査、そして図面、写真などによる記録を行い、遺構の精査をすべて終了した後、空中写真撮影を行った。

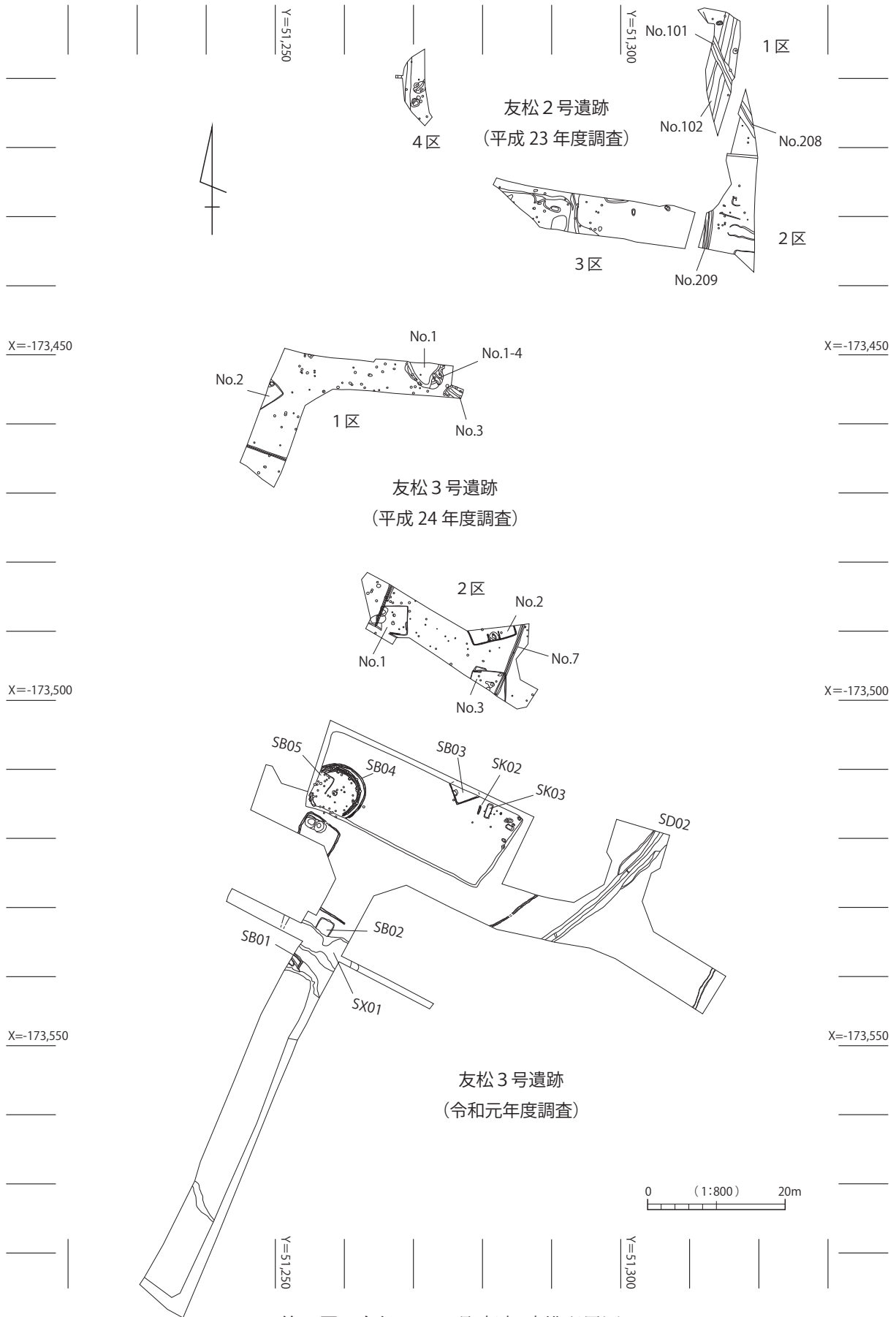
本書で使用している遺構表示の略号は、「S B」が竪穴住居跡、「S K」が土坑、「S D」が溝状遺構、「S X」が性格不明遺構である。本来なら、平成24年度に調査を実施し、平成25年度に発掘調査報告書を刊行した「友松2・3号遺跡」の遺構記号に準拠し、遺構番号は通し番号とすべきであるが、今回の調査により、友松2号遺跡とも本来同一の遺跡として捉えられることとなったが、友松2号遺跡と友松3号遺跡については遺跡ごとに遺構番号が付されていることなどから、混乱を避けるため、遺構記号及び遺構番号を新たに付して報告することとした。

なお、挿図の縮尺は、遺構は原則として、S B・S Xが1/60、S Kが1/40、S D・流路が1/100、遺物は土器、鉄製品、石製品が1/3(一部1/4・1/8)、土製品が1/4、石器(鏃・剥片等)が2/3である。

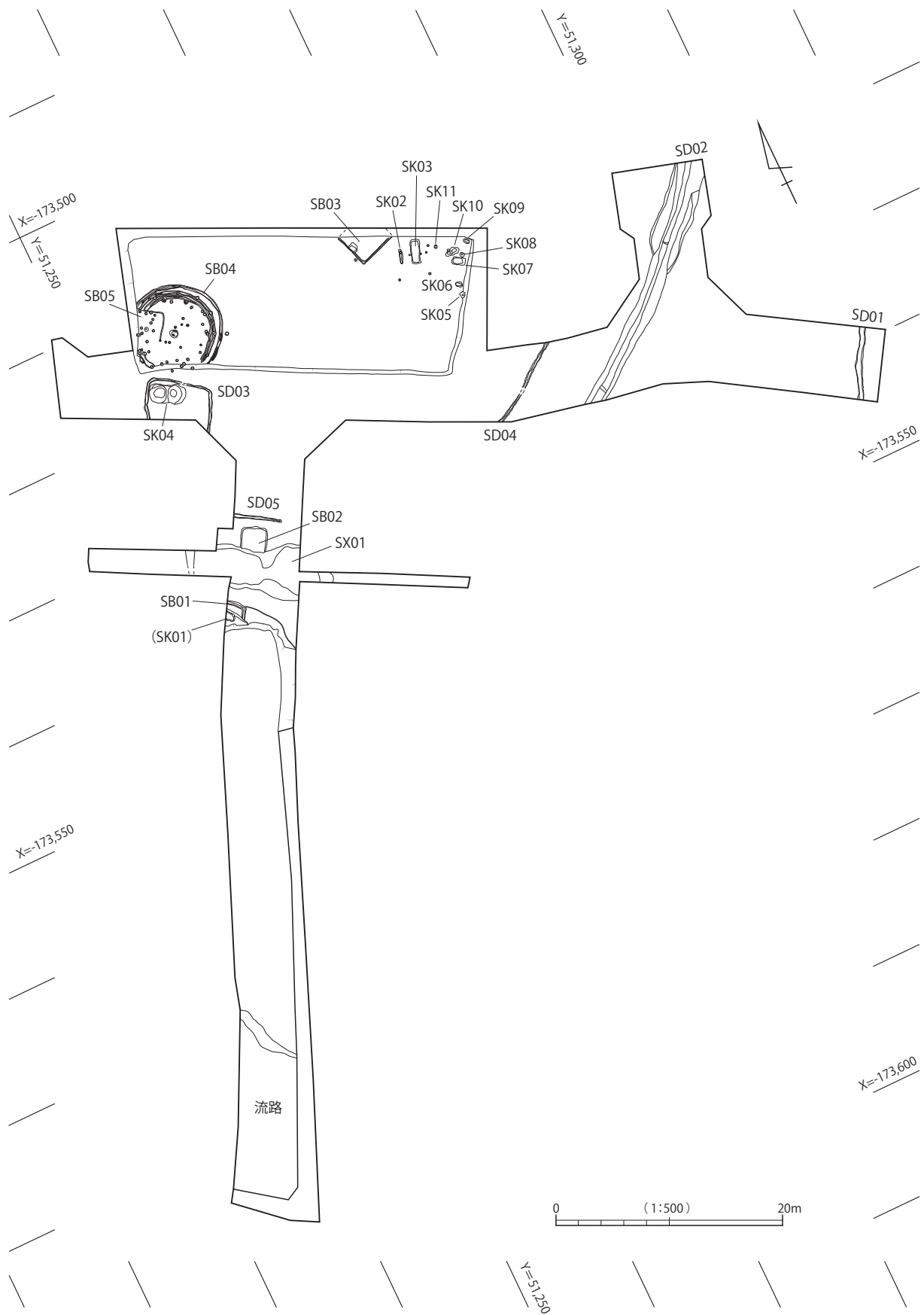


第2図 友松遺跡群位置図





第3図 友松2・3号遺跡 遺構配置図



第4図 友松3号遺跡 遺構配置図

## IV 遺構と遺物

### 1 概要

遺構は、主として北側の低丘陵上に展開しているが、調査区東側約20mの範囲は小さな谷地形となっており、遺構は、東側と南側の谷部に接する尾根の縁辺部に構築されている。

南側の谷部の遺構については、北半分が大きく削平を受けている可能性があることなどから、調査区南端部で検出した流路のみである。また、低丘陵上にあたる北側の調査区についても、耕作地の整地等により削平を受けており、遺構の遺存は決して良好とは言えない状況で、段状に削平されている範囲には遺構が存在していた可能性も否定できない。

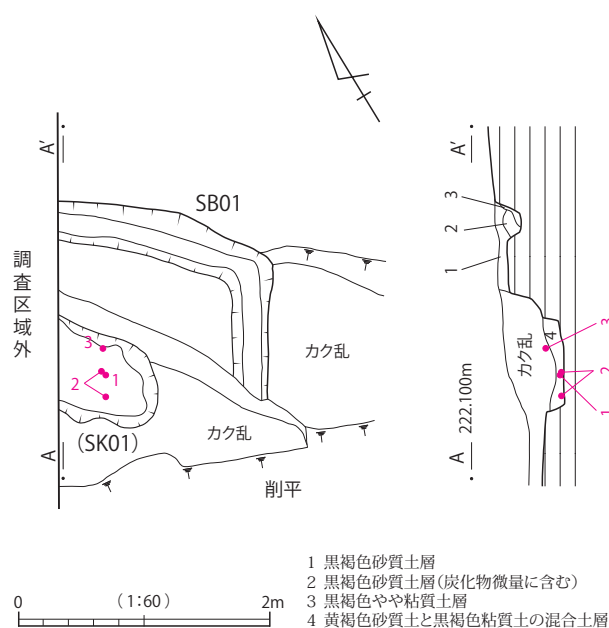
検出された遺構は、竪穴住居跡4軒、土坑10基、溝状遺構5条、性格不明遺構1基、流路1条である。調査面積に対して決して多い検出状況とは言えず、各遺構の所属時期についても、弥生時代前期から中世まで多岐にわたっており、今回の調査区域で各時代の様相を明確にすることは難しい状況にある。

出土した遺物は、弥生土器、土師器、須恵器、土師質土器などの土器、石器及び鉄製品、石製品、土製品などがあり、遺構からの出土が多いが、遺構の遺存状況の関係もあり、小破片が多い。また、石器や石製品は未成品や欠損品、剥片なども多い。

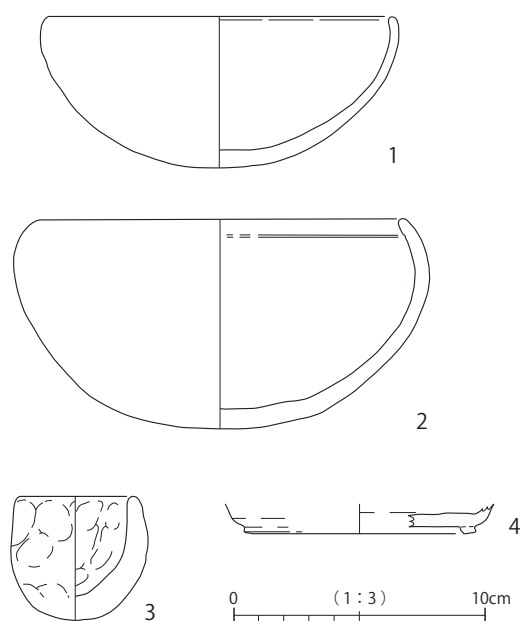
### 2 竪穴住居跡

#### ① SB01

調査区中央部あたりの谷部に向かう縁辺部に位置する。遺構の西半部は調査区域外に展開し、また



第5図 SB01遺構実測図



第6図 SB01出土遺物実測図

南側は大きく削平されているため、全容は明確にできなかった。また、遺構上層部も削平を受けて攪乱されていたことから、当初SB01とSK01は別遺構として調査を進めたが、SB01が竪穴住居跡と考えられることから、SK01は竪穴住居内に所在する土坑の可能性が高く、同一遺構として扱うこととする。

検出できたのは北東コーナー部で、検出した範囲で東西約1.7m、南北約1.2m、深さ約0.1mを測り、方形の平面形を呈すると考えられる竪穴住居跡である。壁直下には、幅約30cm、深さ約10cmの壁溝が巡る。SK01は北東コーナー部近くに位置し、検出できた範囲で東西約0.8m、南北約0.7m、深さ約0.4mの土坑で、貯蔵穴と考えられる。その他、柱穴等は検出していない。

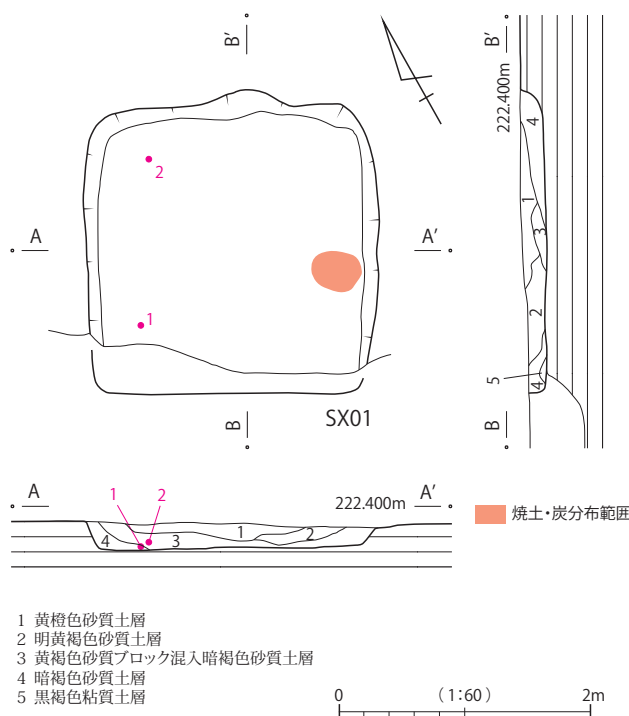
遺物は、SK01の覆土から土師器がほぼ完形の状態で出土している。1、2は椀形土器で、内外面ともやや摩滅している。3は手づくね土器である。4はSB01の覆土から出土した須恵器で、高台付杯形土器である。その他、SB01からは小破片が出土しており、壺形土器や高杯形土器と考えられるものもあるが、図示し得ない。

## ② SB02

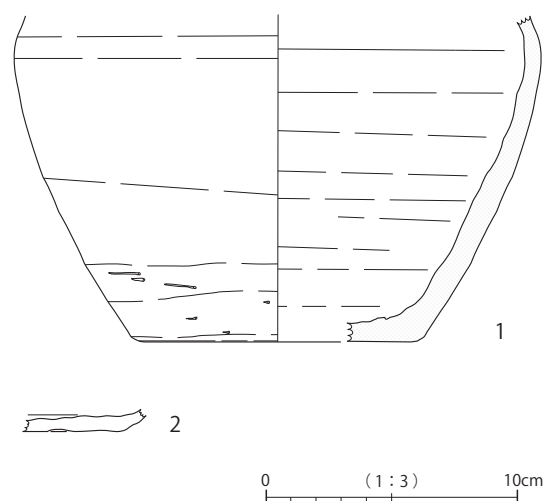
調査区中央部の谷部に向かう縁辺部近くに位置する。南壁部分はSX01を切って構築している。

東西約2.3m、南北約2.3m、深さ約0.2mを測り、方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。北壁中央部には、10cm程度の浅い掘り込みが認められることから、焼土や構築材などの痕跡は認められないものの、カマドが構築されていた可能性がある。また、東壁中央部直下には、焼土や炭の分布が認められたが、壁は特に特徴は認められない。その他、柱穴等は検出していない。

遺物は、1は須恵器の壺形土器、2は土師器の杯形土器である。その他、土師器、須恵器の小破片が覆土から出土しているが、数量的には少ない。



第7図 SB02遺構実測図



第8図 SB02出土遺物実測図

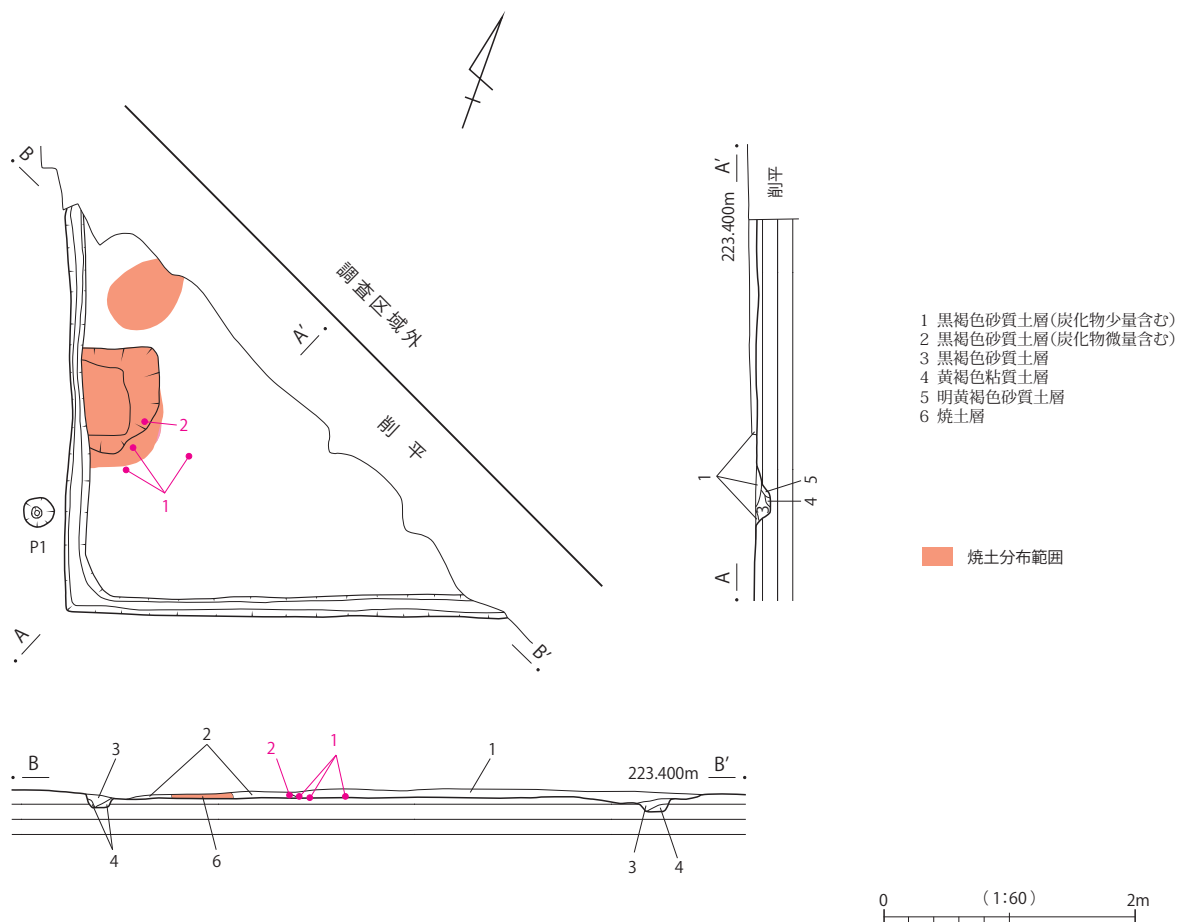


③ SB03

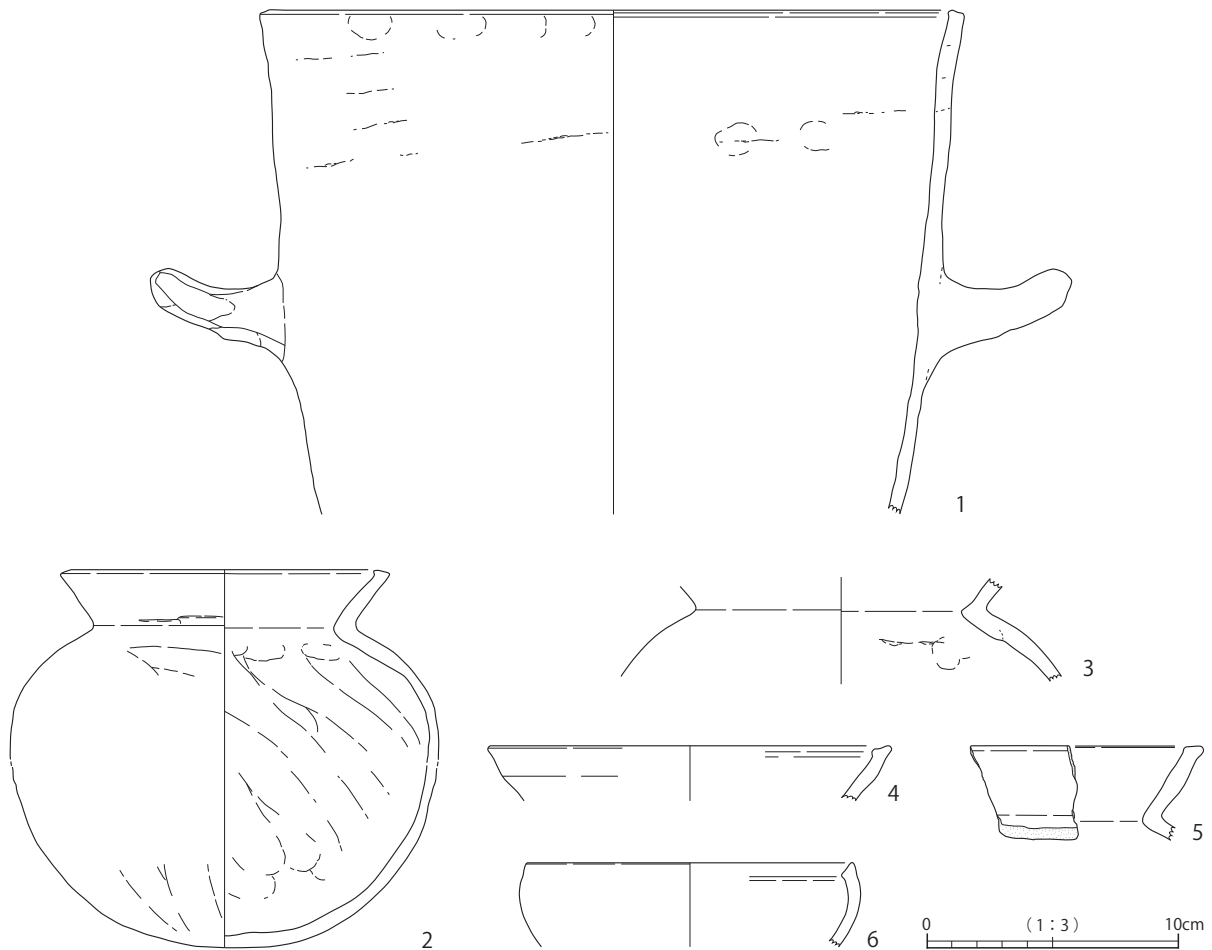
調査区北端に位置し、北半部は攪乱を受けているとともに、調査区域外に展開するため、全容は明確にできなかった。しかし、西壁の最北部は壁がわずかに東側に屈曲する状況が認められたことから、南北の規模はほぼ明らかにすることができた。

東西約3.5m以上、南北約3.3m、深さ約0.05mを測り、方形の平面形を呈すると考えられる竪穴住居跡である。壁直下には、幅約15cm、深さ約5cmの壁溝が巡っている。西壁中央部直下には、南北約0.8m、東西約0.6m、深さ約0.1mの掘り込みが認められ、焼土が多量に含まれていることから、構築材などの痕跡は認められないものの、カマドが構築されていたものと考えられる。また、西壁の外側に隣接してP1を検出した。径約25cm、深さ約25cmを測り、円形の平面形を呈するピットであるが、本遺構との関連性は不明である。なお、その他柱穴等は検出していない。

遺物は、大半はカマド周辺から出土しており、本来は完形あるいは完形に近い状態で廃棄されていた可能性があるが、遺構の上半部が削平されていたため、遺存状況は決して良好とは言えない。いずれも土師器で、1は甑形土器、2～5は甕形土器、6は椀形土器である。甕形土器はいずれも小形に属するものである。



第9図 SB03 遺構実測図



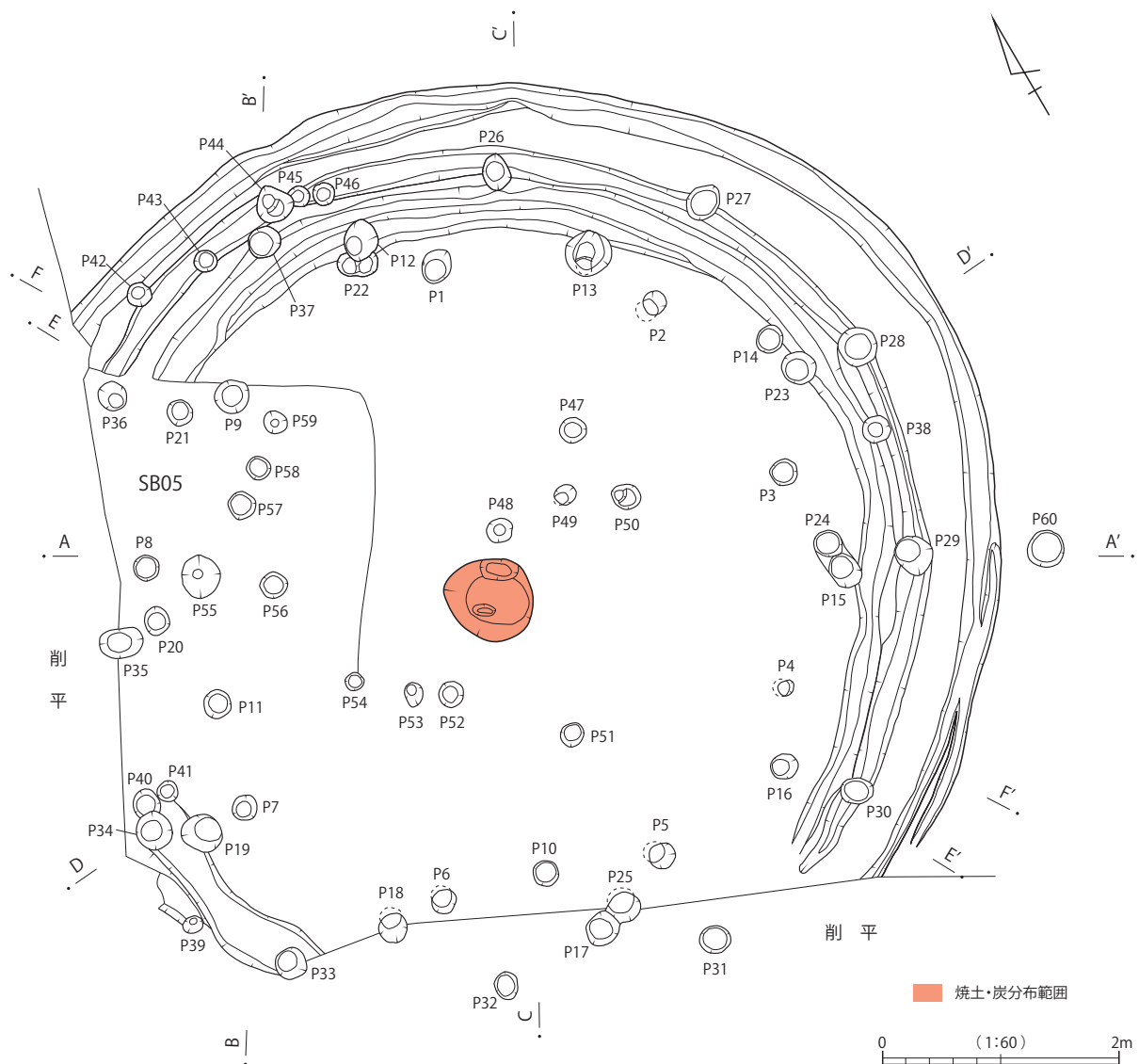
第10図 SB03 出土遺物実測図

#### ④ SB04

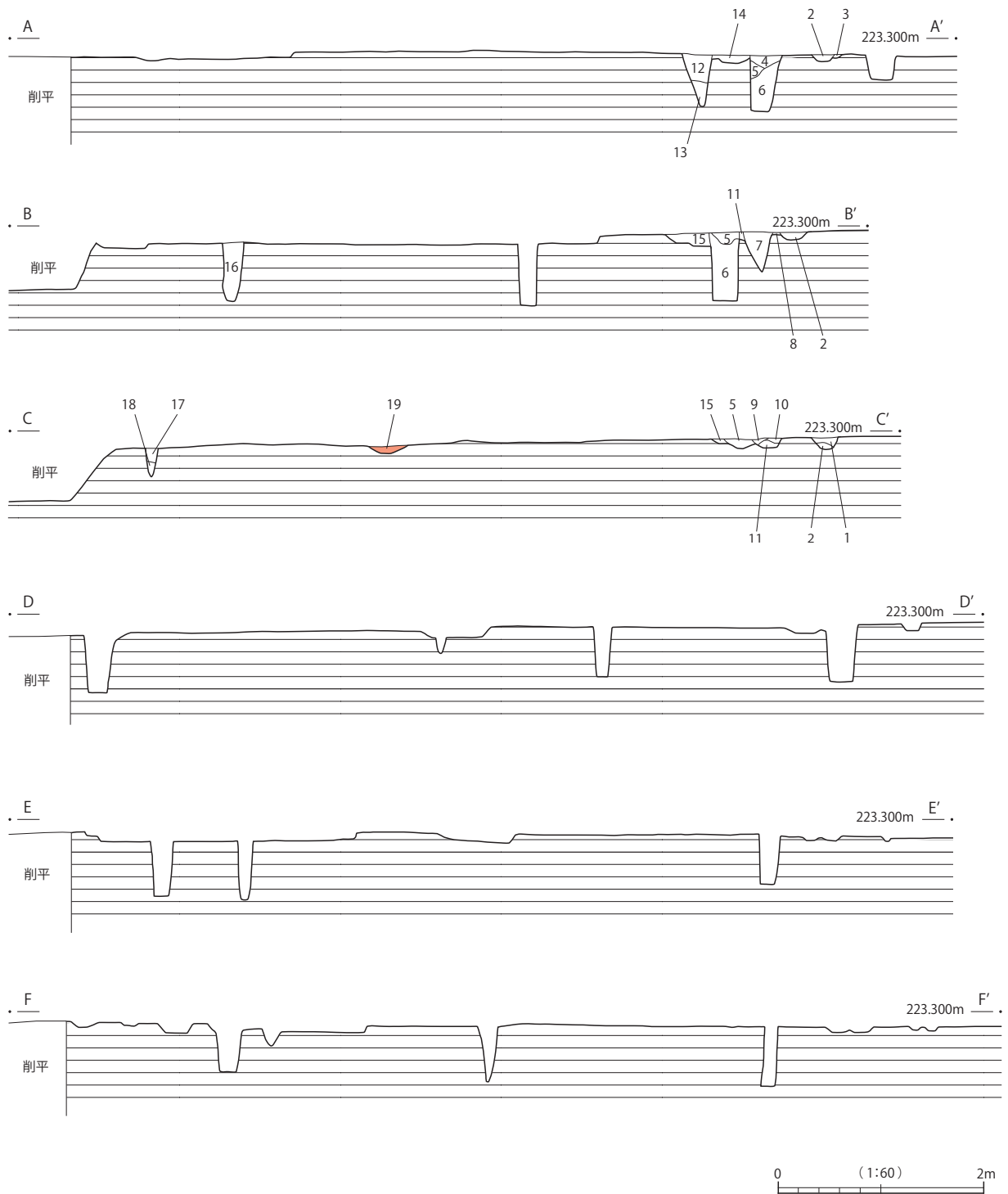
調査区西端に位置し、西側及び南側は削平されているため、全容は把握できないが、南側は柱穴が残存しているため、全体の規模は推定できる。また、遺構上層部は削平されて、床面の露呈した範囲が多い状況であった。なお、西側の一部は、SB05によって切断されている。

径約8.5m、深さ約0.05mを測り、円形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁直下から内側に向かって3重の溝が巡っており、内側から順に1巡目、2巡目、壁側を3巡目とすると、1巡目が幅約25～40cm、深さ約5cm、2巡目が幅約15～25cm、深さ約5cm、3巡目が幅約25～30cm、深さ約5cmを測る。1巡目と3巡目は、一部が2段になって広がっている。また、各溝の内側に沿うように円形に配する柱穴を検出している。まず、内側の1巡目の溝に沿う形で検出した支柱穴はP1～P9の9本で、径15～30cm、深さそれぞれ65cm、64cm、62cm、59cm、65cm、58cm、58cm、47cm、45cmを測り、柱間の距離は1.65～2.2m、平均1.85mを測る。なお、P2・P4～P6は、住居の中央に向かって掘り込まれている。また、P10、P11の2本はこれらを補完する柱穴と考えられ、径約20cm、深さそれぞれ30cm、47cmを測る。2巡目の溝に沿う形で検出した支柱穴はP12～P21の10本で、径約20～40cm、深さそれぞれ67cm、57cm、59cm、57cm、45cm、57cm、56cm、57cm、62cm、60cmを測り、

柱間の距離は1.7～2.05m、平均1.86mを測る。なお、P12・P13・P18・P19は、住居の中央に向かって掘り込まれている。また、P22～P25の4本はこれらを補完する柱穴と考えられ、径20～30cm、深さそれぞれ60cm、55cm、26cm、56cmを測る。P22・P24・P25はそれぞれP12・P15・P17に接して掘り込まれ、また、P25は住居の中央に向かって掘り込まれている。壁直下の3巡目の溝に沿う形で検出した柱穴はP26～P37の12本で、径25～30cm、深さそれぞれ56cm、68cm、53cm、59cm、50cm、57cm、60cm、56cm、59cm、58cm、54cm、62cmを測り、柱間の距離は1.6～2.1m、平均1.83mを測る。P29・P36は住居の中央に向かって掘り込まれている。また、P38～P46の9本はこれらを補完する柱穴と考えられ、径20～30cm、深さそれぞれ23cm、21cm、25cm、13cm、20cm、28cm、39cm、28cm、30cmを測る。その他P47～P54を検出しており、径15～20cm、深さそれぞれ26cm、54cm、48cm、63cm、50cm、59cm、48cm、43cmを測る。その他P55～P59は、径20～30cm、深さそれぞれ27cm、43cm、17cm、57cm、15cmを測る。これらのピットは、S B 0 5 に付随する可能性



第11図 SB04 遺構実測図①

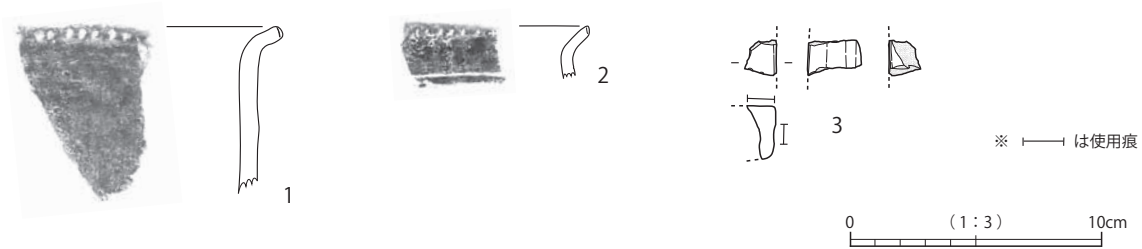


- |                       |                                 |
|-----------------------|---------------------------------|
| 1 黒褐色砂質土層             | 11 黄褐色ブロック混入黒色粘質土層              |
| 2 明黄褐色ブロック混入黒褐色砂質土層   | 12 明黄褐色粘質土と黒褐色粘質土の混合土層(炭化物少量含む) |
| 3 黒色砂質土層              | 13 濃黄褐色砂質土層                     |
| 4 黒色粘質土層              | 14 明黄褐色ブロック混入黒褐色粘質土層            |
| 5 黒褐色粘質土と明黄褐色粘質土の混合土層 | 15 褐色砂質土層                       |
| 6 黒褐色粘質土層(炭化物少量含む)    | 16 黒褐色砂質土層                      |
| 7 明黄褐色ブロック混入暗褐色砂質土層   | 17 黄褐色粘質土と黒褐色粘質土の混合土層           |
| 8 黒褐色粘質土層             | 18 褐色粘質土層                       |
| 9 明褐色ブロック混入濃黄褐色砂質土層   | 19 黒褐色粘質土層(焼土含む)                |
| 10 暗褐色砂質土層            |                                 |

第12図 SB04 遺構実測図②

もあり、性格は不明であるが、P56とP58は柱穴の可能性が高い。また、本遺構のほぼ中央部には、径約70cm、深さ7cm程度の浅い掘り込みを有する炉を検出している。その他、東壁の外側でP60を検出しており、径約30cm、深さ約25cmを測るが、本遺構との関連性は不明である。

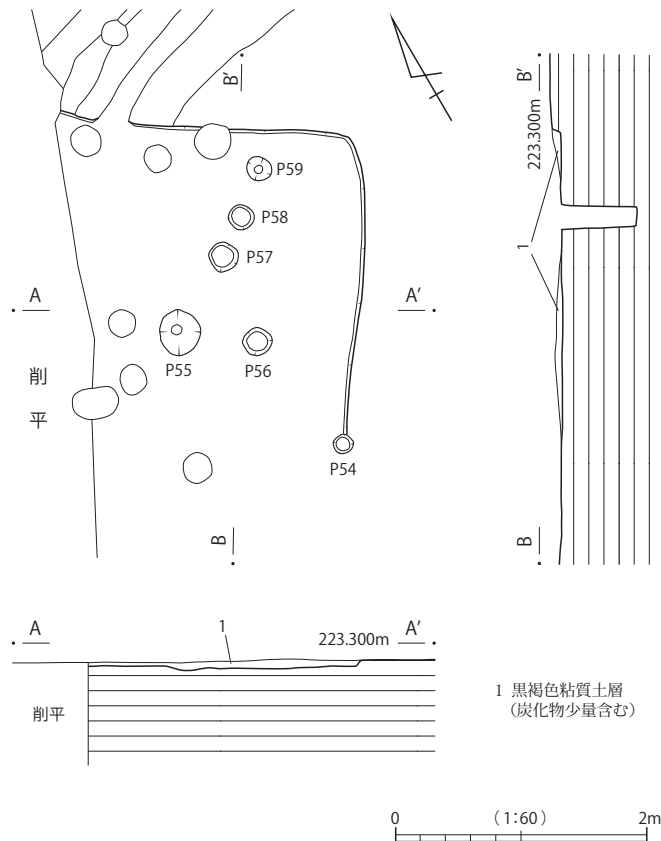
遺物は、覆土及び柱穴内等から出土するが、いずれも小破片で、弥生土器、石製品等である。図示し得たのは、1、2が甕形土器、3が砥石である。1、2とも口唇部に刻み目を施し、2は頸部にヘラ描きによる沈線を施す。3は2面に使用痕が認められる。



第13図 SB04 出土遺物実測図

### ⑤ SB05

調査区西端に位置するが、西側は削平され、さらに、遺構上層部がほとんど削平されていることもあって、南壁も検出できなかったため、全容は把握できない。なお、SB04を切断して構築している。



第14図 SB05 遺構実測図

東西2.5m以上、南北2.5m以上、深さ約0.05mを測り、方形の平面形を呈すると考えられる竪穴住居跡である。P55～P59のピットを検出しており、それぞれ径20～30cm、深さそれぞれ27cm、43cm、17cm、57cm、15cmを測る。これらのピットは、SB04に付随する可能性もあり、性格は不明であるが、P56とP58は柱穴の可能性が高い。なお、柱穴、炉あるいはカマドなどの設備は検出していない。

本遺構から出土したと断定できる遺物はほとんどなく、いずれも小破片であるが、SB04覆土から高台付杯形土器など須恵器の小破片が若干出土しており、本遺構に所属していた可能性もある。

### 3 土坑

#### ① SK02

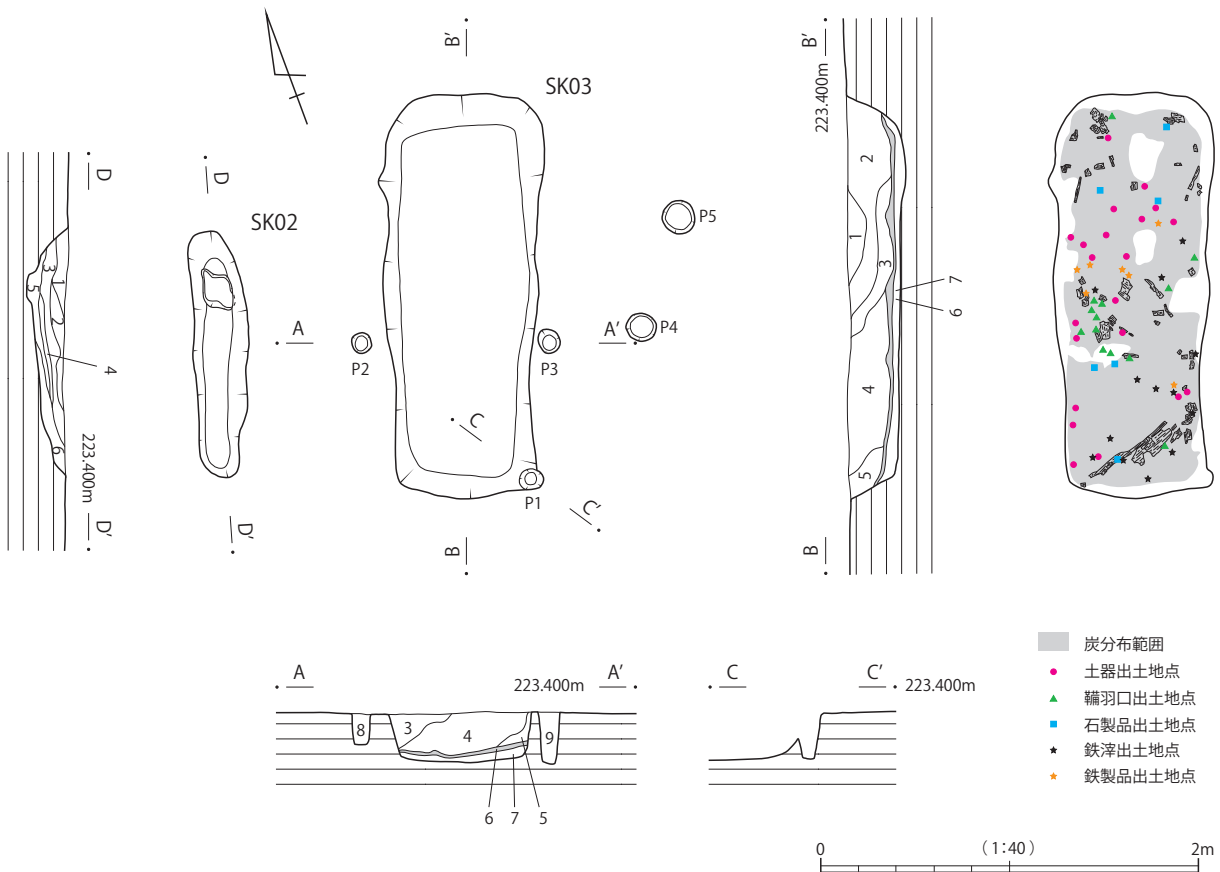
調査区北端に位置する。SK03と並行に隣接して構築されており、関連性については断定できないものの、配置状況からみるとその可能性は指摘できる。

南北約1.3m、東西約0.3m、深さ約0.2mを測り、やや不整な長方形の平面形を呈する土坑である。底面はあまり平坦ではなく、北側約15cmの範囲ではさらに約5cm掘り込んでいる。

遺物は、土師器あるいは土師質土器の小破片が少量出土するが、図示し得ない。また、小片ではあるが鉄滓も出土している。

#### ② SK03

調査区北端に位置する。SK02と並行に隣接して構築されており、関連性については断定できないものの、配置状況からみるとその可能性は指摘できる。



#### SK02

- 1 暗褐色砂質土と明褐色砂質土の混合土層
- 2 明黄褐色ブロック混入黒褐色砂質土層(炭化物少量含む)
- 3 黒褐色砂質土層(炭化物微量含む)
- 4 明黄褐色砂質土層
- 5 黒褐色砂質土層(炭化物少量含む)
- 6 黒褐色砂質土と黄褐色砂質土の混合土層(炭化物少量含む)

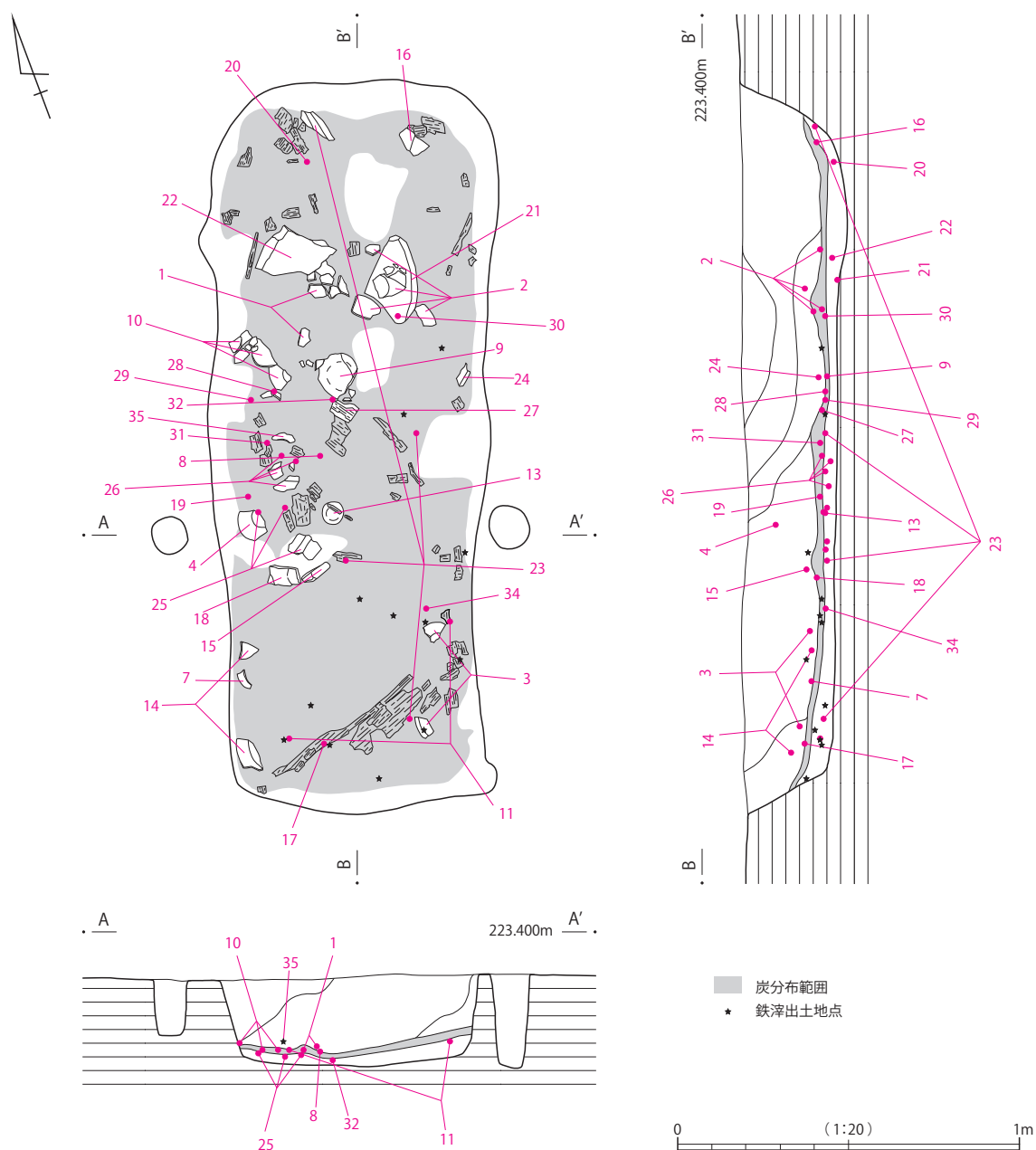
#### SK03

- 1 黄橙色ブロック混入暗褐色砂質土層
- 2 暗褐色砂質土層(炭化物少量含む)
- 3 黄褐色ブロック混入暗褐色砂質土層(炭化物少量含む)
- 4 暗褐色砂質土層(炭化物微量含む)
- 5 黒褐色砂質土層(炭化物少量含む)
- 6 炭層
- 7 暗褐色粘質土層
- 8 暗褐色粘質土層
- 9 褐色粘質土層

第15図 SK02・SK03 遺構実測図

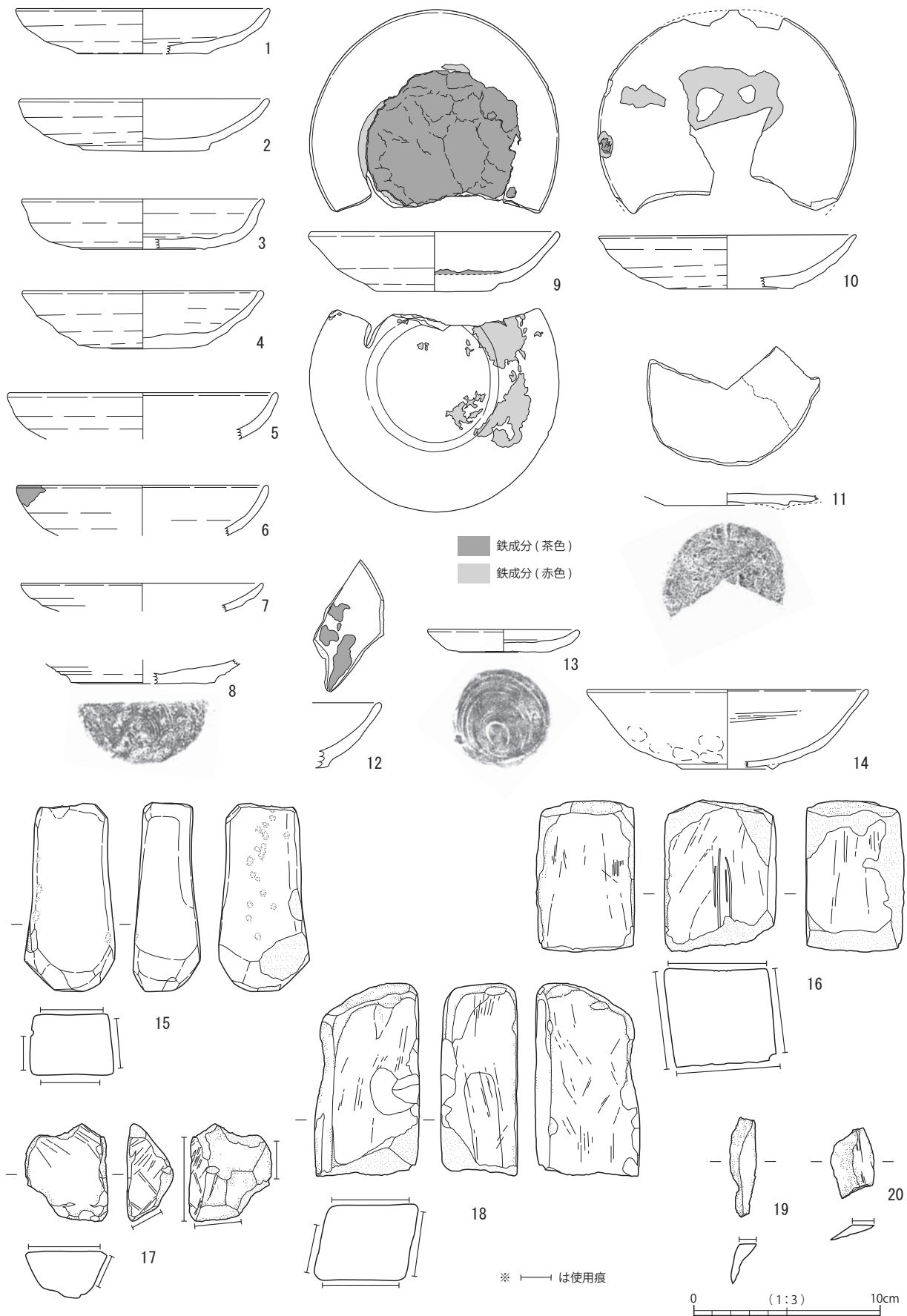
南北約2.15m、東西約0.8m、深さ約0.3mで、やや隅丸の長方形の平面形を呈し、底面はほぼ平坦な土坑である。南東コーナー部には、径約10cm、検出面からの深さ25cmを測るP1を検出した。また、西辺及び東辺の中央南寄りに隣接してP2、P3を検出した。P2は径約0.1m、深さ約0.17m、P3は径約0.1m、深さ約0.28mを測る。その他、東壁に隣接してP4、P5を検出し、それぞれ径約0.15m、0.18m、深さ約0.08m、0.11mを測る。P4、P5については、本遺構との関連性は不明である。

底面から5cm程度浮いた位置には数cmの厚さで炭層が一面に広がっており、遺物は、主としてその炭層に前後して出土している。また、小片ではあるが、炭化材が少量出土している。なお、壁面及び底面には火を受けた形跡は認められず、覆土に焼土も含まれていない。



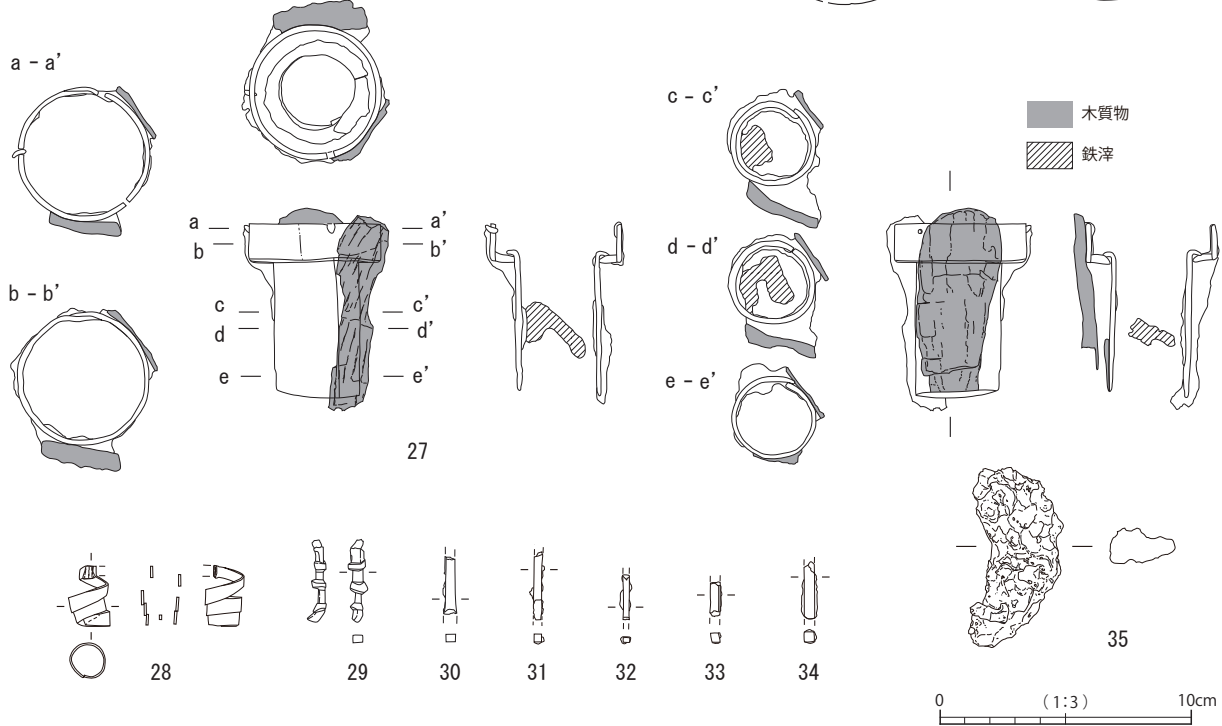
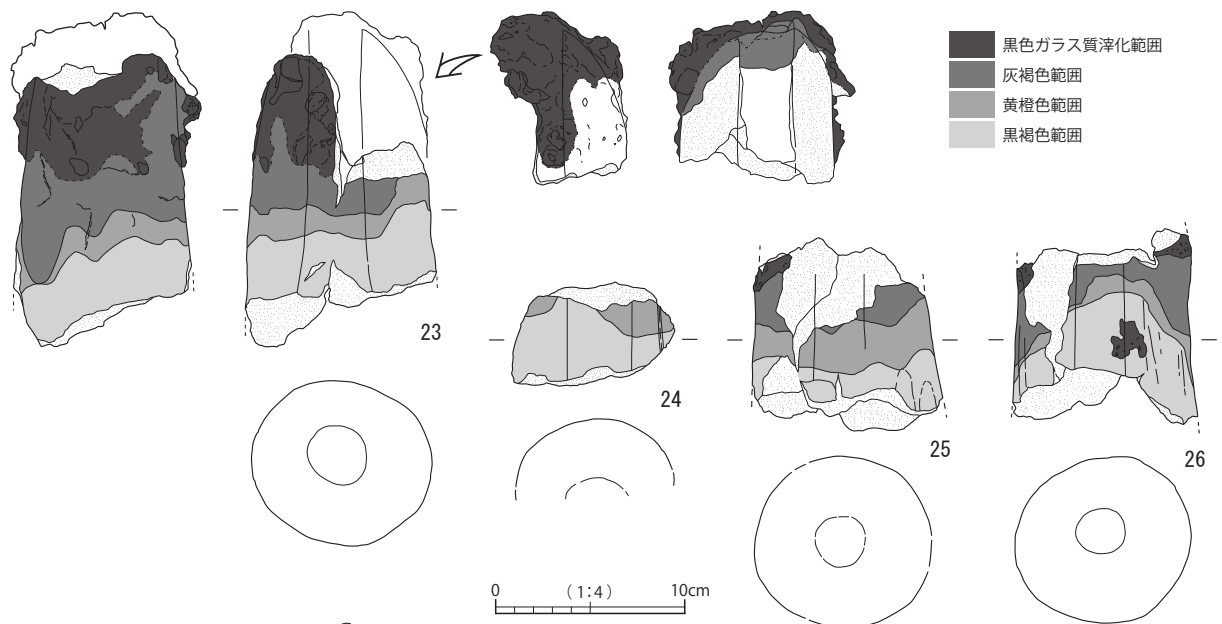
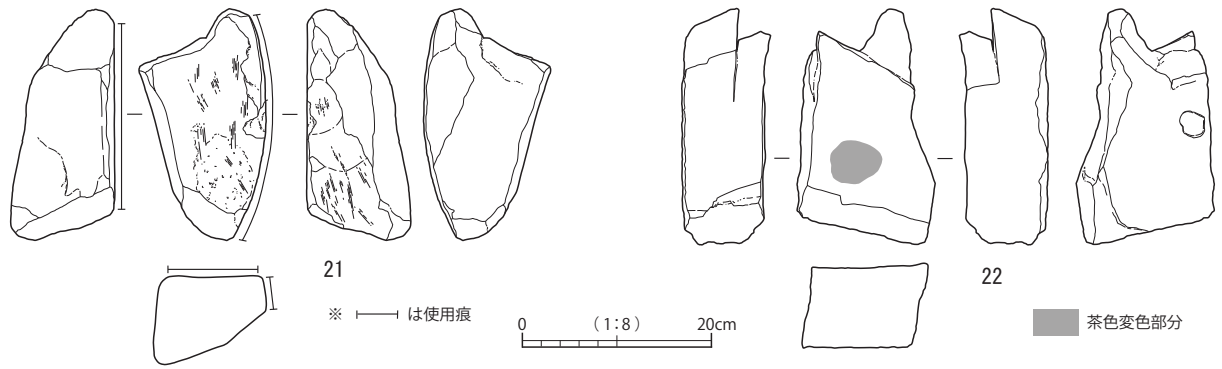
第16図 SK03 遺物出土状況図





第17図 SK03出土遺物実測図①





第18図 SK03 出土遺物実測図②

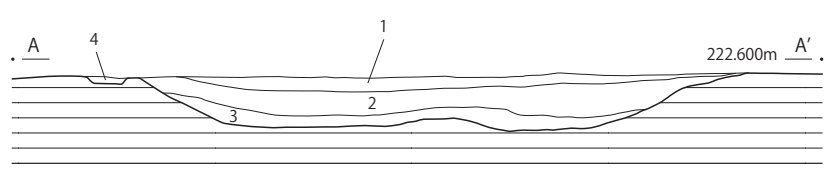
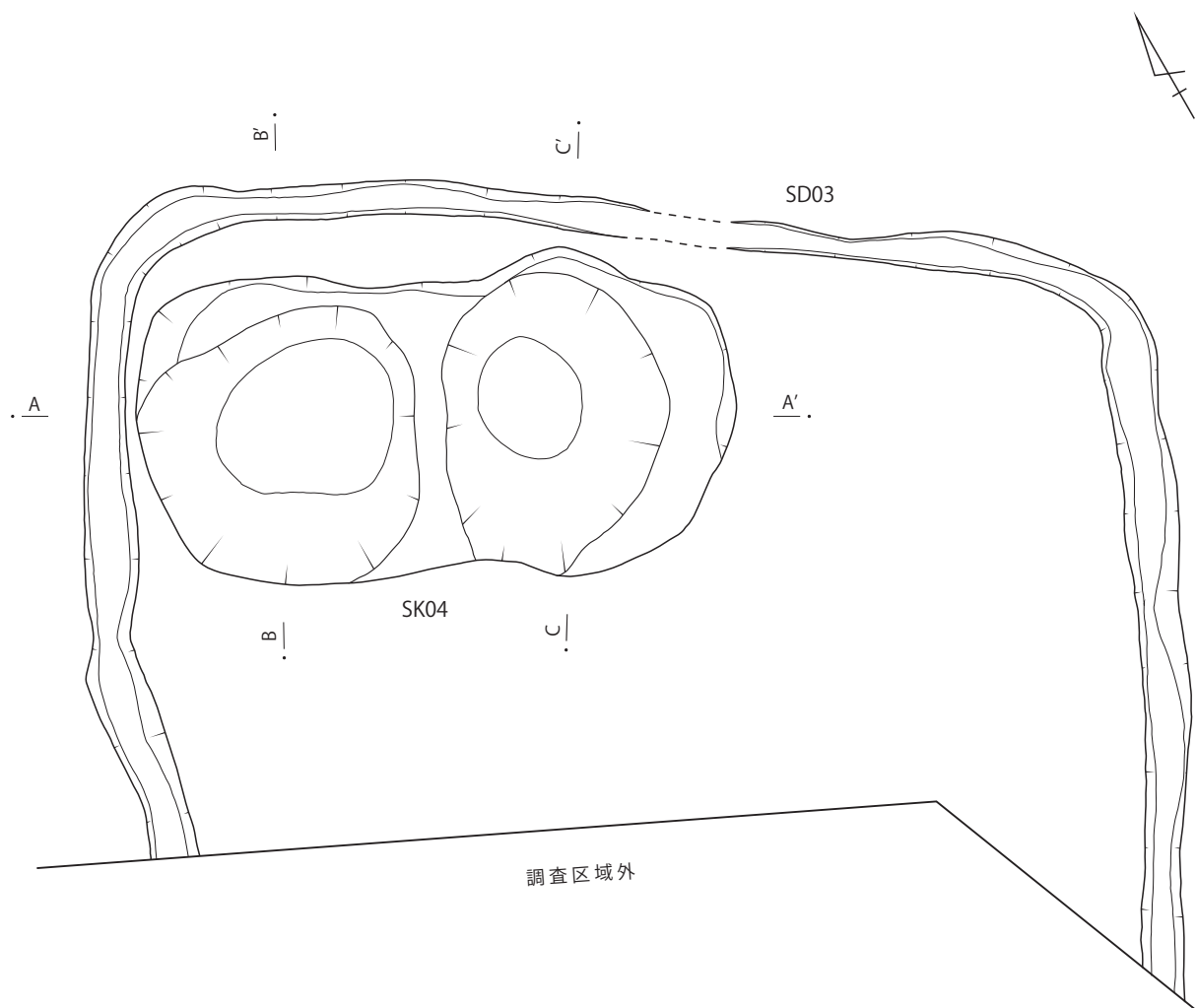
遺物は、土師質土器、瓦器、砥石、轆羽口、鉄製品などが出土している。土器は、全体的に器表面の摩滅が顕著である。1～12は土師質土器の杯形土器で、8、11は底部に糸切り痕が残る。9は、内面に黒褐色物質の塊が厚く付着しており、その下層部分には赤色の物質も見られるが、一部は割れた断面にも流れ付いている。蛍光X線分析の結果、黒褐色部分と赤色部分の成分はほとんどがFeで、付着物は鉄と考えられる。10、11も、内面の一部に鉄成分と考えられる赤色物が付着している。11は、底部から体部にかけて黒く熱変して歪んでいる。13は土師質土器の小形皿型土器で、底部に糸切り痕が残る。14は瓦器の椀形土器である。外面は指押さえによる凹凸が顕著で、内面はわずかにヘラミガキの痕跡が認められる。底部には形骸化した断面三角形の高台が付く。15～19は小形の砥石で、いずれも欠損するが、複数面に使用痕が認められる。19、20は、表面の一部に鉄成分と考えられる赤色物が付着しているが、使用痕から欠損した砥石と考えられる。21は大形の砥石で、2面に使用痕が認められる。22は鉄床石と考えられ、表裏が平坦で、一面に径4cm大に鉄成分が付着し、もう一面に径約2.5cm大の円形の窪みがある。23～26は轆の羽口で、いずれも欠損している。いずれも円錐状で、通風孔の径は約3cmである。23は、外面が被熱して黒色のガラス質となっているが、一部割れた断面にも付着しているため、個体が完全に接合しない。27は、円筒状鉄製品で、長さ約6.9cm、径3.2～5.2cmを測る。板状の扁平な鉄を円筒状にしており、接合部分はわずかに重なりが認められる。内径約2.8cm、厚さ約2mm、長さ5.5～5.9cmのものと内径約4.8mm、厚さ約2mm、長さ約1.5cmのもの、2つの径と長さが異なるものを接合しているが、後者は、前者との接合部分に、中を丸く割り貫いた円盤状の鉄をはめ込んでおり、また前者は、両者を接合した部分を外側にわずかに折り返している。したがって、径及び形状の異なる3つの鉄を接合して一つの成品にしているものである。また、大きい径の上端近くには、ほぼ等間隔に径約2mmの穿孔が3か所認められる。その内1つは端まで突き抜けているが、これは使用による欠損と考えられる。1か所に鋳が残存していることから、内側に何かを差し込んで、それを留めていたものと考えられる。なお、表面には木質物が付着するが、廃棄に伴って付着したものか、使用に伴うものかは不明である。また、中に小さな鉄滓が付着するが、これは廃棄に伴って付着した可能性が高いと考えている。28は螺旋状鉄製品で、幅4.5～7mm、厚さ1mm弱の紐状の鉄を内径1cm程度に3重に螺旋状に巻いている。なお、端部の一方は欠損するが、一方は2mm程度に細くなって終息する。29～34は棒状鉄製品で両端を欠損するが、いずれも断面方形である。29は両端が屈曲し、また、3～4mmの間隔で、幅約9mm、2mm、2mmの鉄と考えられるものを巻き付けている。35は鉄滓で、その他にも小鉄滓が数点出土している。

### ③ SK04

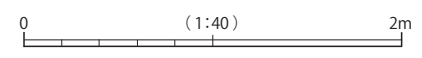
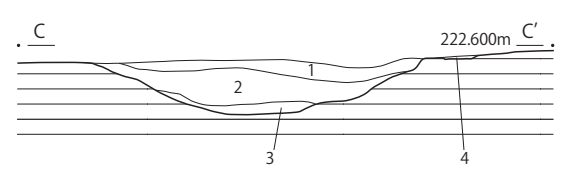
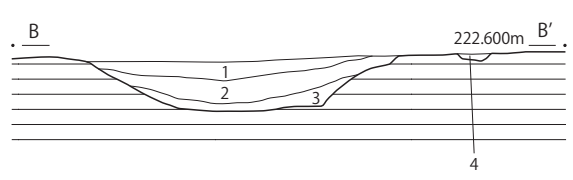
調査区北側の西端あたりに位置する。周囲にはSD03が取り囲むが、関連性は不明である。

長径(東西方向)約3.2m、短径(南北方向)約1.7mを測り、不整な楕円形の平面形を呈する土坑であるが、中は2つの土坑状の掘り込みがあり、西側は径約1.5m、深さ約0.3m、東側は径約1.3m、深さ約0.3mのそれぞれ円形の平面形を呈している。いずれも、底面は播鉢状の形状を呈している。

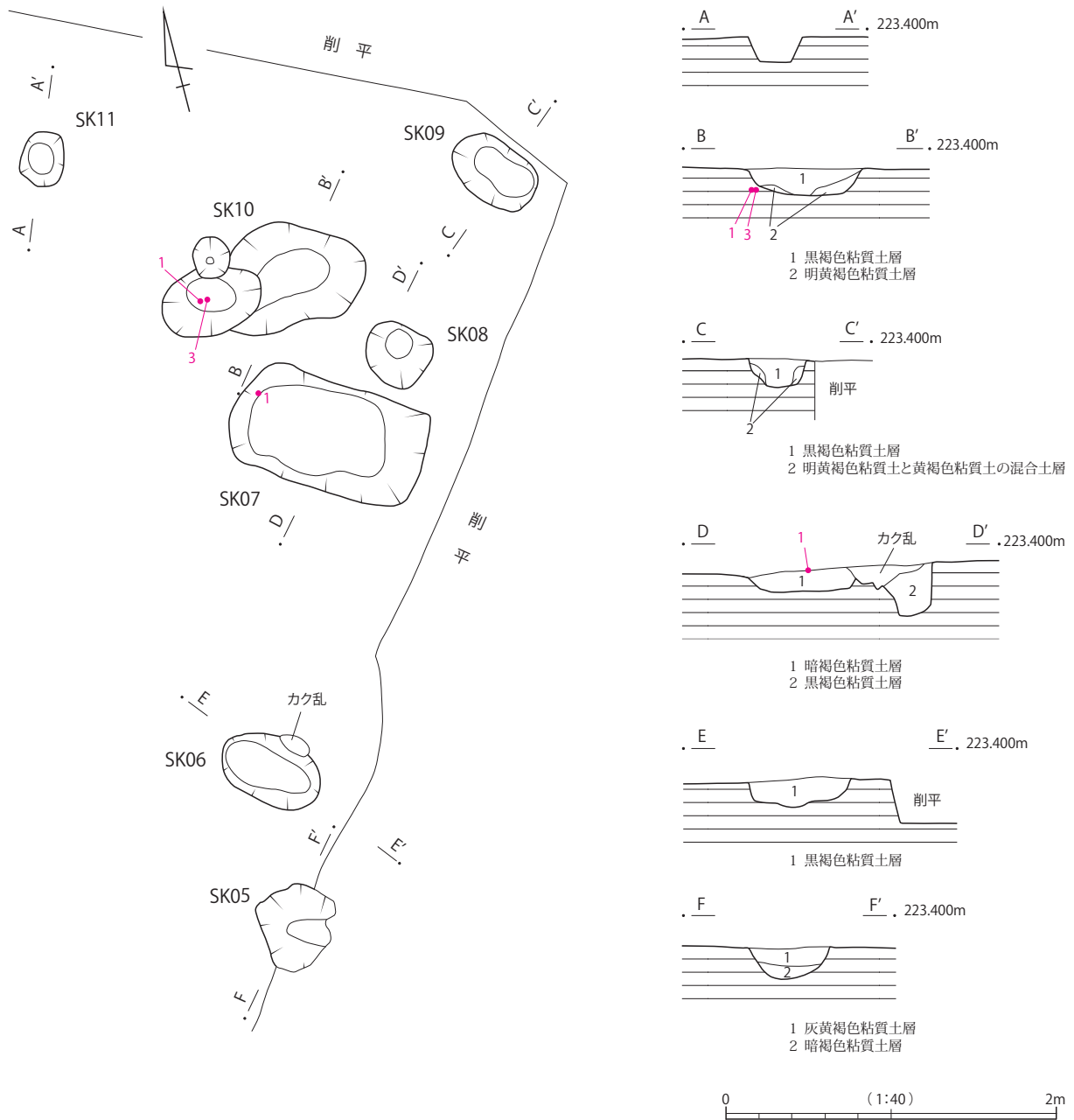
遺物は、時期不明な土器小破片が若干出土するが、近世以降と思われるものも含まれる。



- 1 褐色砂質土層
- 2 濃黄褐色砂質土層
- 3 暗褐色粘質土層
- 4 黄褐色砂質土層



第19図 SD03・SK04 遺構実測図



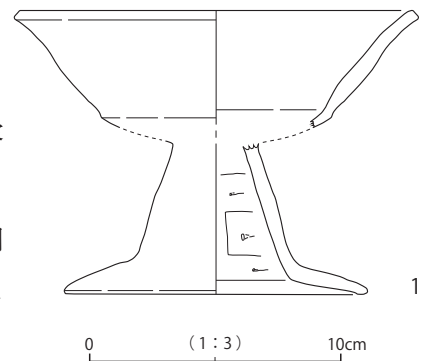
第20図 SK05～SK11 遺構実測図

④ SK05

SK05～11は、調査区北側中央部あたりに密集し、SK05は、この一群の最南に位置するが、東半部を削平されており、全容は明確にできなかった。

確認できた範囲で最大径約0.5m、深さ約0.2mを測り、不整な円形あるいは楕円形の平面形を呈すると考えられる土坑で、挿鉢状に掘り込まれている。

遺物は、土師器が出土するが、1は高杯形土器である。



第21図 SK05 出土遺物実測図

⑤ SK06

SK05～11は、調査区北側中央部あたりに密集し、SK06は、南方に位置するが、北壁の一部に攪乱を受けている。

長径約0.65m、短径約0.4m、深さ約0.2mを測り、楕円形の平面形を呈する土坑である。

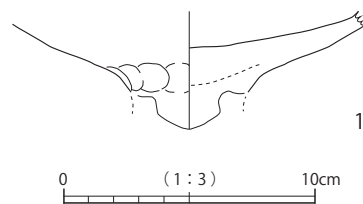
遺物は、すべて土師器で、甕形土器などが少量出土するが、いずれも小破片である。

⑥ SK07

SK05～11は、調査区北側中央部あたりに密集し、SK07は、北方に位置する。

東西約1.2m、南北約0.65m、深さ約0.1mを測り、やや不整な長方形の平面形を呈する土坑である。

遺物は、いずれも土師器で、1は高杯形土器である。その他、小破片が少量出土する。



第22図 SK07 出土遺物実測図

⑦ SK08

SK05～11は、調査区北側中央部あたりに密集し、SK08は、北方に位置する。

径0.4m、深さ約0.3mを測り、不整な円形の平面形を呈する土坑である。

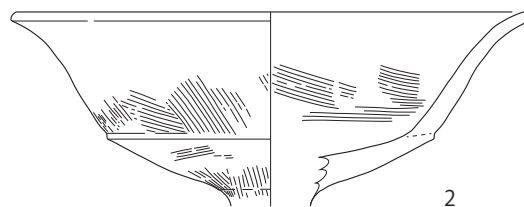
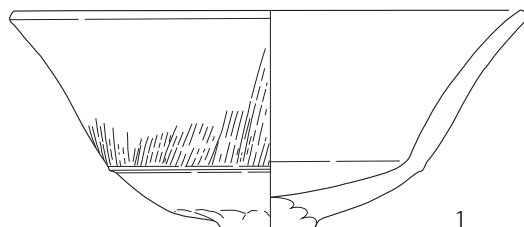
遺物は、土師器が少量出土するが、いずれも小破片である。

⑧ SK09

SK05～11は、調査区北側中央部あたりに密集し、SK09は最北に位置する。

長径約0.55m、短径約0.35m、深さ約0.2mを測り、やや不整な楕円形の平面形を呈する土坑である。

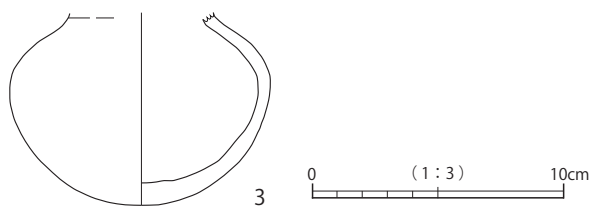
遺物は、土師器が少量出土するが、いずれも小破片である。



⑨ SK10

SK05～11は、調査区北側中央部あたりに密集し、SK10は北方に位置する。

径約0.25m、深さ約0.25mの円形の平面形、長径約0.6m、短径約0.4m、深さ約0.2mの楕円形の平面形、長径約0.9m、短径約0.6m、深さ約0.2mの不整な楕円形の平面形を呈する3



第23図 SK10 出土遺物実測図

つの土坑が重複したように検出したが、ここでは1つの土坑として扱うこととする。

遺物は、いずれも土師器で、1、2は高杯形土器、3は小型壺形土器である。その他、土師器が少量と須恵器高台付杯形土器が1点出土するが、いずれも小破片である。

#### ⑩ SK11

SK05～11は、調査区北側中央部あたりに密集し、SK11は最北西に位置する。

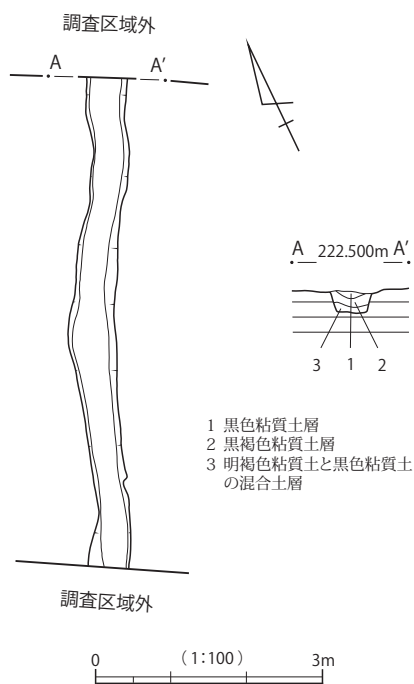
長径約0.35m、短径約0.25m、深さ約0.15mを測り、不整な円形の平面形を呈する土坑である。

出土遺物は、皆無である。

### 4 溝状遺構

#### ① SD01

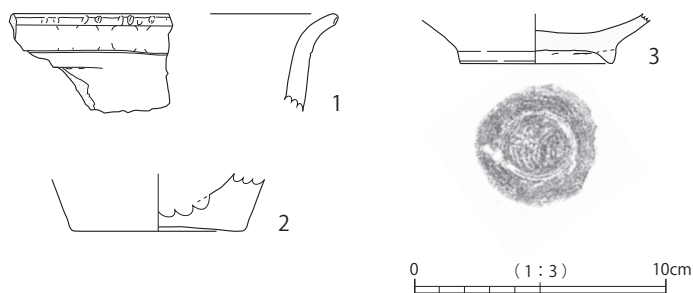
小さな谷部を形成する、調査区東端部に位置している。北側及び南側は調査区域外に展開しているため、全容は明確にできなかった。



第24図 SD01 遺構実測図

確認できた範囲で、長さ約6.5m、幅約0.5m、深さ約0.3mで、南北方向に延びる溝状遺構である。北側から南側に向かってしだいに低くなっており、5cm程度の比高差が認められる。

遺物は覆土内から少量出土しているが、弥生土器や須恵器などが出土しており、本遺構が谷部に構築されていることなどから、流れ込みによるものと思われる。1、2は弥生土器、3は須恵器である。

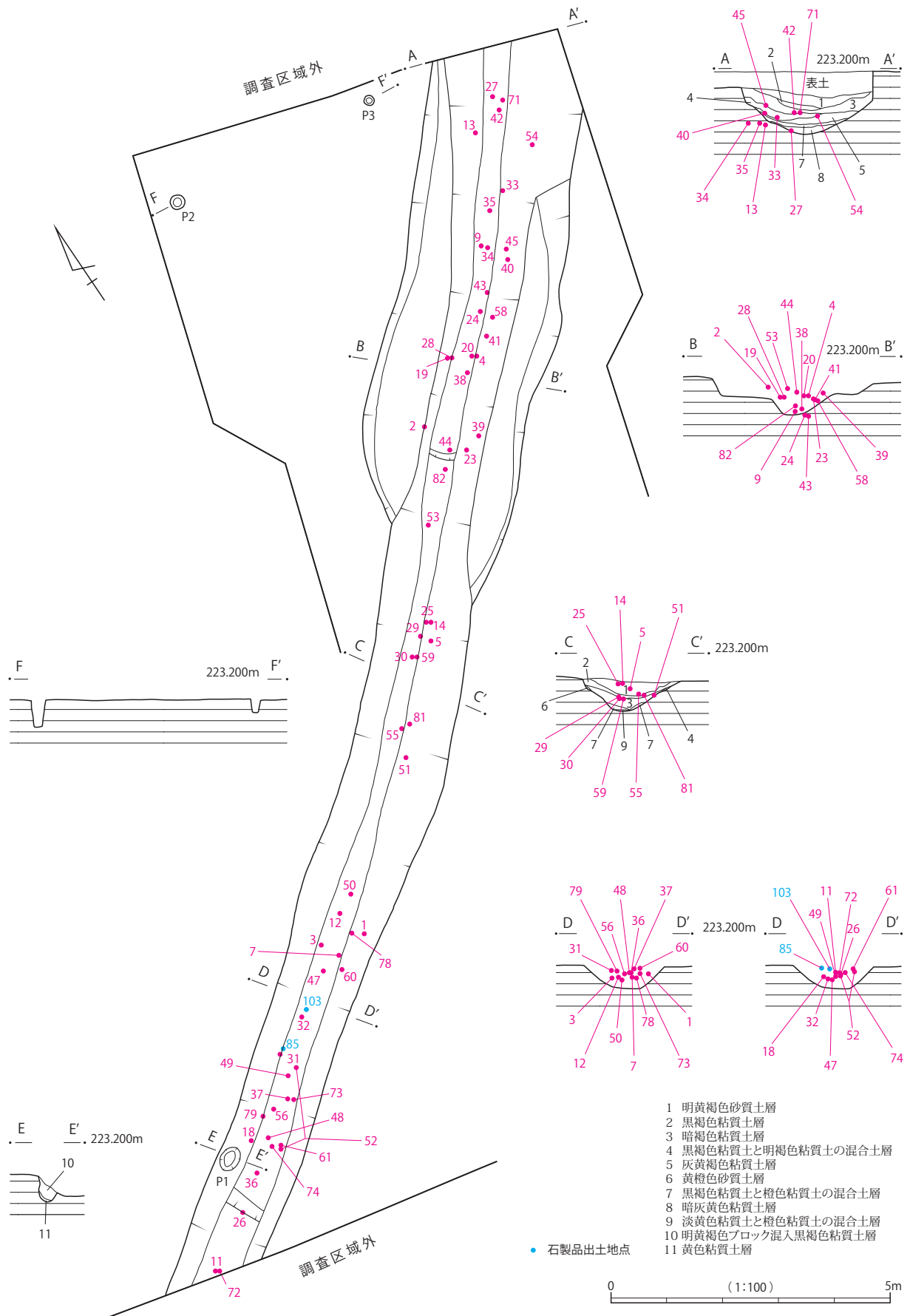


第25図 SD01 出土遺物実測図

#### ② SD02

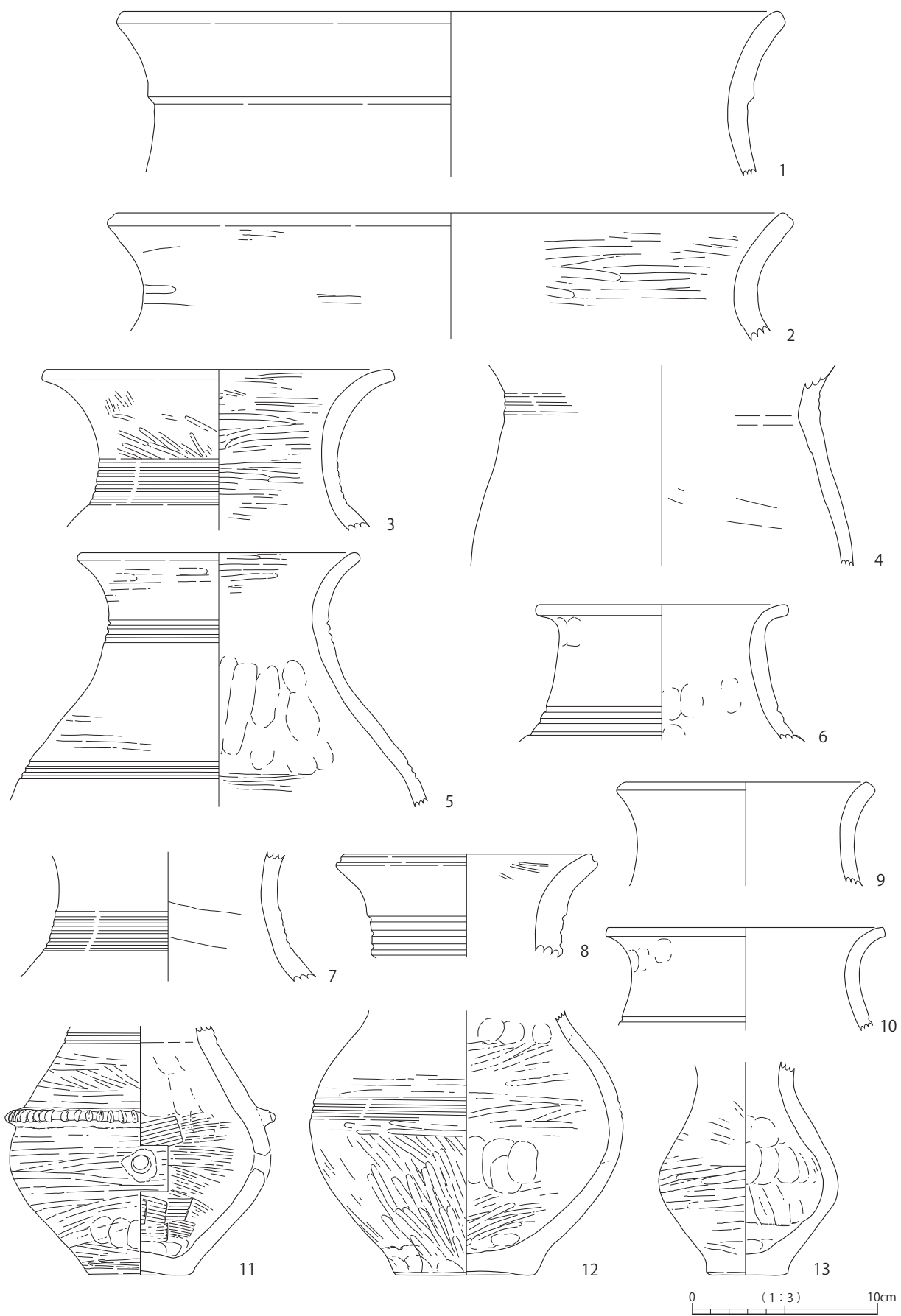
調査区北側の東端に入る小さな谷地形に向かう縁辺部に位置する。北側及び南側は調査区域外に展開しているため、全容は明確にできなかった。

確認できた範囲で、長さ約24m、幅1.4～3m、深さ0.24～0.8mを測り、南北方向に延びる溝状遺構である。上端幅に対して下端幅は0.3～0.7mで、V字形に近い断面形を呈しているが、調査区内北



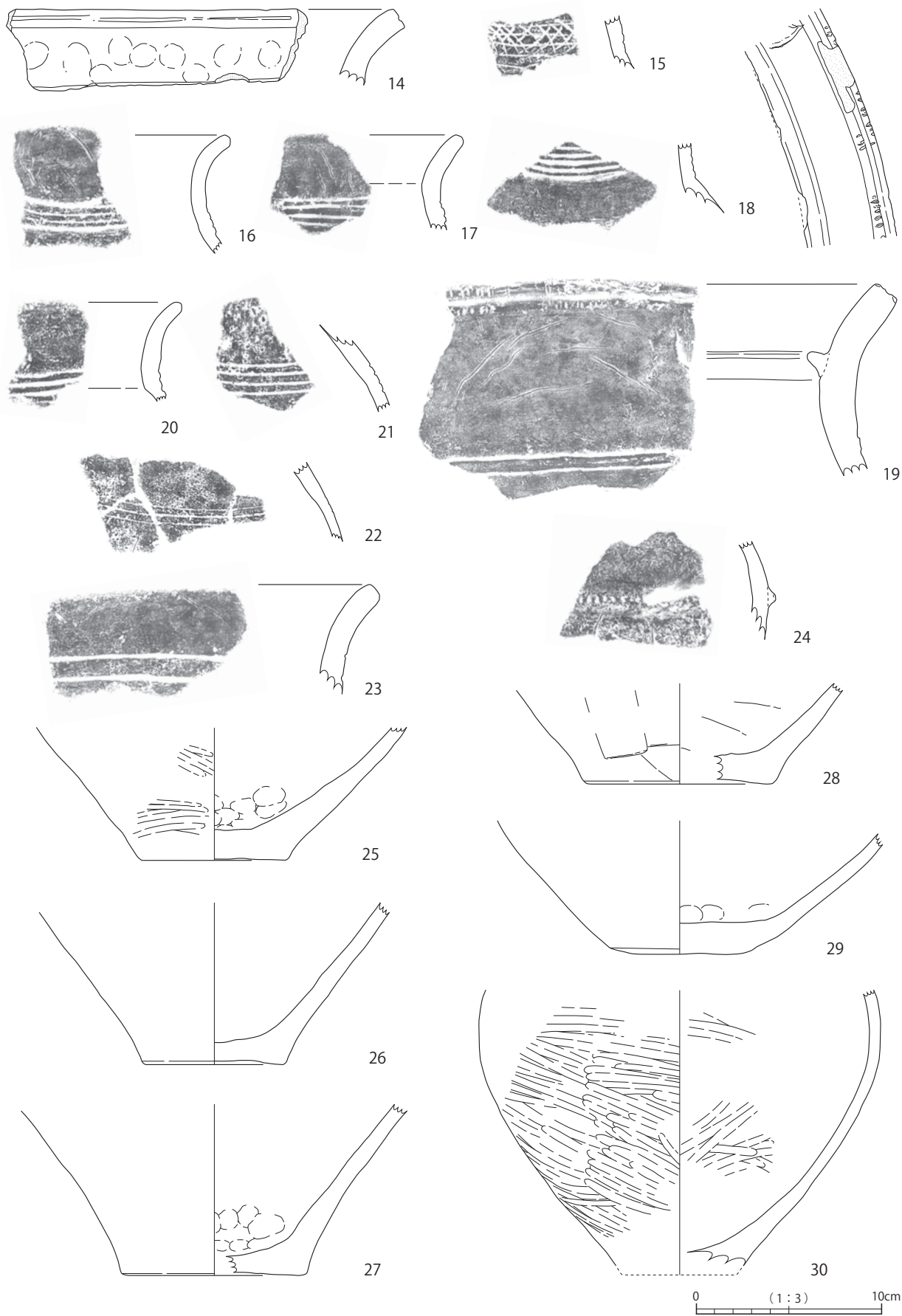
第26図 SD02 遺構実測図



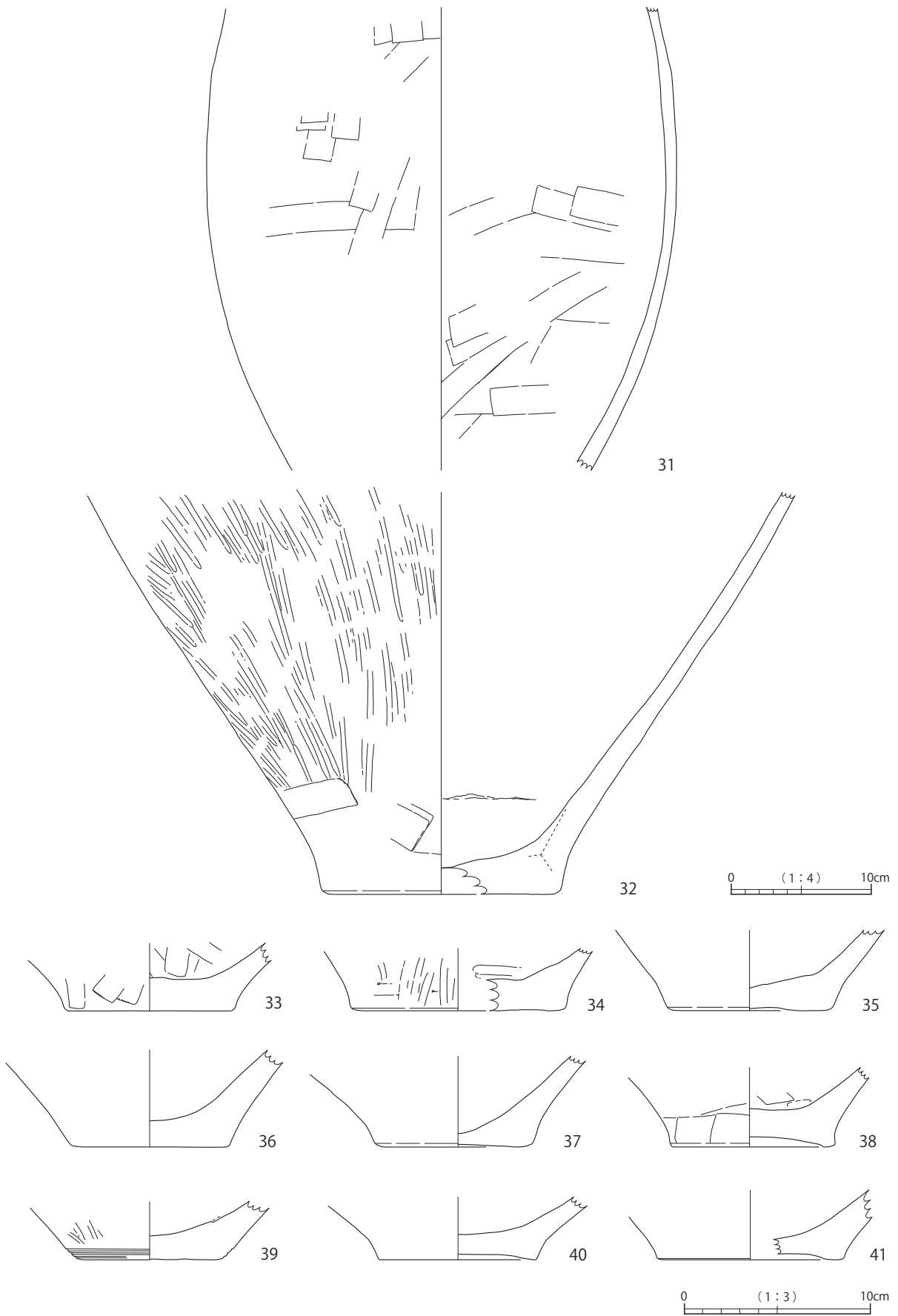


第27图 SD02出土遺物実測図①

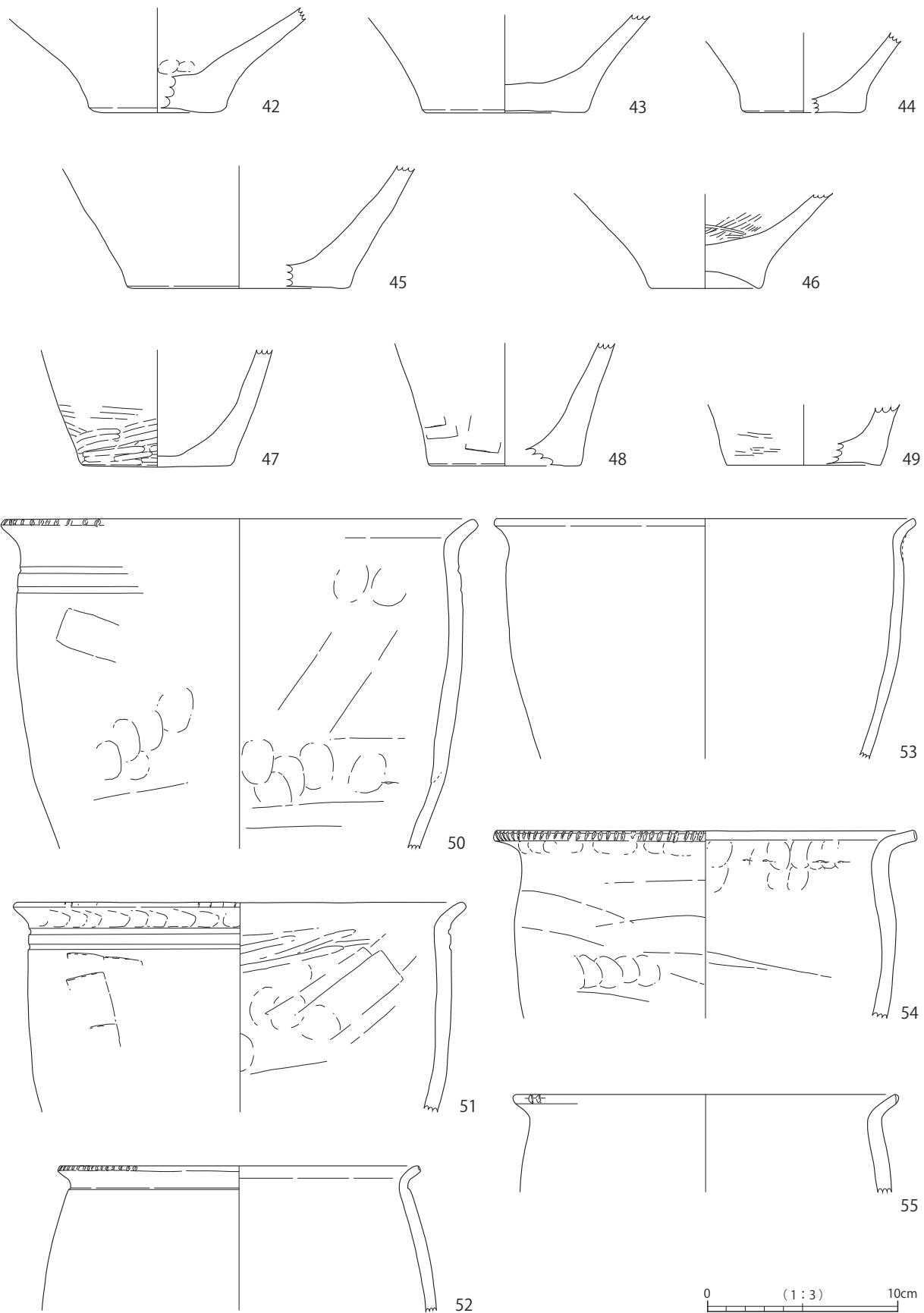




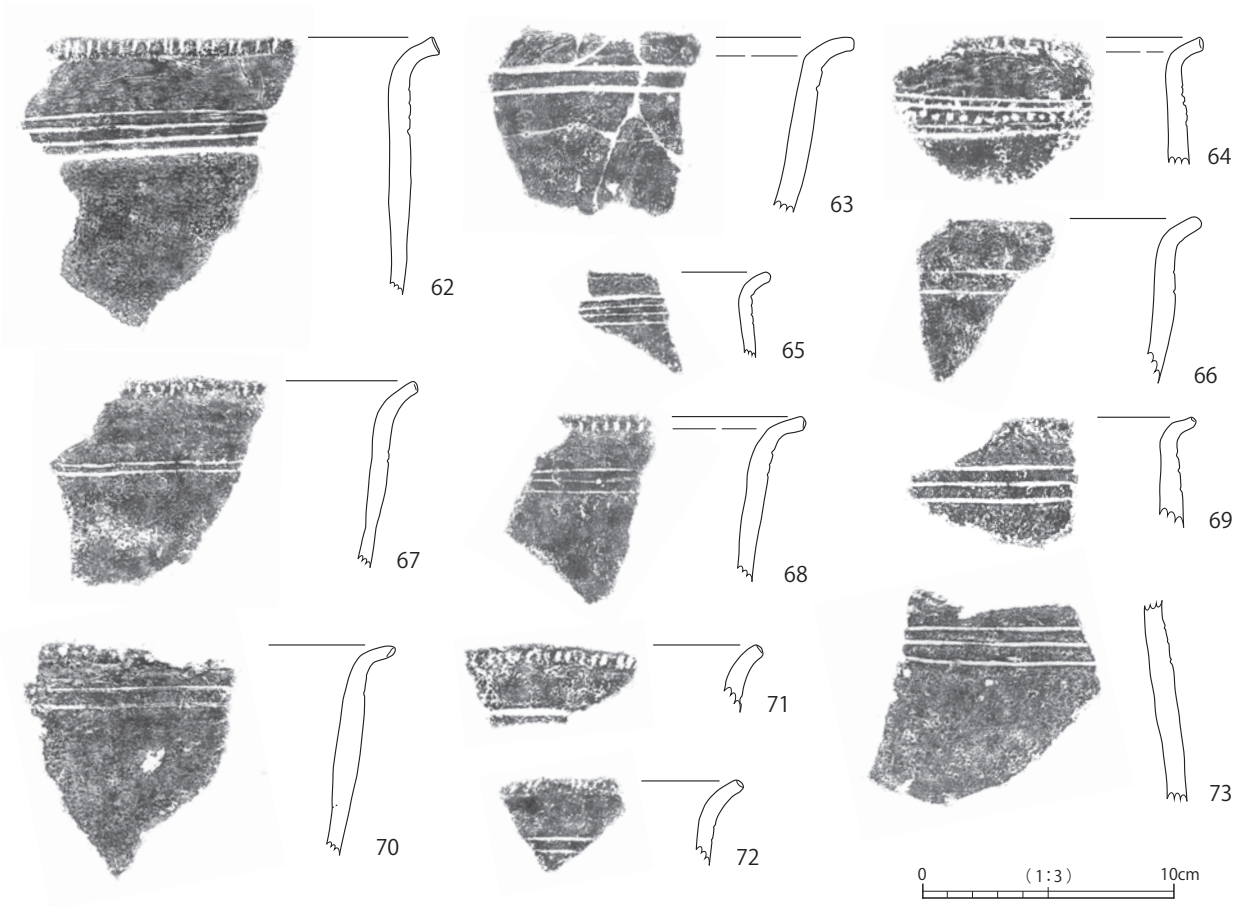
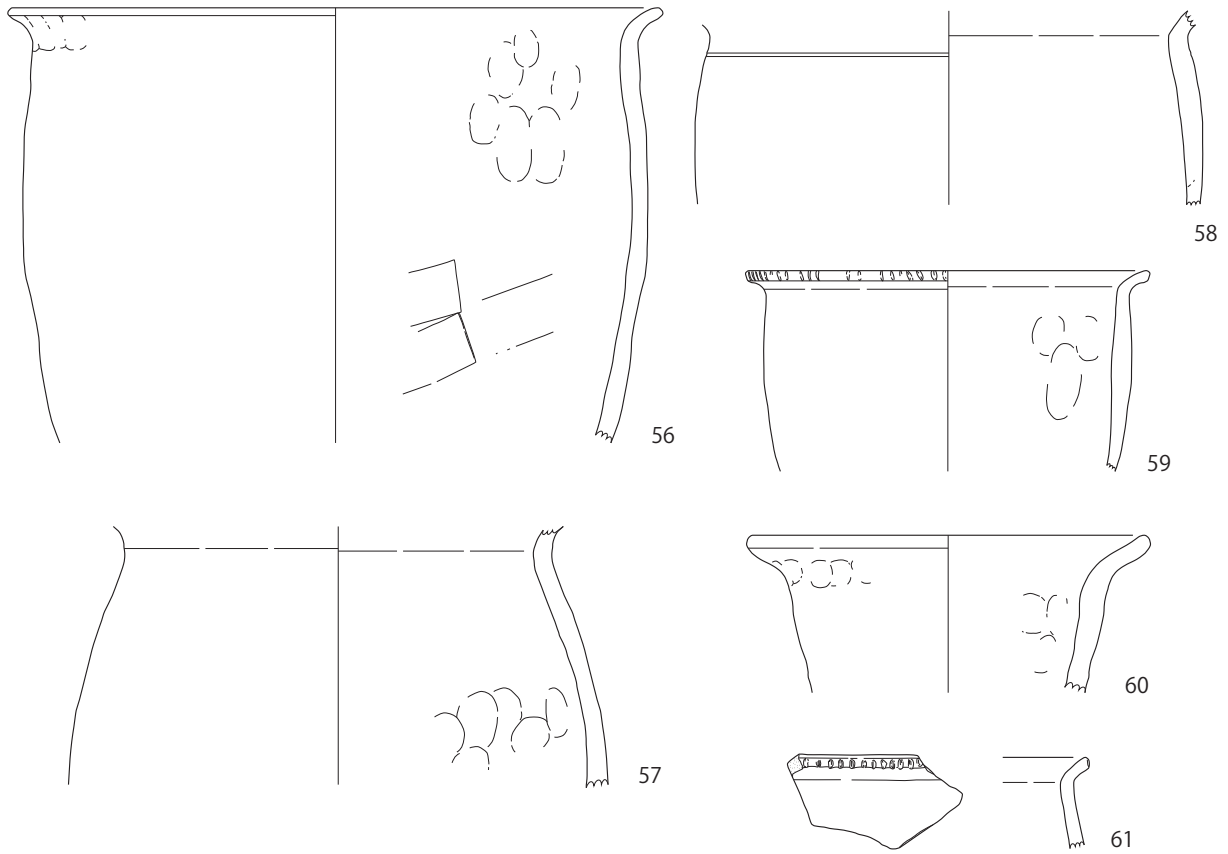
第28图 SD02出土遺物実測図②



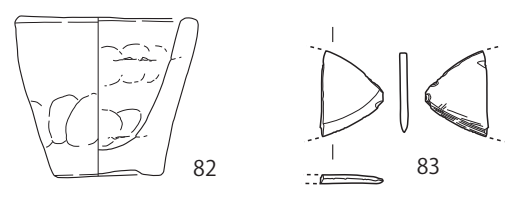
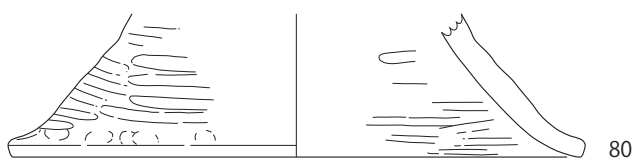
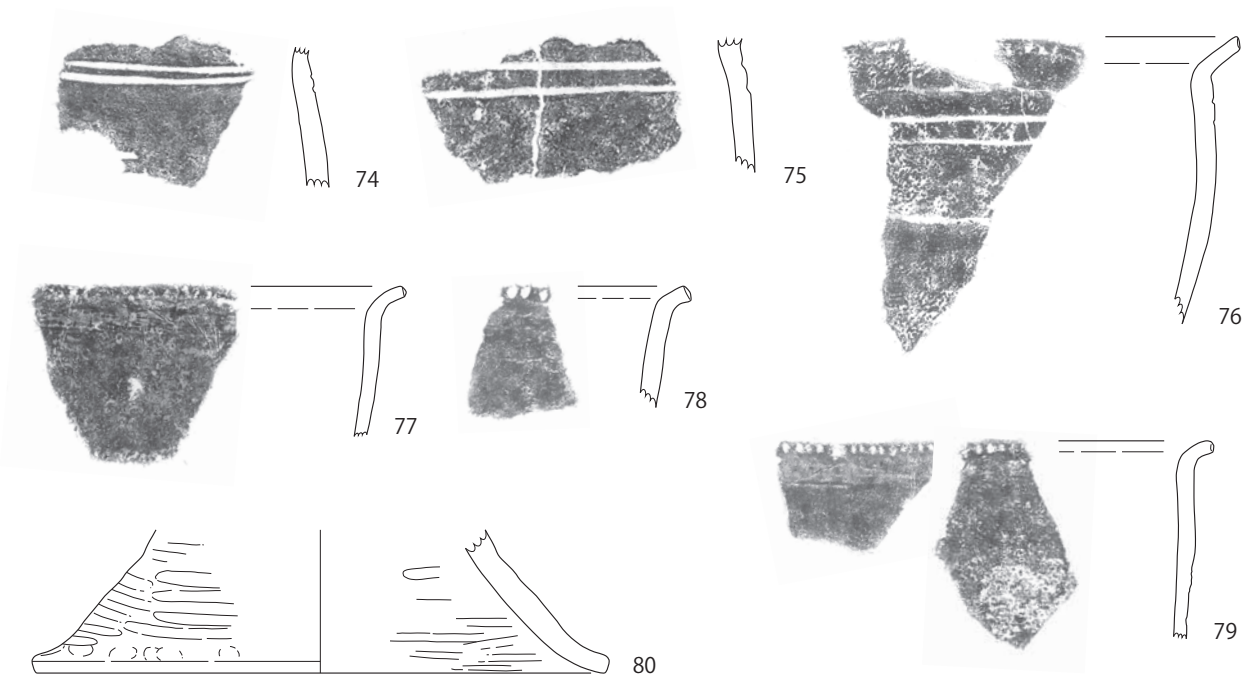
第29图 SD02出土遺物実測図③



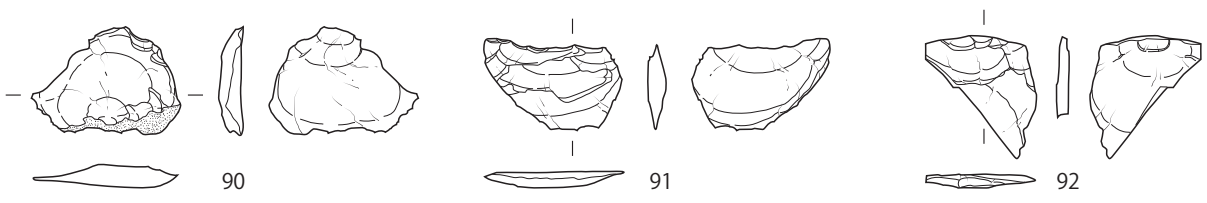
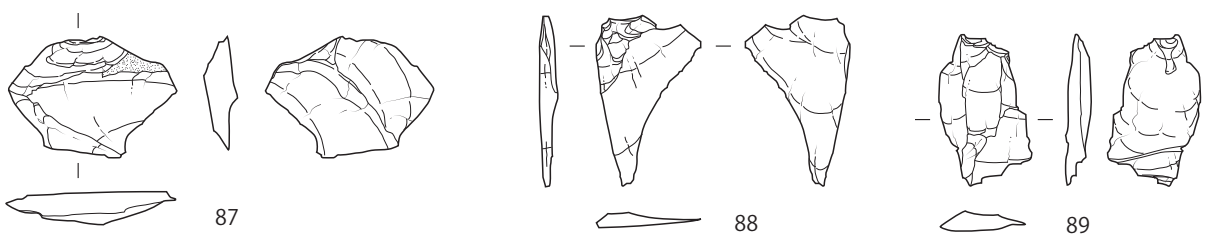
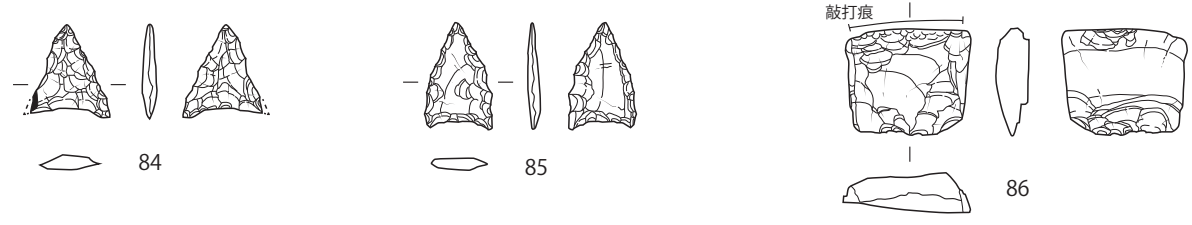
第30图 SD02出土遺物実測図④



第31图 SD02出土遺物実測図⑤

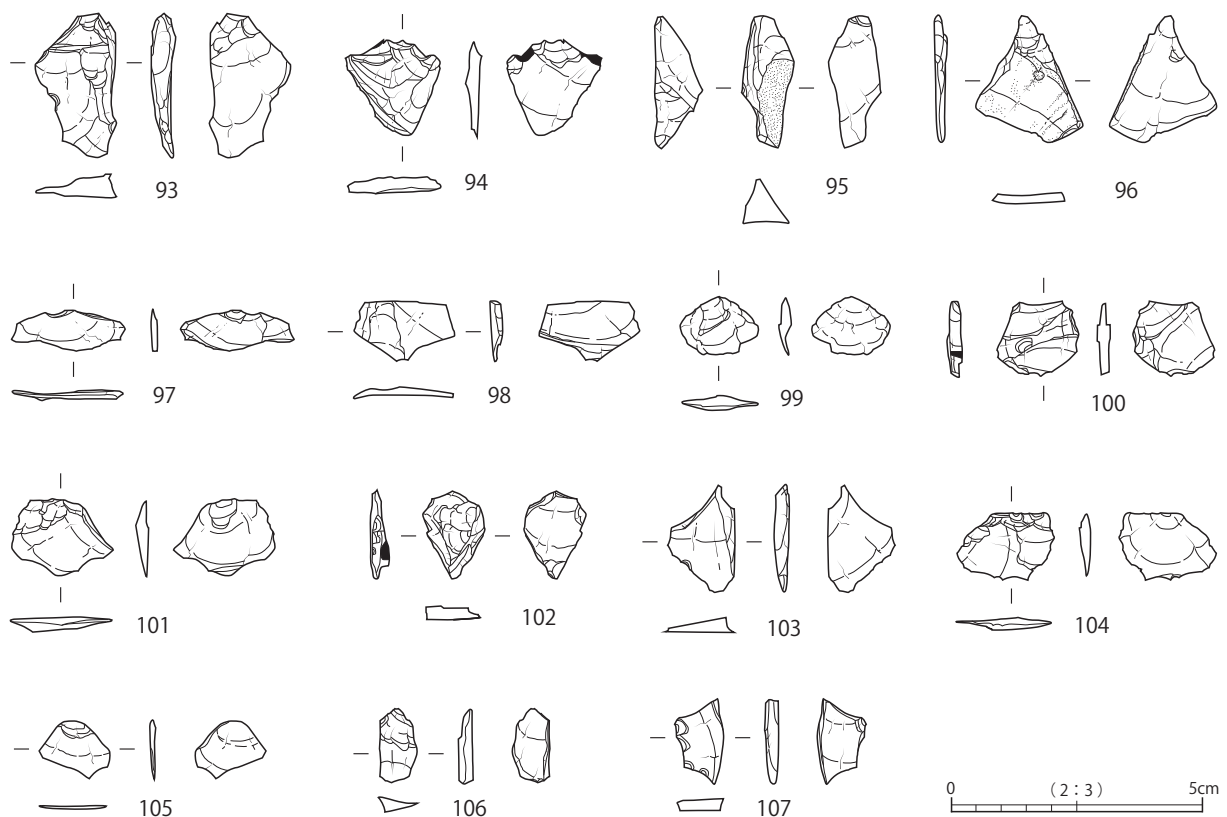


0 (1:3) 10cm



0 (2:3) 5cm

第32图 SD02出土遺物実測図⑥



第33図 SD02 出土遺物実測図⑦

半部では、2段に掘り込まれている。また、調査区の南端近くとやや北寄り部分で比高差約5cmの段差が認められるとともに、南から北に向かってしだいに低くなっており、約35cmの比高差が認められる。なお、南端近くで長径約0.45m、短径約0.35m、深さ約0.5mを測る、楕円形の平面形を呈するP1を検出したが、本遺構に伴うものかどうかは不明である。また、本遺構の北端に隣接してP2、P3を検出し、それぞれ径約25cm、約20cm、深さ約48cm、約24cmを測るが、本遺構との関連性は不明である。

遺物は、覆土の上層から下層まで広く出土するが、底面上のものは少なく、大半が覆土内からの出土で、弥生土器、石製品、石器などがある。全容の判明する遺物はなく、大半が小破片で、器表面の摩滅が顕著なものも多い。1～49は壺形土器である。1は口縁部下端に段を有する。3、4、7、12、16～20は、1～6条の削出突帯を施している。5、6、8、10、11、14、15、21～23は、1～数条のへら描きによる平行沈線を施し、5は頸部と体上部の2段に施す。また、8は口唇部に1条の凹線を施す。11、24は、貼付突帯を有し、突帯に刻み目を施す。なお、11は、体部に焼成後の穿孔を施している。15は、へら描きによる平行沈線を施した後、へら描きによる斜格子状の沈線を施す。19は、口唇部に1条の凹線を巡らせ、口縁部内面には貼付突帯を平行に施す。50～79は甕形土器である。50、51、58、62～76は1～4条のへら描きによる平行沈線を施す。64は、上下各2条の沈線の間には刺突文を施す。なお、50～52、54、55、59、61、62、64、67～72、77～79は口唇部に刻み目を施す。80、81は蓋形土器である。82は手づくね土器である。83は石包丁の欠損品で、刃部が残る。表裏面の研磨



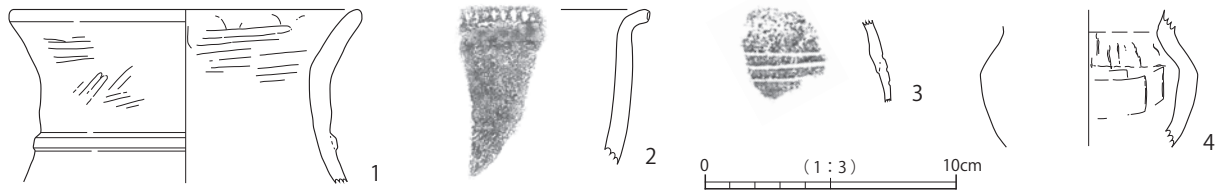
は不十分で凹凸が残り、未成品の可能性ある。84、85は石鏃で、86は楔形石器と考えられる。87～107は剥片及び碎片である。

### ③ SD03

調査区北側の西端あたりに位置する。SK04を囲むように構築されているが、関連性は不明である。南側は調査区域外に展開しており、全容は明確にできなかった。

東西方向約5.8m、南北方向約4mで、検出した範囲でコの字状に展開する溝状遺構である。幅0.2～0.3m、深さ約5cmを測る。

遺物は、覆土内から弥生土器などが出土する。1は壺形土器、2、3は甕形土器、4は小形壺形土器である。1は、貼付突帯、3はヘラ描きによる平行沈線を施す。



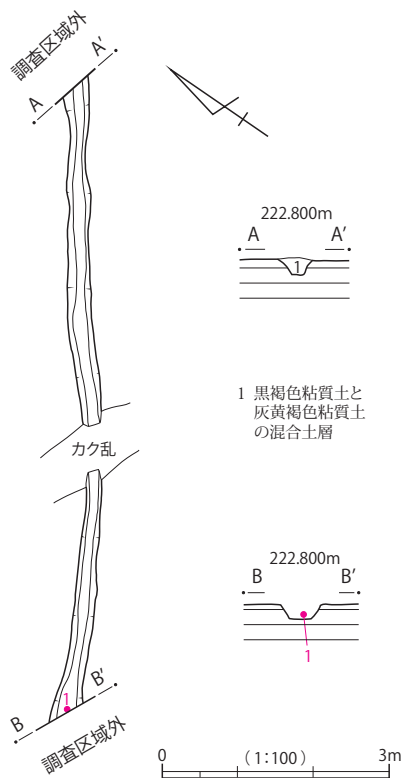
第34図 SD03 出土遺物実測図

### ④ SD04

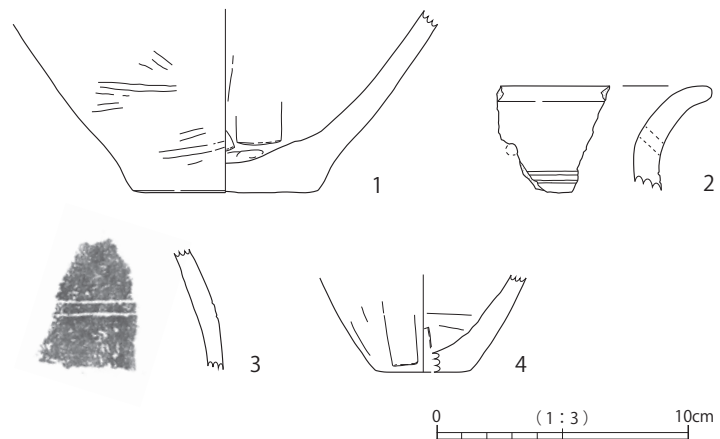
調査区北側の中央部あたりに位置する。北側及び南側は調査区域外に展開しているため、全容は明確にできなかった。

確認できた範囲で、長さ約8.5m、幅約0.3m、深さ約0.15mで、南北方向に延びる溝状遺構である。

遺物は、弥生土器が出土しており、1、2は壺形土器、3は甕形土器、4は小形の壺形土器である。2、3は、ヘラ描きによる平行沈線を施す。



第35図 SD04 遺構実測図



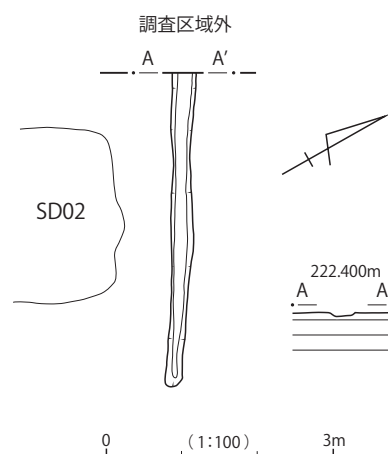
第36図 SD04 出土遺物実測図

## ⑤ SD05

調査区中央部あたり谷部に向かう縁辺部近く、SB02から約0.7m北側に隣接して位置する。西側は調査区域外に展開しているため、全容は明確にできなかった。

確認できた範囲で、長さ約4.2m、幅約0.25m、深さ約0.1mで、東西方向に延びる溝状遺構である。

遺物は、覆土内から弥生土器の小破片が数点出土するが、図示し得ない。



第37図 SD05 遺構実測図

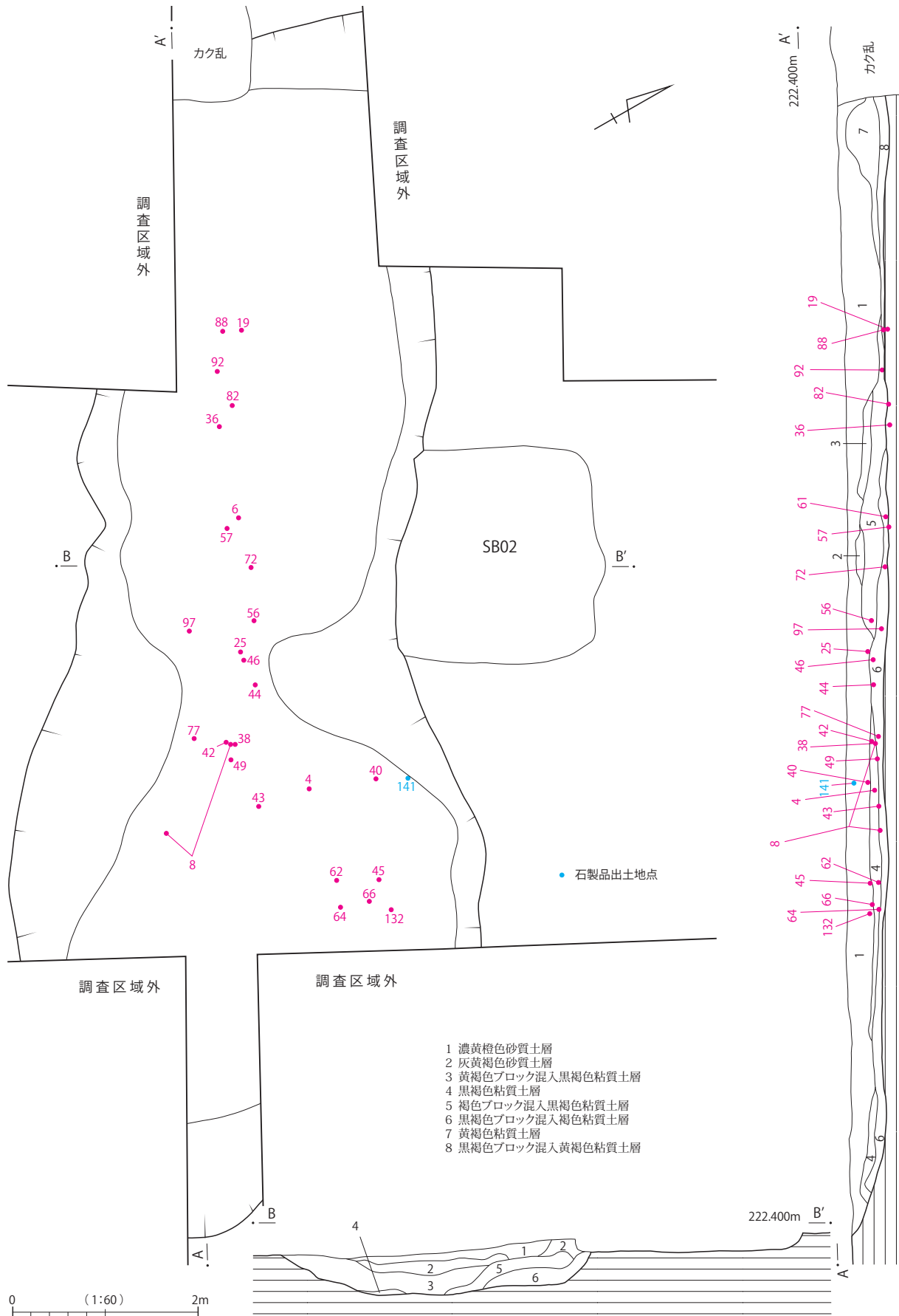
## 5 性格不明遺構 (SX01)

調査区中央部あたり谷部に向かう縁辺部近くに位置する。北辺の上層部分はSB02によって一部切られている。東側及び西側の一部は調査区域外へ展開しており、全容は明確にできなかったものの、規模はほぼ確定できる。

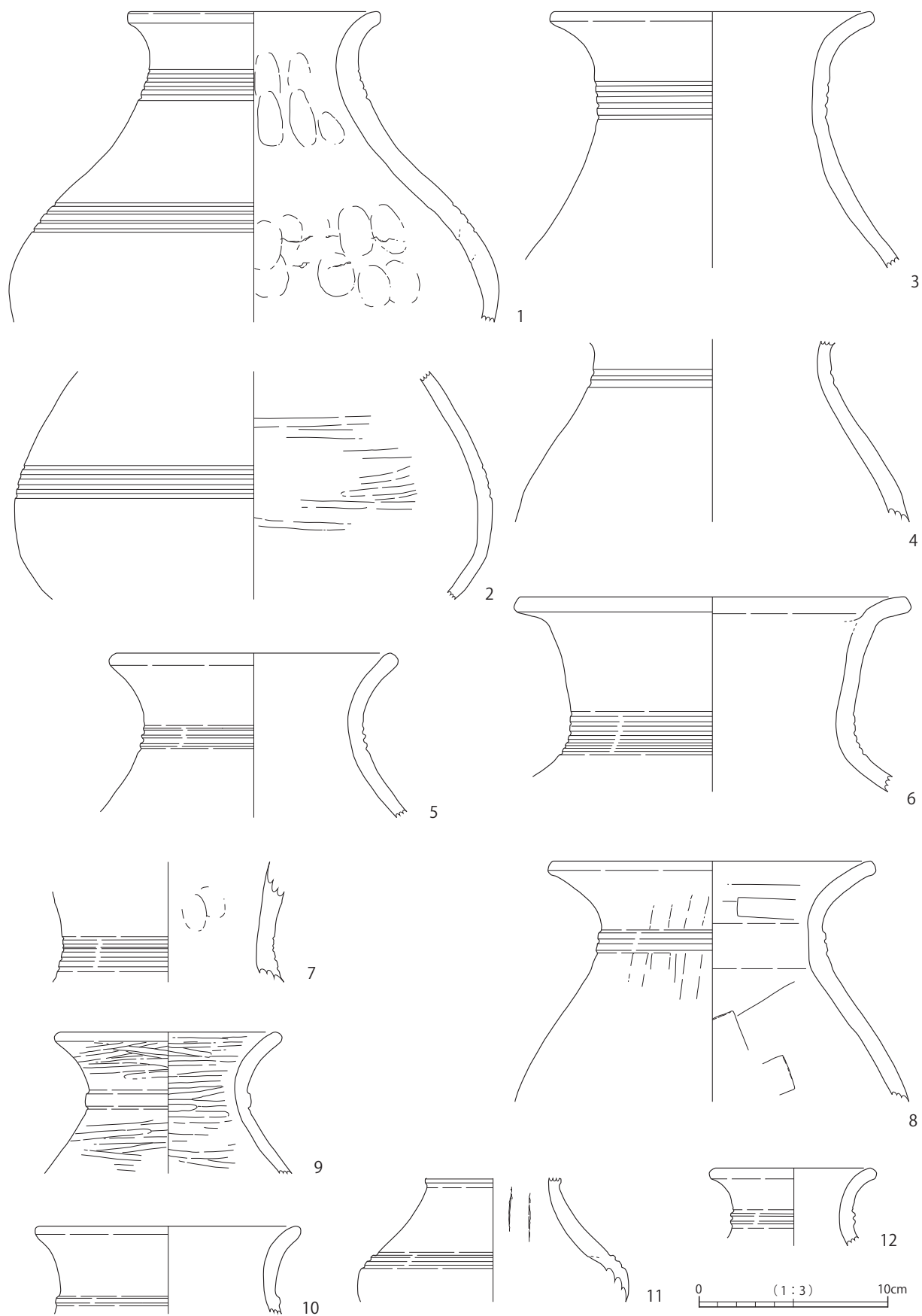
東西方向約13m、南北方向3.2～5m程度を測る、やや細長い不定形な平面形を呈する土坑状の掘り込みである。壁は、全体的にやや緩やかに傾斜している。深さは0.4m～0.7mを測り、西側に向かってしだいに低く傾斜しており、底面もやや緩やかな傾斜を呈している。

遺物は、覆土の上層から下層まで広く出土し、弥生土器、石製品、石器があるが、小破片や欠損品が多く、器表面の摩滅が顕著なものも多い。1～97が壺形土器である。1～4、21～30はへら描きによる数条の平行沈線を施し、1は頸部と体上部の2段に施す。5～15、31～41は頸部あるいは体部上段に1～5条の削出突帯を施し、11は頸部と体上部の2段に施す。また、13は、口唇部に1条の凹線を巡らせ、下端には刻み目を施す。18、20は頸部に1条の貼付突帯を施し、口唇部には1条の凹線を巡らせるが、20はさらに口唇部下端に刻み目を施す。19は、口縁部内面に「し」の字状の太い凸帯を施す。98～136は甕形土器である。98は底部に焼成後の穿孔があり、甕に転用されたものと考えられる。100～123、126は、2～4条程度のへら描きによる平行沈線を施す。なお、口唇部が残存するものについては、刻み目を施すものが多い。137～139は蓋形土器である。140は石包丁の未成品である。穿孔が2か所に認められるが、1つは表裏両側から穿孔が施されるものの、穿孔位置にズレが生じている。141は石斧で、刃部から約5cmの範囲は丁寧に磨いて、側面も明確に作り出しており、基部側も表裏面及び側面の一部は磨いた痕跡が認められる。なお、刃部はやや凹凸が認められ、使用による痕跡と考えられる。142～144は石鏃である。いずれも欠損品で、144は裏面が未調整であるなど、いずれも未成品の可能性が高い。145、146は楔形石器と考えられる。147～200は剥片及び破片である。

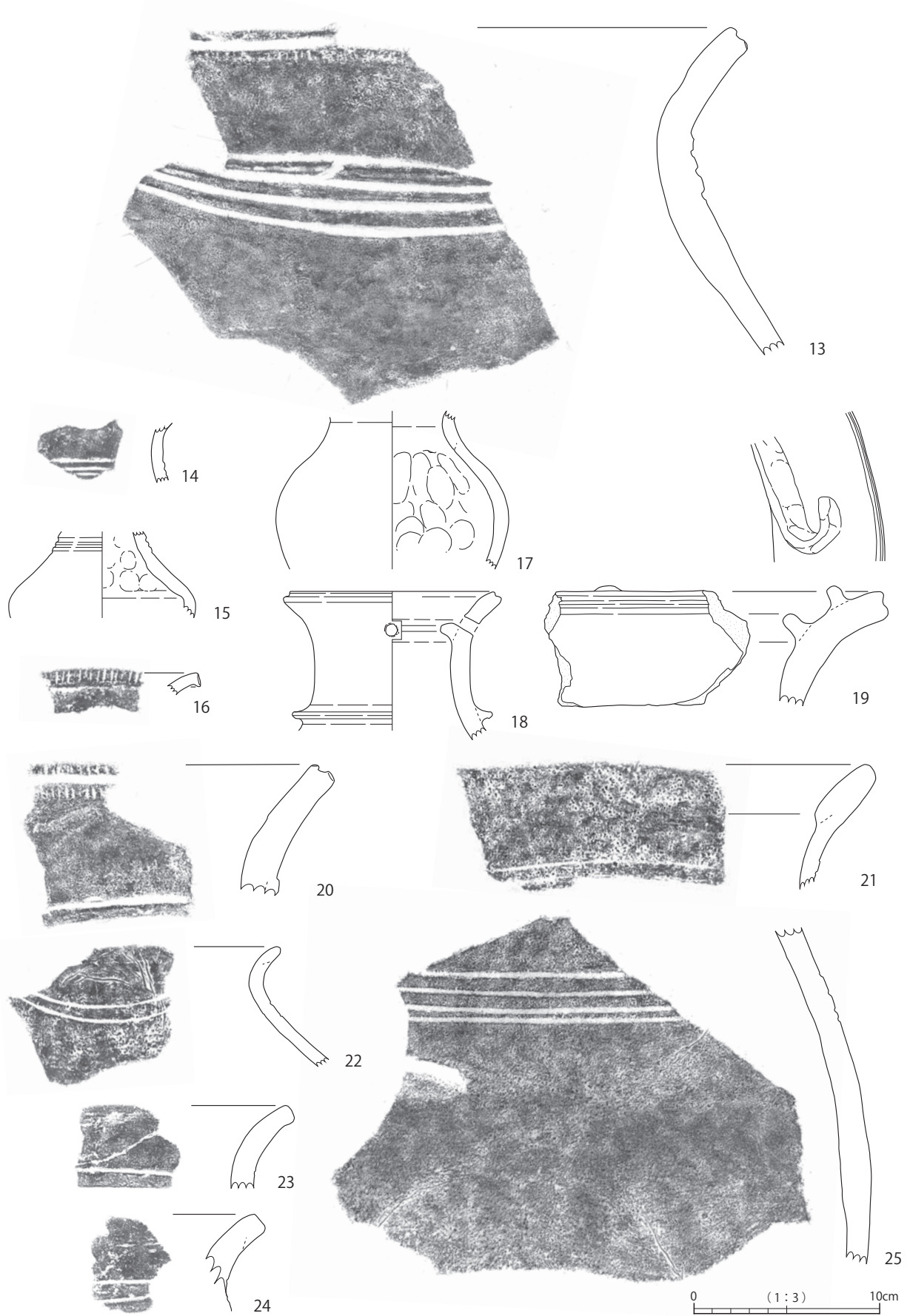
遺構の状況、遺物の出土状況などから、土器等の廃棄に使用された遺構の可能性が考えられる。



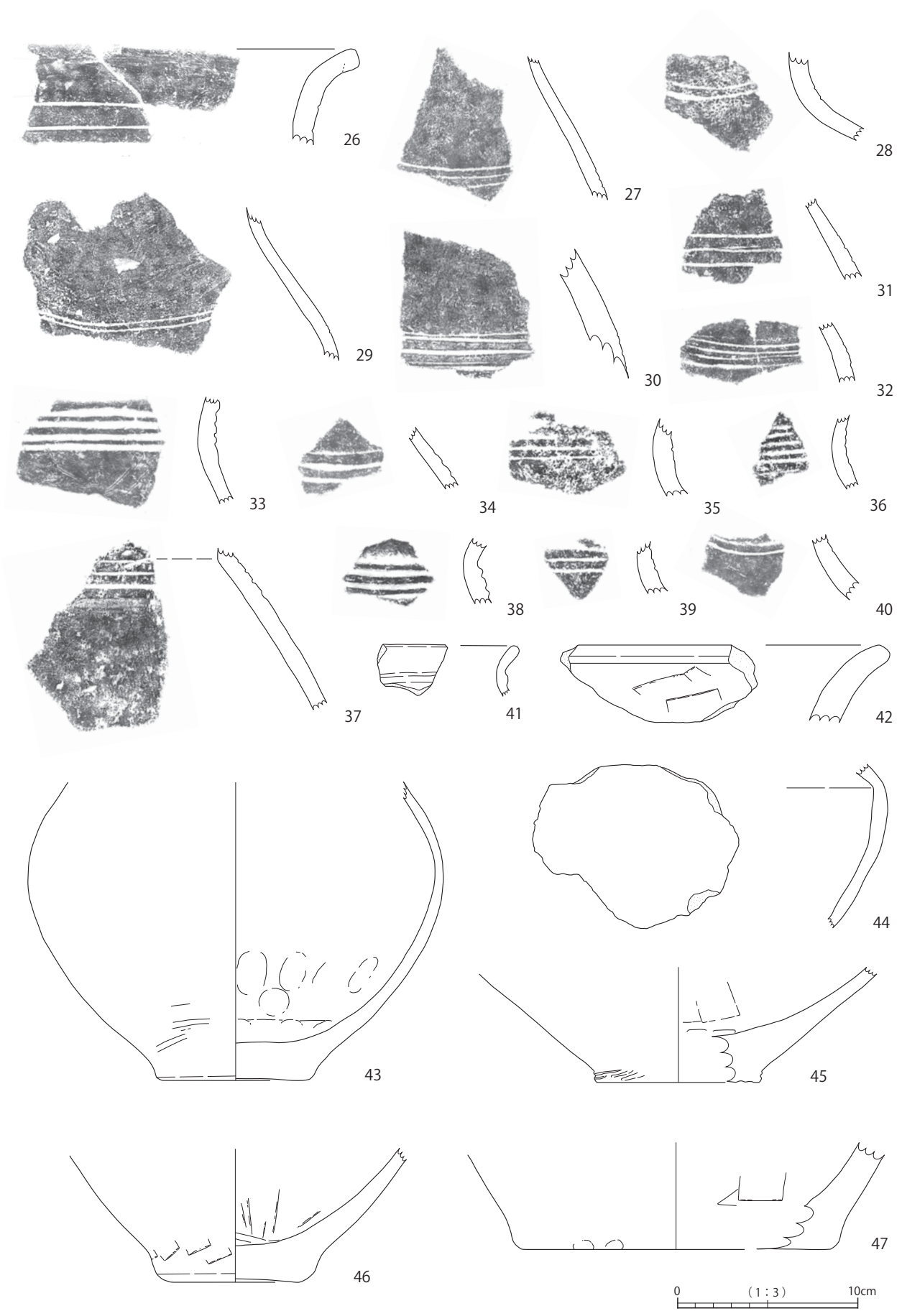
第38図 SX01 遺構実測図



第39图 SX01 出土遺物実測図①

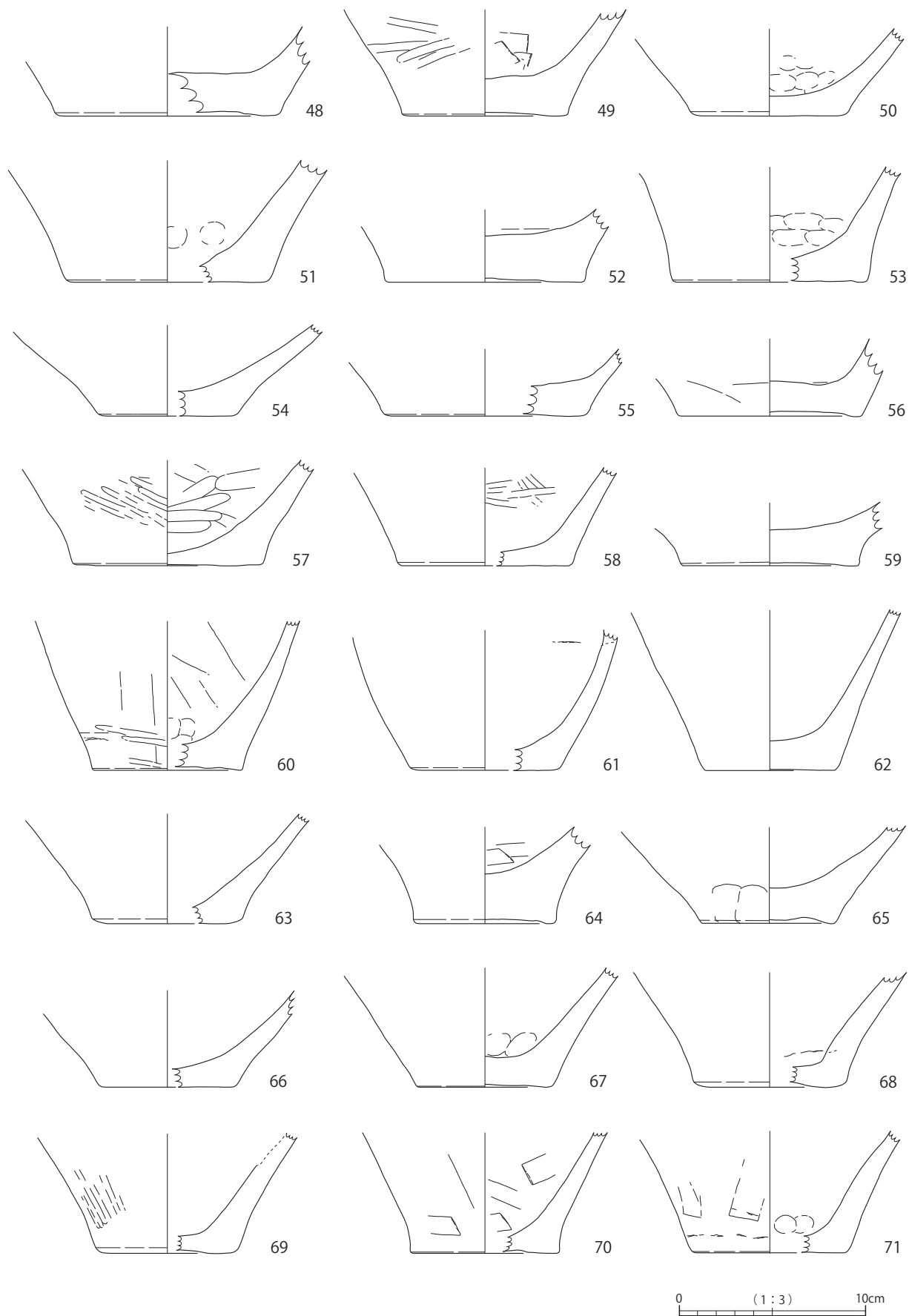


第40图 SX01出土遺物実測図②

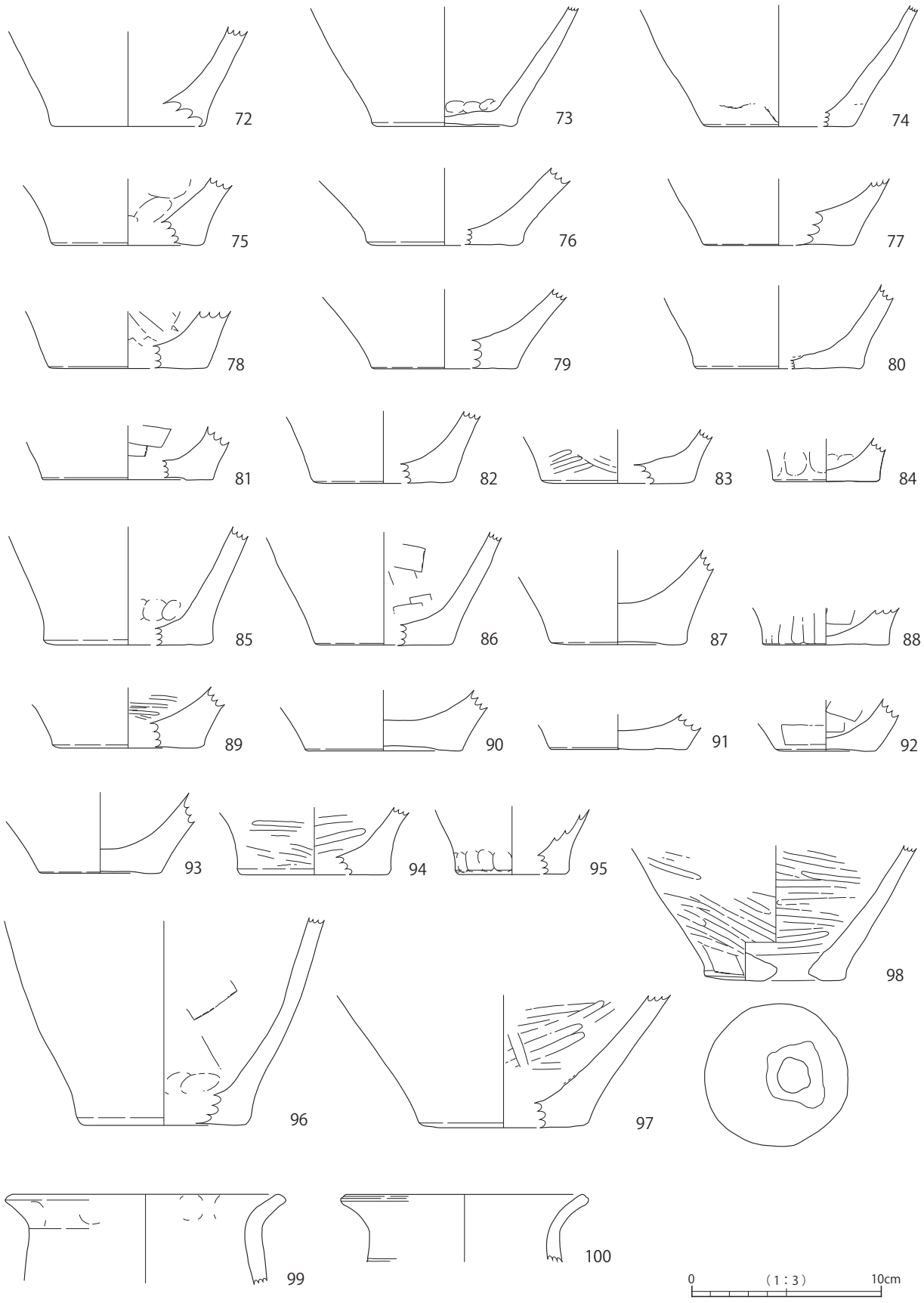


第41图 SX01出土遺物実測図③

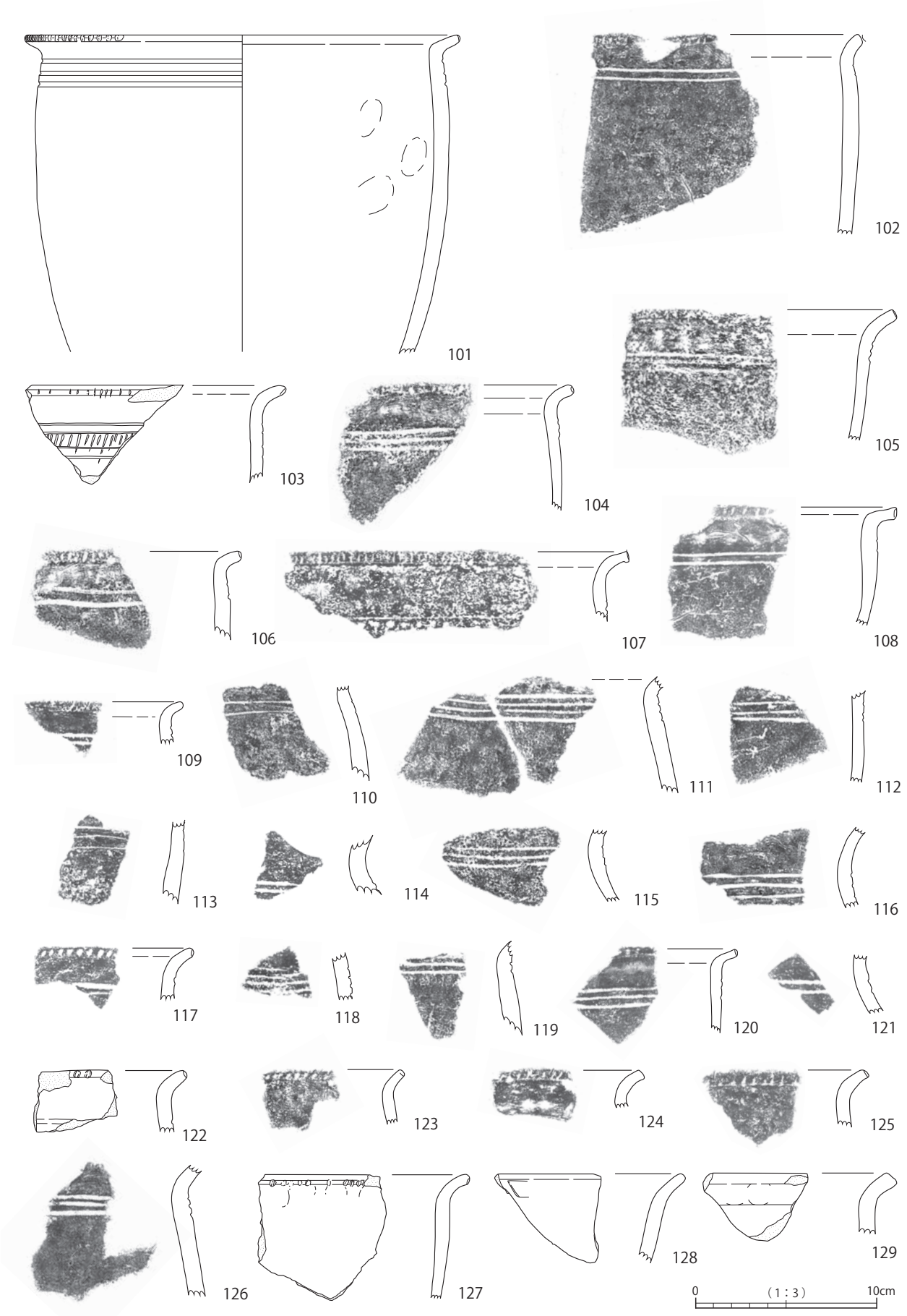




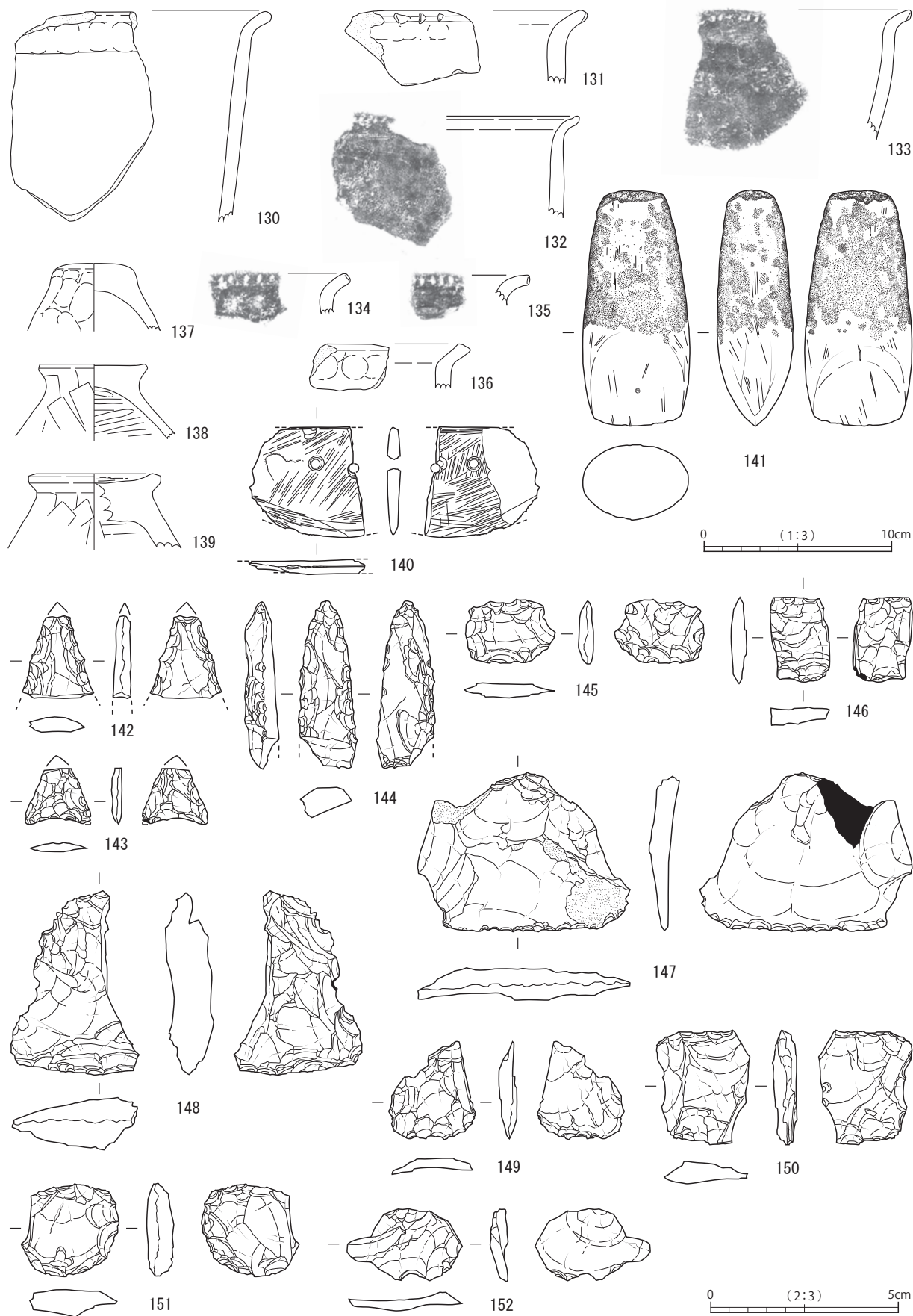
第42图 SX01出土遺物実測図④



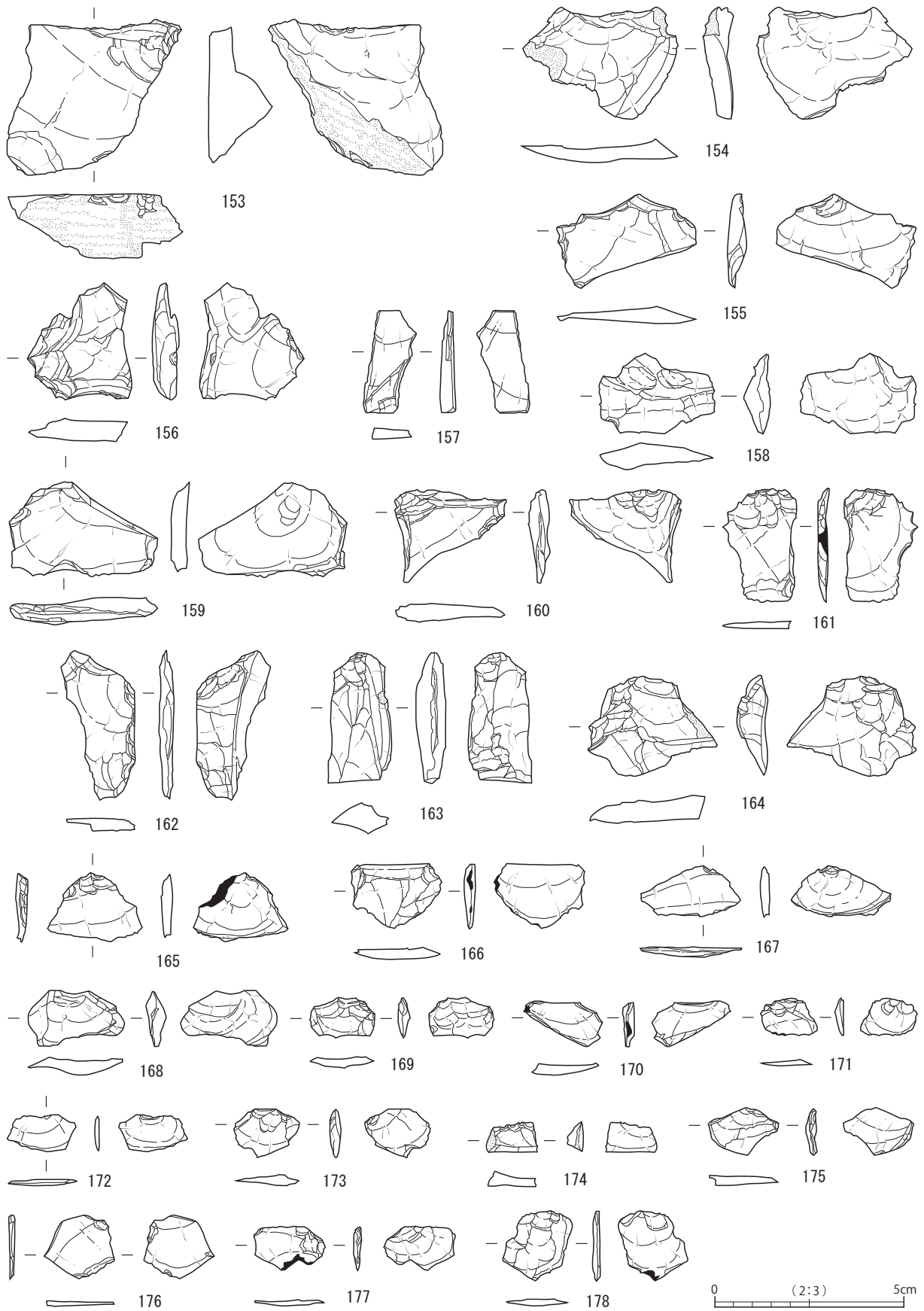
第43图 SX01 出土遺物実測図⑤



第44图 SX01出土遺物実測図⑥



第45图 SX01 出土遺物実測図⑦



第46图 SX01出土遺物実測図⑧



第47図 SX01 出土遺物実測図⑨

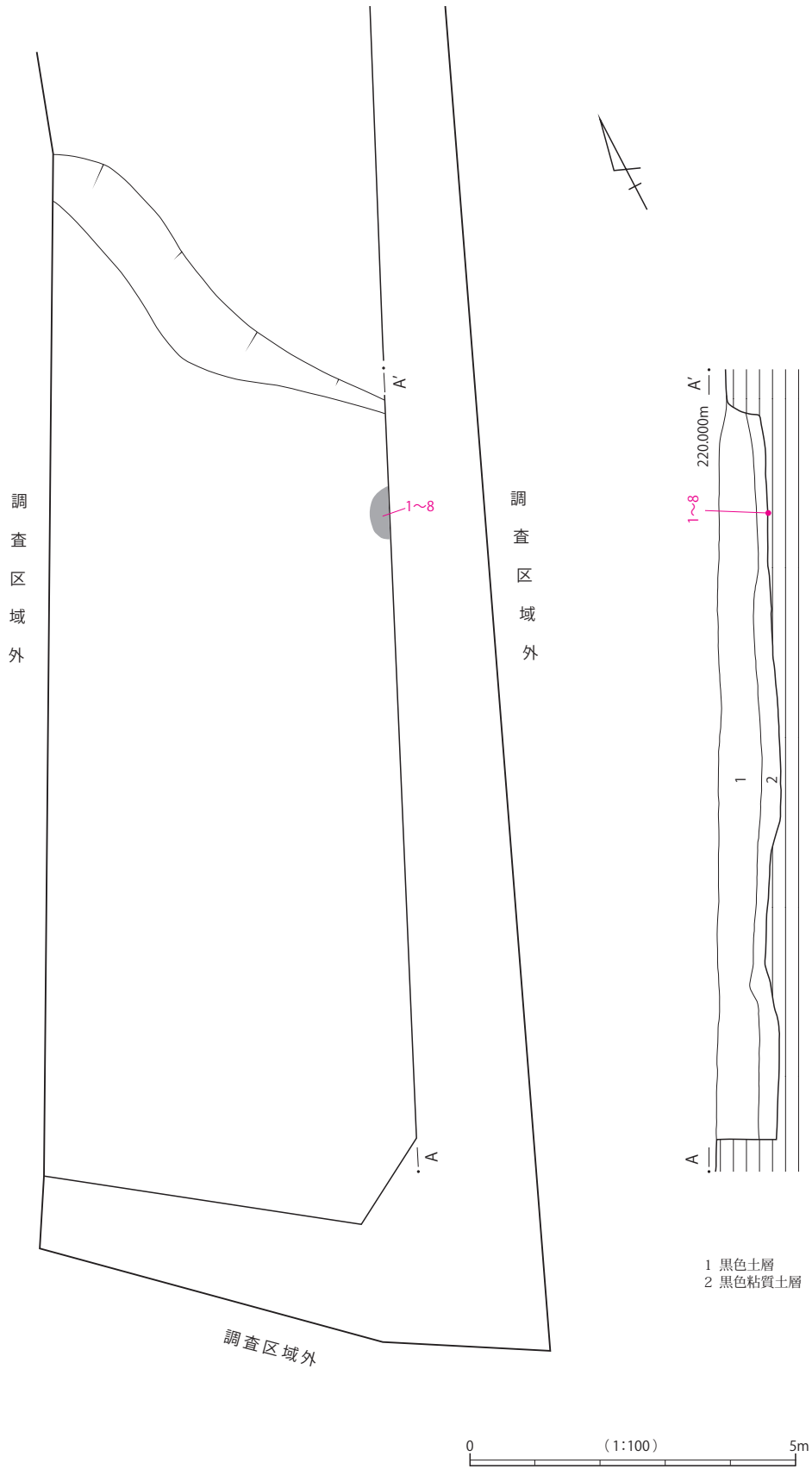
## 6 流路

調査区最南端の谷部に位置する。調査区内で検出したのは、遺構の北辺のみで、東西方向に展開すると考えられる。南辺は検出できなかったが、南に隣接する友松1号遺跡の北側で調査区域外へ展開する不定形な落ち込みを確認していることから、これに続く可能性も考えられる。

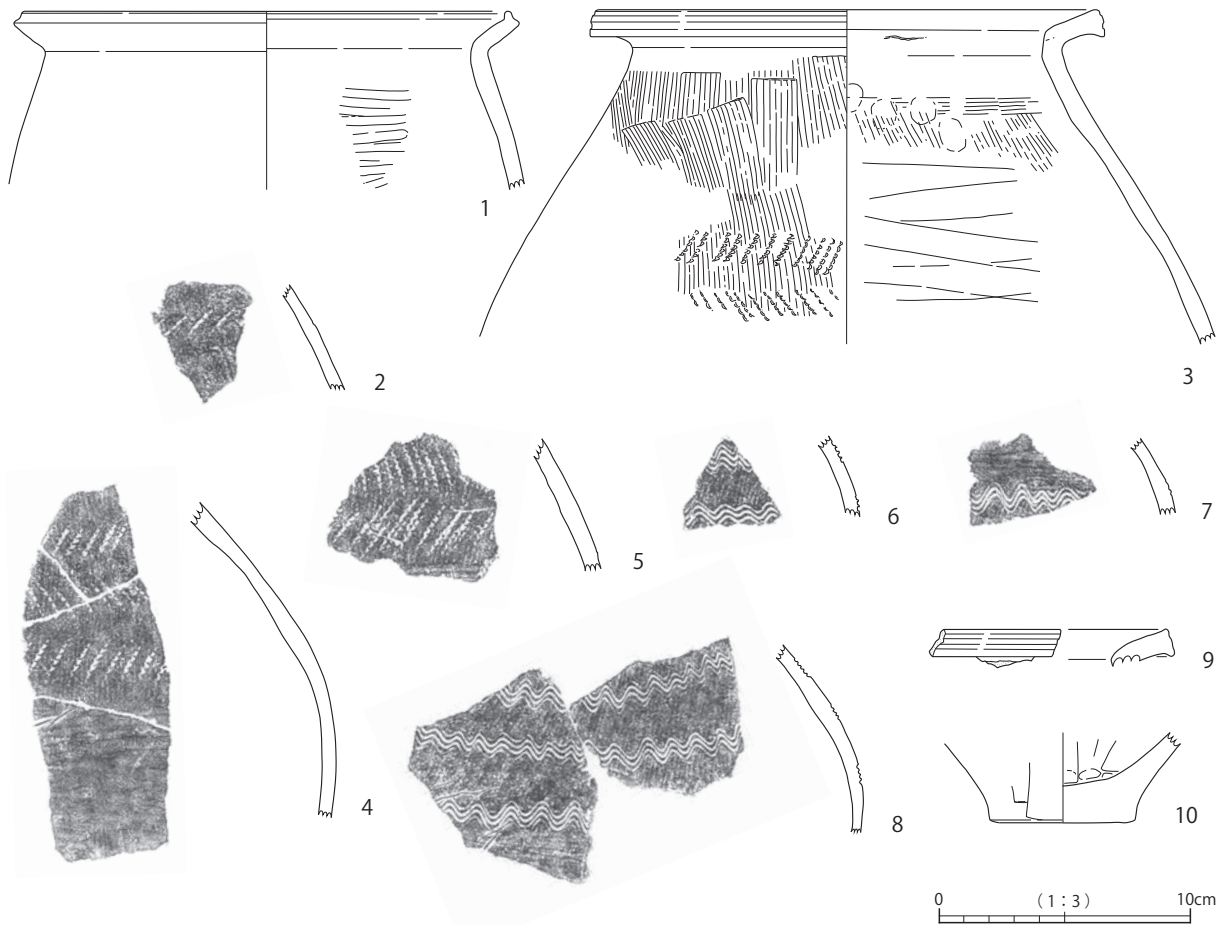
調査区内では南北幅約16m、深さ約0.9mを測るが、友松1号遺跡の北端まで続くとすれば、かなり幅が広がる可能性がある。北壁は、垂直に近く掘り込まれている。

遺物は、いずれも弥生土器で、ほとんど小破片であるが、数量は多くはない。1～5は甕形土器である。2～5は二枚貝による刺突文を施し、3～5は羽状に配する。また、1は1条の凹線、2は2条の凹線が口唇部に巡る。6～10は壺形土器である。6～8は櫛歯状工具による波状文を施し、残存部で6は3段、7は2段を確認できる。また、9は口唇部に2条の凹線が巡る。





第48図 流路遺構実測図

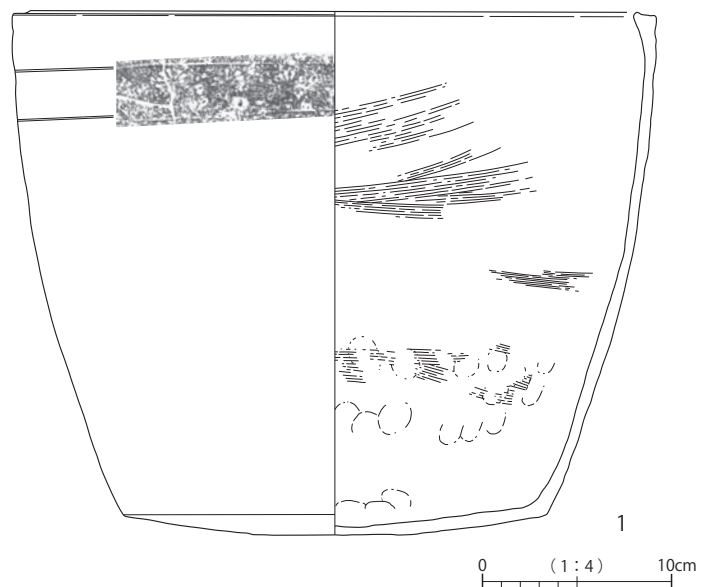


第49図 流路出土遺物実測図

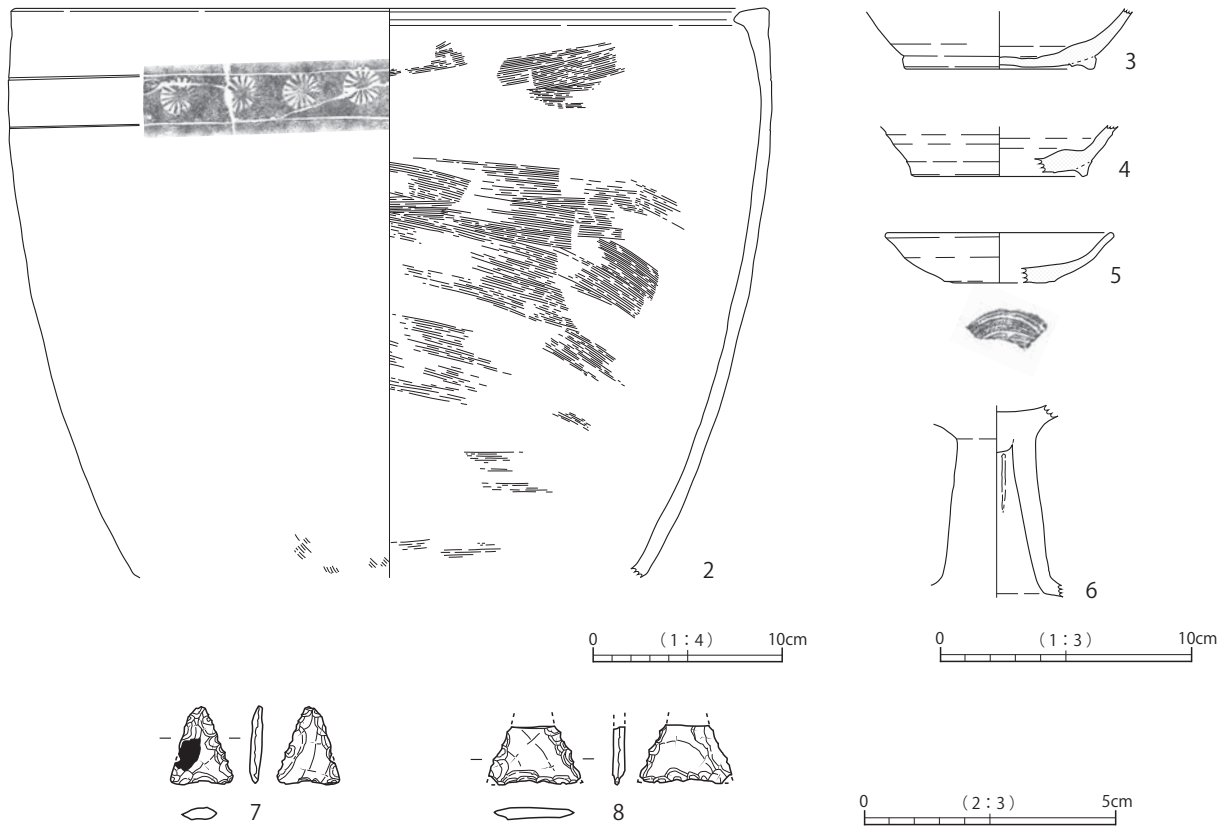
## 7 遺構外出土遺物

調査区内においては、遺構検出作業中に遺構外からも土器や石器などが出土している。

1、2は土師質の甕形土器で、所謂小形の「はんどう甕」である。いずれも胴部上方に2条の平行沈線を施し、その間に同様の印花文を押すが、1は全体に摩滅が顕著で、印花文の痕跡が不明瞭である。なお、1の底部は板状に剥離した状況が認められることから、少なくとも板状の粘土板を4重に重ねて底部を厚く形成していると考えられる。3～5は須恵器で、3、4は高台付杯形土器、5は小形皿形土器で、底部



第50図 表採出土遺物実測図①



第51図 表採出土遺物実測図②

に糸切り痕が残る。6は、土師器の高杯形土器である。7、8は石鏃で、7は小形である。

なお、1～3は、SD02の北側周辺、4、6はSB02周辺、5はSD01西側の谷部、7、8はSX01周辺から出土しており、いずれも遺構に伴うものではない。

## 遺物観察表（土器）

※ 法量欄の（ ）は復元値・[ ] は現存値

遺構番号	遺物番号	種別	器種	法量 (cm)			遺存度 (%)	特徴			調整	備考
				口径	底径	器高		色調	胎土	焼成		
SB01	1	土師器	椀	13.6	—	6.0	ほぼ 完存	外：橙色 内：橙色	やや緻密 砂粒	やや 堅緻		
	2	土師器	椀	14.3	—	8.3	ほぼ 完存	外：褐灰色 内：にぶい橙色	やや粗 砂粒	やや 堅緻	内：ナデ・条痕	
	3	土師器	手づくね	4.4	—	4.9	完存	外：にぶい 内：にぶい	やや粗 砂粒	やや 堅緻	外：ナデ・指頭 内：ナデ・指頭	
	4	須恵器	高台杯	—	(9.0)	[1.2]	15	外：灰色 内：灰白色	緻密 砂粒	やや 堅緻		ロクロ整形
SB02	1	須恵器	壺	—	(11.2)	[13.0]	50	外：灰白色 内：灰白色	やや緻密 砂粒	堅緻	外：回転ヘラケズリ	ロウロ整形
	2	土師器	杯	—	—	[0.9]	破片	外：橙色 内：橙色	やや緻密 砂粒	堅緻		回転ヘラ切り
SB03	1	土師器	甑	(27.0)	—	[20.0]	75	外：淡橙色 内：淡橙色	やや粗 砂粒	やや 堅緻	外：ナデ・指頭 内：ナデ・指頭	
	2	土師器	甗	(13.0)	—	(15.0)	50	外：灰褐色 内：褐灰色	やや粗 大砂粒	やや 堅緻	外：ナデ・板ナデ 内：ナデ・指頭	
	3	土師器	甗	—	—	[4.1]	25	外：にぶい 内：にぶい	やや粗 砂粒	やや 堅緻	内：指頭	
	4	土師器	甗	(16.0)	—	[2.2]	15	外：褐灰色 内：褐灰色	やや粗 砂粒	やや 堅緻	口：ヨコナデ	
	5	土師器	甗	—	—	[3.8]	破片	外：にぶい 内：にぶい	やや粗 大砂粒	やや 堅緻	口：ヨコナデ	
	6	土師器	椀	(12.8)	—	[3.3]	20	外：にぶい 内：にぶい	やや緻密 大砂粒	堅緻	口：ヨコナデ	
SB04	1	弥生	甗	—	—	[6.6]	破片	外：にぶい 内：にぶい	やや粗 大砂粒	やや 堅緻	外：ナデ 内：ナデ	口：刻み目
	2	弥生	甗	—	—	[2.1]	破片	外：灰黄褐色 内：にぶい	やや粗 大砂粒	やや 堅緻	外：ナデ 内：ナデ	沈線1条 口：刻み目
SK03	1	土師質	杯	(13.4)	(7.2)	2.5	50	外：灰白色 内：灰白色	やや緻密 砂粒	やや 軟弱		ロクロ整形
	2	土師質	杯	13.1	6.7	2.8	90	外：灰白色 内：灰白色	やや緻密 砂粒	やや 軟弱		ロクロ整形
	3	土師質	杯	(12.8)	(6.6)	2.7	50	外：にぶい 内：にぶい	やや緻密 砂粒	やや 軟弱		ロクロ整形
	4	土師質	杯	(12.7)	(5.0)	3.1	50	外：灰白色 内：灰白色	やや緻密 砂粒	やや 軟弱		ロクロ整形 回転糸切り
	5	土師質	杯	(14.0)	—	[2.5]	25	外：にぶい 内：浅黄	やや緻密 砂粒微少	やや 軟弱		ロクロ整形
	6	土師質	杯	(13.2)	—	[2.7]	15	外：にぶい 内：明黄	やや緻密 砂粒微少	やや 軟弱		ロクロ整形 口唇部に暗赤 褐色鉄分付着
	7	土師質	杯	(13.0)	—	[1.5]	15	外：灰白色 内：灰白色	やや緻密 砂粒	やや 軟弱		ロクロ整形 内面に暗赤 褐色鉄分付着
	8	土師質	杯	—	(7.7)	[1.3]	50	外：浅黄 内：浅黄	やや緻密 砂粒微少	やや 軟弱		ロクロ整形 回転糸切り
	9	土師質	杯	13.2	6.1	3.2	75	外：浅黄 内：浅黄	やや粗 大砂粒	やや 軟弱		ロクロ整形 内外面に暗赤 褐色鉄分付着
	10	土師質	杯	13.6	6.7	2.9	75	外：灰白色 内：灰白色	やや緻密 大砂粒・ 赤色粒	やや 軟弱		ロクロ整形 底部内面に赤 色鉄分付着
	11	土師質	杯	—	6.6	[0.8]	75	外：灰白色 内：灰黄	やや緻密 砂粒微少	やや 堅緻		ロクロ整形 回転糸切り 内面被熱痕（熱 変で歪み有）
	12	土師質	杯	—	—	[3.5]	破片	外：灰白色 内：灰白色	やや緻密 砂粒微少	やや 軟弱		ロウロ整形 底部内面に赤 色鉄分付着
	13	土師質	小皿	7.9	5.0	1.2	完存	外：灰白色 内：灰白色	やや緻密 砂粒	やや 軟弱		ロクロ整形 回転糸切り

遺構番号	遺物番号	種別	器種	法量 (cm)			遺存度 (%)	特徴			調整	備考
				口径	底径	器高		色調	胎土	焼成		
	14	瓦器	椀	(15.0)	(4.8)	4.3	40	外：灰褐色 内：灰褐色	やや緻密 砂粒微少	やや 堅緻	外：指頭 内：ヘラミガキ	
SK05	1	土師器	高杯	(15.6)	(12.0)	(11.3)	65	外：橙色 内：橙色	やや粗 砂粒	やや 堅緻	外：ナデ 内：ヘラケズリ・ナデ	
SK07	1	土師器	高杯	-	-	[4.7]	40	外：橙色 内：にぶい橙色	やや粗 大砂粒	やや 堅緻	外：指頭	
SK10	1	土師器	高杯	(20.2)	-	[8.6]	75	外：にぶい黄橙色 内：にぶい黄橙色	やや粗 砂粒微少	やや 堅緻	外：ハケ・指頭	
	2	土師器	高杯	(20.2)	-	[7.7]	40	外：灰黄褐色 内：浅黄褐色	やや粗 砂粒微少	やや 堅緻	外：ハケ 内：ハケ	
	3	土師器	壺	-	-	[7.7]	100	外：橙色 内：灰褐色	やや粗 大砂粒	やや 堅緻		
SD01	1	弥生	甕	-	-	[3.9]	破片	外：灰褐色 内：にぶい黄橙色	粗 大砂粒	やや 堅緻	外：ナデ・指頭	沈線1条 口：刻み目
	2	弥生	壺	-	(6.9)	[2.3]	35	外：にぶい橙色 内：浅黄褐色	粗 大砂粒	やや 堅緻		
	3	須恵器	高台杯	-	6.0	[2.0]	75	外：灰白色 内：にぶい黄褐色	やや緻密 砂粒微少	やや 軟弱		ロクロ整形 回転糸切り
SD02	1	弥生	壺	(35.4)	-	[8.9]	25	外：浅黄褐色 内：浅黄褐色	やや粗 砂粒・赤色 粒多	やや 堅緻		
	2	弥生	壺	(35.8)	-	[6.9]	15	外：灰黄褐色 内：灰黄褐色	やや粗 大砂粒	やや 堅緻	外：ヘラミガキ・ナデ 内：ヘラミガキ	
	3	弥生	壺	(18.6)	-	[8.7]	15	外：にぶい黄褐色 内：にぶい黄褐色	やや粗 大砂粒	堅緻	外：ヘラミガキ・ナデ 内：ヘラミガキ	削出突帯6条
	4	弥生	壺	-	-	[10.8]	15	外：橙色 内：橙色	粗 大砂粒多	やや 堅緻	内：ナデ	削出突帯2条
	5	弥生	壺	(15.0)	-	[13.8]	25	外：浅黄褐色 内：淡黄色	やや緻密 砂粒微少	やや 堅緻	外：ヘラミガキ 内：ヘラミガキ・指頭・ナデ	沈線3条2段
	6	弥生	壺	(13.4)	-	[7.4]	25	外：にぶい橙色 内：にぶい橙色	やや粗 砂粒	やや 堅緻	外：指頭 内：指頭	沈線3条
	7	弥生	壺	-	-	[7.1]	25	外：にぶい黄褐色 内：にぶい橙	やや粗 大砂粒	やや 堅緻	内：ナデ	削出突帯6条
	8	弥生	壺	(13.2)	-	[5.65]	15	外：黒褐色 内：黒褐色	やや粗 砂粒多	やや 堅緻	内：ヘラミガキ	沈線(3条) 口：凹線1条
	9	弥生	壺	(13.0)	-	[5.6]	15	外：淡赤褐色 内：橙色	粗 大砂粒多	やや 堅緻		
	10	弥生	壺	(14.8)	-	[5.7]	15	外：にぶい橙色 内：にぶい橙黄色	やや粗 大砂粒	やや 堅緻	外：指頭	沈線(1条)
	11	弥生	壺	-	5.5	[13.4]	50	外：明褐灰色 内：にぶい黄褐色	やや緻密 砂粒少	やや 堅緻	外：ヘラミガキ・指頭 内：板ナデ・ナデ・指頭	沈線2条 貼付突帯(刻み有) 焼成後穿孔 (孔径0.8cm)
	12	弥生	壺	-	7.4	[14.3]	63	外：黒褐色 内：黒褐色	やや粗 砂粒多	やや 堅緻	外：ヘラミガキ・指頭 内：ヘラミガキ・指頭	削出突帯3条
	13	弥生	壺	-	4.3	[11.5]	88	外：にぶい黄褐色 内：にぶい黄褐色	やや緻密 砂粒微少	やや 堅緻	外：ヘラミガキ 内：板ナデ・指頭	
	14	弥生	壺	-	-	[4.1]	破片	外：にぶい黄褐色 内：にぶい黄褐色	やや緻密 砂粒	やや 堅緻	外：ナデ・指頭 内：ナデ	口：沈線1条
	15	弥生	壺	-	-	[2.9]	破片	外：橙色 内：にぶい橙色	やや緻密 砂粒	やや 堅緻	内：ナデ	平行沈線5条 斜格子文
	16	弥生	壺	-	-	[6.4]	破片	外：にぶい黄褐色 内：灰黄褐色	やや粗 大砂粒	やや 堅緻	外：ヘラミガキ・ナデ 内：ヘラミガキ	削出突帯3条
	17	弥生	壺	-	-	[5.1]	破片	外：にぶい黄褐色 内：にぶい黄褐色	やや緻密 砂粒	やや 堅緻	外：ヘラミガキ・ナデ 内：ナデ	削出突帯3条
	18	弥生	壺	-	-	[3.7]	破片	外：にぶい黄褐色 内：にぶい黄褐色	やや緻密 砂粒	やや 堅緻	内：指頭	削出突帯(5条)
	19	弥生	壺	-	-	[10.3]	破片	外：灰白色 内：灰黄褐色	粗 大砂粒多	やや 堅緻	外：ヘラミガキ・ナデ 内：ヘラミガキ	削出突帯1条 口：凹線1条・ 刻み目 内：貼付突帯
	20	弥生	壺	-	-	[5.4]	破片	外：にぶい橙色 内：灰褐色	やや緻密 砂粒	やや 堅緻	外：ヘラミガキ 内：ナデ	削出突帯(3条)

遺構 番号	遺物 番号	種 別	器 種	法 量 (cm)			遺存度 (%)	特 徴			調 整	備 考
				口径	底径	器高		色 調	胎 土	焼 成		
	21	弥 生	壺	-	-	[4.7]	破片	外：橙色 内：橙色	やや粗 大砂粒	やや 堅緻	外：ナデ 内：指頭	沈線4条
	22	弥 生	壺	-	-	[4.3]	破片	外：褐灰色 内：灰白色	やや粗 砂粒	やや 堅緻	外：ナデ 内：指頭	沈線3条
	23	弥 生	壺	-	-	[5.9]	破片	外：にぶい黄橙色 内：にぶい黄橙色	やや粗 大砂粒	やや 堅緻	外：ヘラミガキ・ナデ 内：ヘラミガキ	沈線2条
	24	弥 生	壺	-	-	[5.3]	破片	外：灰白色 内：にぶい橙色	やや緻密 砂粒	やや 堅緻	内：板ナデ	貼付突帯 (刻み目有)
	25	弥 生	壺	-	7.7	[7.2]	100	外：浅黄橙色 内：灰白色	やや粗 大砂粒	やや 堅緻	外：ヘラミガキ 内：ナデ・指頭	
	26	弥 生	壺	-	(7.4)	[8.7]	50	外：にぶい黄橙色 内：橙色	やや粗 大砂粒・赤 色粒	やや 堅緻		
	27	弥 生	壺	-	(10.0)	[9.2]	50	外：にぶい黄色 内：浅黄色	粗 大砂粒多	やや 堅緻	内：ナデ・指頭	
	28	弥 生	壺	-	(10.0)	[5.4]	25	外：橙色 内：にぶい黄橙色	やや緻密 砂粒	やや 堅緻	外：板ナデ 内：板ナデ	
	29	弥 生	壺	-	7.7	[6.5]	65	外：灰黄色 内：褐灰色	やや粗 砂粒多	やや 堅緻	内：指頭	
	30	弥 生	壺	-	(6.0)	[15.4]	25	外：灰黄褐色 内：灰黄色	やや粗 大砂粒	やや 堅緻	外：ヘラミガキ 内：ヘラミガキ	
	31	弥 生	壺	-	-	[33.1]	25	外：褐色 内：浅黄橙色	やや粗 砂粒	やや 堅緻	外：板ナデ 内：板ナデ	
	32	弥 生	壺	-	(17.0)	[28.8]	25	外：浅黄橙色 内：灰白色	やや粗 大砂粒	やや 堅緻	外：ヘラミガキ・板ナデ	
	33	弥 生	壺	-	(8.9)	[2.7]	25	外：灰白色 内：灰白色	粗 大砂粒多	やや 堅緻	外：板ナデ 内：板ナデ	
	34	弥 生	壺	-	(11.4)	[3.4]	25	外：にぶい褐色 内：にぶい黄橙色	やや粗 大砂粒	やや 堅緻	外：ヘラケズリ・ヘラミガキ・ ナデ	
	35	弥 生	壺	-	(8.8)	[4.4]	25	外：灰白色 内：灰白色	やや粗 砂粒	やや 堅緻		
	36	弥 生	壺	-	(8.4)	[5.2]	75	外：灰黄褐色 内：灰色	やや粗 砂粒多	やや 堅緻		
	37	弥 生	壺	-	(8.0)	[4.9]	75	外：灰白色 内：灰白色	粗 大砂粒多	やや 堅緻		
	38	弥 生	壺	-	8.7	[4.3]	100	外：にぶい橙色 内：にぶい黄橙色	やや粗 大砂粒	やや 堅緻	外：板ナデ・ナデ 内：板ナデ・指頭	
	39	弥 生	壺	-	(7.8)	[3.1]	40	外：橙色 内：褐灰色	粗 大砂粒多	やや 堅緻	外：ヘラミガキ	沈線3条
	40	弥 生	壺	-	(8.4)	[3.4]	65	外：にぶい褐色 内：灰褐色	粗 大砂粒多	やや 堅緻		
	41	弥 生	壺	-	(10.0)	[3.8]	30	外：浅黄橙色 内：浅黄橙色	粗 大砂粒多	やや 堅緻		
	42	弥 生	壺	-	(7.2)	[5.5]	50	外：橙色 内：灰白色	やや粗 大砂粒	やや 堅緻	外：ナデ 内：指頭	
	43	弥 生	壺	-	8.2	[5.1]	100	外：浅黄橙色 内：浅黄橙色	やや粗 大砂粒・赤 色粒	やや 堅緻		
	44	弥 生	壺	-	(6.4)	[4.2]	25	外：橙色 内：灰白色	粗 大砂粒多	やや 堅緻		
	45	弥 生	壺	-	(11.6)	[6.5]	40	外：にぶい黄橙色 内：灰白色	粗 大砂粒多	やや 堅緻		
	46	弥 生	壺	-	5.7	[5.0]	100	外：灰褐色 内：黒褐色	粗 大砂粒多	やや 堅緻	内：ヘラミガキ	
	47	弥 生	壺	-	(7.7)	[6.4]	25	外：橙色 内：にぶい黄褐色	やや粗 大砂粒	やや 堅緻	外：ヘラミガキ・ナデ	
	48	弥 生	壺	-	(8.0)	[6.5]	25	外：にぶい黄橙色 内：にぶい黄橙色	やや緻密 赤色粒	やや 堅緻	外：板ナデ	
	49	弥 生	壺	-	(8.0)	[3.2]	25	外：にぶい褐色	やや粗 砂粒多	やや 堅緻	外：ヘラミガキ	
	50	弥 生	甗	(24.2)	-	[17.3]	15	外：にぶい褐色 内：にぶい黄橙色	粗 大砂粒多	やや 堅緻	外：指頭・板ナデ 内：指頭・板ナデ	凹線2条 口：刻み目



遺構 番号	遺物 番号	種 別	器 種	法 量 (cm)			遺存度 (%)	特 徴			調 整	備 考
				口径	底径	器高		色 調	胎 土	焼 成		
	51	弥 生	甕	(23.4)	-	[11.0]	25	外：灰褐色 内：浅黄橙色	やや緻密 砂粒	やや 堅緻	外：ナデ・指頭 内：ヘラミガキ・指頭・板ナデ・ ナデ	沈線2条 口：刻み目 スス付着
	52	弥 生	甕	(18.7)	-	[7.7]	15	外：灰褐色 内：灰白色	粗 大砂粒多	やや 堅緻	外：ナデ	口：刻み目 スス付着
	53	弥 生	甕	(21.8)	-	[12.6]	15	外：灰白色 内：灰白色	やや粗 砂粒多	やや 堅緻		スス付着
	54	弥 生	甕	(22.0)	-	[9.9]	25	外：にぶい橙色 内：にぶい橙色	やや緻密 砂粒	やや 堅緻	外：指頭・板ナデ 内：指頭・板ナデ	口：刻み目 スス付着
	55	弥 生	甕	(19.8)	-	[5.2]	25	外：にぶい黄橙色 内：浅黄橙色	やや粗 大砂粒	やや 堅緻		口：刻み目
	56	弥 生	甕	(25.8)	-	[17.3]	15	外：にぶい黄橙色 内：にぶい黄橙色	やや粗 大砂粒	やや 堅緻	外：ナデ・指頭 内：板ナデ・指頭	スス付着
	57	弥 生	甕	-	-	[10.3]	15	外：灰黄褐色 内：にぶい橙色	やや粗 大砂粒	やや 堅緻	内：指頭	スス付着
	58	弥 生	甕	-	-	[7.7]	15	外：灰黄褐色 内：灰白色	やや粗 砂粒	やや 堅緻		沈線1条
	59	弥 生	甕	(15.8)	-	[8.0]	25	外：褐色 内：にぶい黄橙色	やや粗 砂粒	やや 堅緻	外：ナデ 内：指頭・ナデ	口：刻み目 スス付着
	60	弥 生	甕	(15.5)	[6.3]	-	15	外：にぶい橙色 内：にぶい橙色	やや粗 砂粒多	やや 堅緻	外：ナデ・指頭 内：ナデ・指頭	
	61	弥 生	甕	-	-	[3.6]	破片	外：黒褐色 内：灰黄褐色	やや粗 雲母	やや 堅緻	外：ナデ	口：刻み目 スス付着
	62	弥 生	甕	-	-	[10.3]	破片	外：灰黄褐色 内：にぶい黄橙色	やや粗 砂粒多	やや 堅緻	外：ナデ 内：板ナデ・ナデ	沈線4条 口：刻み目
	63	弥 生	甕	-	-	[7.0]	破片	外：灰黄色 内：灰白色	やや粗 大砂粒	やや 堅緻	外：指頭 内：板ナデ	沈線2条
	64	弥 生	甕	-	-	[3.4]	破片	外：褐灰色 内：にぶい褐色	やや粗 大砂粒	やや 堅緻	外：ナデ 内：ナデ	沈線4条 刺突文 口：刻み目
	65	弥 生	甕	-	-	[5.1]	破片	外：にぶい褐色 内：黒褐色	やや粗 大砂粒	やや 堅緻	外：ナデ 内：ヘラミガキ	沈線4条
	66	弥 生	甕	-	-	[6.6]	破片	外：にぶい黄橙色 内：浅黄橙色	やや粗 赤色粒	やや 堅緻	外：ナデ・指頭	沈線2条
	67	弥 生	甕	-	-	[7.4]	破片	外：にぶい黄橙色 内：にぶい黄橙色	やや粗 大砂粒	やや 堅緻	内：ナデ	沈線2条 口：刻み目
	68	弥 生	甕	-	-	[6.6]	破片	外：にぶい黄褐色 内：にぶい黄橙色	やや粗 砂粒	やや 堅緻	外：ナデ 内：ナデ	沈線3条 口：刻み目
	69	弥 生	甕	-	-	[4.4]	破片	外：黒褐色 内：にぶい橙色	やや粗 砂粒	やや 堅緻		沈線3条 口：刻み目
	70	弥 生	甕	-	-	[8.4]	破片	外：にぶい黄褐色 内：灰白色	やや粗 砂粒	やや 堅緻	外：ヘラミガキ 内：指頭	沈線2条 口：刻み目
	71	弥 生	甕	-	-	[2.7]	破片	外：にぶい黄褐色 内：灰白色	やや粗 大砂粒	やや 堅緻		沈線1条 口：刻み目
	72	弥 生	甕	-	-	[3.4]	破片	外：灰黄褐色 内：にぶい黄褐色	やや粗 砂粒	やや 堅緻	外：ナデ	沈線2条 口：刻み目
	73	弥 生	甕	-	-	[8.0]	破片	外：にぶい橙色 内：にぶい橙色	やや粗 砂粒	やや 堅緻	外：ナデ 内：ナデ	沈線3条
	74	弥 生	甕	-	-	[5.5]	破片	外：にぶい橙色 内：灰白色	やや粗 大砂粒	やや 堅緻	外：ナデ	沈線2条
	75	弥 生	甕	-	-	[5.3]	破片	外：灰白色 内：浅黄褐色	やや粗 大砂粒	やや 堅緻	外：ナデ 内：指頭・ナデ	沈線2条
	76	弥 生	甕	-	-	[11.4]	破片	外：灰白色 内：灰白色	粗 大砂粒多	やや 堅緻	外：ナデ 内：ナデ	沈線2条 口：刻み目
	77	弥 生	甕	-	-	[6.0]	破片	外：にぶい黄褐色 内：にぶい黄褐色	やや粗 大砂粒	やや 堅緻	外：指頭 内：指頭	口：刻み目
	78	弥 生	甕	-	-	[4.9]	破片	外：にぶい褐色 内：浅黄褐色	やや粗 大砂粒	やや 堅緻	外：指頭・ナデ 内：指頭・ナデ	口：刻み目
	79	弥 生	甕	-	-	[7.9]	破片	外：灰黄褐色 内：灰白色	やや粗 砂粒	やや 堅緻	外：指頭 内：指頭・ナデ	口：刻み目
	80	弥 生	蓋	-	22.6	[7.7]	15	外：にぶい黄褐色 内：にぶい黄褐色	やや粗 赤色粒	やや 堅緻	外：ヘラミガキ・ナデ 内：ヘラミガキ	

遺構 番号	遺物 番号	種 別	器 種	法 量 (cm)			遺存度 (%)	特 徴			調 整	備 考
				口径	底径	器高		色 調	胎 土	焼 成		
	81	弥 生	蓋	-	-	[6.2]	40	外：にぶい 内：浅黄橙色	やや粗 砂粒	やや 堅緻		
	82	弥 生	ミニチュア	6.7	4.3	6.4	完存	外：にぶい黄橙色 内：にぶい黄橙色	やや粗 大砂粒	やや 堅緻	外：指頭・ナデ 内：指頭・ナデ	
SD03	1	弥 生	壺	(13.6)	-	[6.9]	40	外：明褐灰色 内：にぶい黄橙色	やや粗 大砂粒	やや 堅緻	外：ヘラミガキ・ナデ 内：ヘラミガキ・指頭	貼付突帯
	2	弥 生	甕	-	-	[6.2]	破片	外：灰褐色 内：灰褐色	やや粗 大砂粒	やや 堅緻	外：指頭	口：刻み目
	3	弥 生	甕	-	-	[3.3]	破片	外：にぶい黄橙色 内：浅黄橙色	やや粗 砂粒	やや 堅緻		沈線3条
	4	弥 生	壺	-	-	[5.5]	25	外：灰黄褐色 内：黒褐色	やや粗 大砂粒	やや 堅緻	内：板ナデ・絞り目	
SD04	1	弥 生	壺	-	(7.3)	[7.3]	25	外：灰白色 内：灰白色	やや粗 大砂粒	やや 堅緻	外：ヘラミガキ 内：板ナデ・指頭	
	2	弥 生	壺	-	-	[4.2]	破片	外：にぶい黄橙色 内：にぶい黄橙色	やや粗 大砂粒	やや 堅緻	外：ナデ 内：ナデ	沈線2条 焼成前穿孔
	3	弥 生	甕	-	-	[4.7]	破片	外：にぶい褐色 内：褐灰色	やや粗 砂粒	やや 堅緻	内：ナデ	沈線2条
	4	弥 生	壺	-	(3.8)	[3.9]	25	外：にぶい褐色 内：褐色	やや粗 砂粒	やや 堅緻	外：板ナデ 内：板ナデ	
SX01	1	弥 生	壺	(13.3)	-	[16.4]	40	外：赤褐色 内：赤褐色	やや粗 砂粒	やや 堅緻	内：指頭	沈線4条2段
	2	弥 生	壺	-	-	[11.9]	15	外：灰黄褐色 内：にぶい黄橙色	粗 砂粒多	やや 軟弱	内：ヘラミガキ	沈線4条
	3	弥 生	壺	(17.1)	-	[13.6]	25	外：浅黄褐色 内：浅黄褐色	やや粗 赤色粒	やや 堅緻		沈線4条
	4	弥 生	壺	-	-	[9.6]	15	外：浅黄褐色 内：橙色	やや粗 大砂粒・赤 色粒	やや 堅緻		沈線2条
	5	弥 生	壺	(17.3)	-	[8.7]	15	外：にぶい 内：にぶい	やや粗 砂粒	やや 堅緻		削出突帯3条
	6	弥 生	壺	(21.0)	-	[10.3]	15	外：にぶい 内：にぶい	やや粗 大砂粒	やや 堅緻		削出突帯5条 内：貼付突帯
	7	弥 生	壺	-	-	[6.3]	15	外：にぶい 内：にぶい	やや粗 大砂粒	やや 堅緻	内：指頭	削出突帯4条
	8	弥 生	壺	(17.3)	-	[12.7]	25	外：にぶい赤褐色 内：にぶい赤褐色	やや粗 大砂粒	やや 堅緻	外：板ナデ・ナデ 内：板ナデ・ナデ	削出突帯2条
	9	弥 生	壺	(12.0)	-	[7.5]	15	外：にぶい褐色 内：にぶい褐色	やや粗 大砂粒	やや 堅緻	外：ヘラミガキ 内：ヘラミガキ	削出突帯
	10	弥 生	壺	(14.0)	-	[4.6]	25	外：にぶい黄褐色 内：にぶい黄褐色	やや粗 砂粒	やや 堅緻		削出突帯
	11	弥 生	壺	-	-	[6.5]	25	外：にぶい黄褐色 内：にぶい黄褐色	やや粗 砂粒	やや 堅緻	内：絞り目	削出突帯1条 削出突帯2条
	12	弥 生	壺	(8.9)	-	[4.1]	15	外：灰黄褐色 内：灰黄褐色	やや粗 砂粒	やや 堅緻		削出突帯2条
	13	弥 生	壺	-	-	[17.6]	破片	外：灰白色 内：浅黄褐色	やや粗 赤色粒	やや 堅緻	内：ヘラミガキ	削出突帯3条 口：凹線1条・ 刻み目
	14	弥 生	壺	-	-	[3.2]	破片	外：にぶい 内：にぶい	やや緻密 砂粒	やや 堅緻	内：ナデ	削出突帯(3条)
	15	弥 生	壺	-	-	[4.7]	破片	外：黒褐色 内：黒褐色	やや緻密 大砂粒多	やや 堅緻	内：指頭	削出突帯(3条)
	16	弥 生	壺	-	-	[1.2]	破片	外：にぶい黄褐色 内：にぶい黄褐色	やや緻密 砂粒	やや 堅緻		口：刻み目
	17	弥 生	壺	-	-	[8.5]	15	外：にぶい黄褐色 内：にぶい	やや粗 砂粒	やや 堅緻	内：指頭・ナデ	
	18	弥 生	壺	(11.7)	-	[8.0]	25	外：灰黄褐色 内：灰黄褐色	粗 砂粒	やや 軟弱		貼付突帯 口：凹線1条 内：貼付突帯 焼成前穿孔
	19	弥 生	壺	-	-	[6.4]	破片	外：にぶい黄褐色 内：灰黄褐色	やや粗 砂粒	堅緻	外：ナデ 内：ナデ	口：凹線 内：貼付突帯

遺構 番号	遺物 番号	種 別	器 種	法 量 (cm)			遺存度 (%)	特 徴			調 整	備 考
				口径	底径	器高		色 調	胎 土	焼 成		
	20	弥 生	壺	-	-	[7.1]	破片	外：褐灰色 内：灰白色	やや粗 赤色粒含	やや 堅緻	外：ヘラミガキ 内：押圧	貼付突帯 口：凹線1条・ 刻み目
	21	弥 生	壺	-	-	[6.7]	破片	外：橙色 内：にぶい橙色	やや粗 赤色粒多	やや 堅緻	外：板ナデ	沈線2条
	22	弥 生	壺	-	-	[6.5]	破片	外：にぶい橙色 内：にぶい橙色	やや粗 大砂粒	やや 堅緻	外：ナデ 内：ヘラミガキ・ナデ・指頭	沈線2条
	23	弥 生	壺	-	-	[4.5]	破片	外：にぶい黄橙色 内：にぶい黄橙色	やや緻密 砂粒微少	やや 堅緻	外：ナデ 内：ヘラミガキ	沈線1条
	24	弥 生	壺	-	-	[5.2]	破片	外：にぶい黄橙色 内：にぶい黄橙色	やや緻密 砂粒微少	やや 堅緻	外：ナデ 内：ヘラミガキ	沈線2条
	25	弥 生	壺	-	-	[18.1]	破片	外：浅黄橙色 内：浅黄橙色	やや粗 大砂粒・ 赤色粒	やや 堅緻		沈線4条
	26	弥 生	壺	-	-	[5.3]	破片	外：にぶい黄橙色 内：にぶい黄橙色	やや緻密 砂粒微少	やや 堅緻	外：ナデ 内：ヘラミガキ	沈線2条
	27	弥 生	壺	-	-	[8.0]	破片	外：にぶい黄橙色 内：灰白色	やや粗 赤色粒	やや 堅緻		沈線3条
	28	弥 生	壺	-	-	[4.9]	破片	外：にぶい橙色 内：灰白色	粗 大砂粒多	やや 堅緻	内：指頭	沈線2条
	29	弥 生	壺	-	-	[8.5]	破片	外：にぶい橙色 内：にぶい橙色	やや緻密 砂粒	やや 堅緻	外：ヘラミガキ 内：ナデ・指頭	沈線2条
	30	弥 生	壺	-	-	[7.1]	破片	外：橙色 内：橙色	やや粗 大砂粒多	やや 堅緻	外：ナデ 内：ナデ	沈線5条
	31	弥 生	壺	-	-	[4.5]	破片	外：にぶい橙色 内：にぶい橙色	やや緻密 砂粒	やや 堅緻	外：ナデ 内：ナデ	沈線3条
	32	弥 生	壺	-	-	[3.3]	破片	外：にぶい黄橙色 内：灰黄褐色	やや緻密 砂粒	やや 堅緻	内：板ナデ	削出突帯3条
	33	弥 生	壺	-	-	[5.9]	破片	外：にぶい黄橙色 内：にぶい黄橙色	やや緻密 砂粒	やや 堅緻	内：ヘラミガキ・板ナデ	削出突帯4条
	34	弥 生	壺	-	-	[3.4]	破片	外：灰白色 内：灰白色	やや粗 砂粒微少	やや 堅緻	外：ナデ	削出突帯(3条)
	35	弥 生	壺	-	-	[4.2]	破片	外：にぶい黄橙色 内：褐灰色	やや粗 砂粒	やや 堅緻		削出突帯2条
	36	弥 生	壺	-	-	[4.2]	破片	外：浅黄橙色 内：浅黄橙色	やや粗 大砂粒	やや 堅緻	内：ナデ	削出突帯5条
	37	弥 生	壺	-	-	[9.0]	破片	外：にぶい黄橙色 内：にぶい黄橙色	やや緻密 砂粒	やや 堅緻	外：ナデ 内：ナデ	削出突帯(3条)
	38	弥 生	壺	-	-	[3.6]	破片	外：にぶい橙色 内：にぶい黄橙色	やや緻密 砂粒	やや 堅緻	内：ナデ	削出突帯3条
	39	弥 生	壺	-	-	[2.9]	破片	外：にぶい黄橙色 内：にぶい黄橙色	やや粗 大砂粒	やや 堅緻		削出突帯(2条)
	40	弥 生	壺	-	-	[3.6]	破片	外：にぶい黄橙色 内：にぶい黄橙色	やや緻密 砂粒	やや 堅緻	内：ナデ	削出突帯(1条)
	41	弥 生	壺	-	-	[2.8]	破片	外：にぶい黄橙色 内：にぶい黄橙色	やや粗 砂粒微少	やや 堅緻		削出突帯(1条)
	42	弥 生	壺	-	-	[4.3]	破片	外：黒褐色 内：黒褐色	粗 大砂粒多	やや 堅緻	外：ナデ・板ナデ	
	43	弥 生	壺	-	8.8	[16.5]	25	外：橙色 内：にぶい黄橙色	粗 砂粒多	やや 堅緻	外：ヘラミガキ 内：指頭	
	44	弥 生	壺	-	-	[9.1]	破片	外：灰白色 内：灰白色	粗 大砂粒多	やや 堅緻		
	45	弥 生	壺	-	(9.2)	[6.3]	40	外：にぶい橙色 内：灰色	やや粗 大砂粒	やや 堅緻	外：板目圧痕・板ナデ 内：指頭・板ナデ	
	46	弥 生	壺	-	(8.7)	[7.4]	65	外：にぶい褐色 内：灰褐色	やや緻密 砂粒	やや 堅緻	外：板ナデ 内：板ナデ	
	47	弥 生	壺	-	(18.0)	[5.9]	25	外：にぶい黄橙色 内：にぶい黄橙色	やや粗 赤色粒	やや 堅緻	外：ナデ・指頭 内：板ナデ	
	48	弥 生	壺	-	(12.0)	[4.8]	50	外：にぶい黄橙色 内：黄灰色	やや粗 砂粒	やや 堅緻		
	49	弥 生	壺	-	(8.8)	[5.7]	75	外：灰黄褐色 内：褐灰色	やや緻密 砂粒	やや 堅緻	外：ヘラミガキ 内：板ナデ	

遺構 番号	遺物 番号	種 別	器 種	法 量 (cm)			遺存度 (%)	特 徴			調 整	備 考
				口径	底径	器高		色 調	胎 土	焼成		
	50	弥 生	壺	—	(8.5)	[4.7]	40	外：にぶい黄橙色 内：にぶい黄橙色	やや粗 砂粒	やや 堅緻	内：指頭	
	51	弥 生	壺	—	(10.8)	[6.6]	40	外：橙色 内：灰白色	やや粗 砂粒	やや 堅緻	内：指頭	
	52	弥 生	壺	—	(10.6)	[3.9]	60	外：にぶい黄橙色 内：にぶい黄橙色	やや粗 大砂粒	やや 堅緻	内：ナデ	
	53	弥 生	壺	—	(10.4)	[6.2]	40	外：にぶい黄橙色 内：にぶい黄橙色	やや粗 大砂粒	やや 堅緻	内：指頭	
	54	弥 生	壺	—	(7.4)	[5.0]	25	外：明赤褐色 内：明赤褐色	やや粗 砂粒多	やや 堅緻		
	55	弥 生	壺	—	(10.8)	[3.6]	25	外：にぶい橙色 内：灰褐色	やや粗 砂粒多	やや 堅緻		
	56	弥 生	壺	—	9.7	[4.2]	75	外：にぶい褐色 内：にぶい黄褐色	粗 大砂粒多	やや 軟弱	外：板ナデ 内：板ナデ	
	57	弥 生	壺	—	(10.2)	[5.7]	25	外：橙色 内：黒褐色	やや粗 大砂粒	やや 堅緻	外：ヘラミガキ 内：ヘラミガキ・ナデ	
	58	弥 生	壺	—	(9.0)	[5.3]	25	外：にぶい橙色 内：灰褐色	やや粗 砂粒	やや 堅緻	内：ヘラミガキ	
	59	弥 生	壺	—	9.4	[2.4]	100	外：橙色 内：灰白色	やや粗 砂粒	やや 堅緻	外：ナデ	
	60	弥 生	壺	—	(8.0)	[8.0]	25	外：にぶい橙色 内：にぶい黄褐色	やや緻密 砂粒	やや 堅緻	外：板ナデ・ヘラミガキ 内：板ナデ・指頭	外面に0.5cm大 の圧痕？2
	61	弥 生	壺	—	(8.0)	[7.5]	25	外：にぶい黄褐色 内：にぶい黄褐色	やや粗 砂粒	やや 堅緻		
	62	弥 生	壺	—	7.0	[8.6]	100	外：にぶい黄褐色 内：灰黄褐色	やや粗 砂粒多	やや 堅緻		
	63	弥 生	壺	—	(8.0)	[5.9]	25	外：にぶい赤褐色 内：灰白色	粗 大砂粒	やや 堅緻		
	64	弥 生	壺	—	7.4	[5.2]	75	外：明赤褐色 内：にぶい黄褐色	やや粗 小石多	やや 堅緻	内：板ナデ	
	65	弥 生	壺	—	(7.1)	[5.2]	90	外：灰白色 内：灰白色	やや粗 砂粒	やや 堅緻	外：指頭痕後ナデ	
	66	弥 生	壺	—	(7.2)	[5.2]	25	外：にぶい黄褐色 内：黒褐色	やや粗 大砂粒	やや 堅緻		
	67	弥 生	壺	—	7.2	[6.4]	100	外：浅黄褐色 内：浅黄褐色	やや粗 砂粒	やや 堅緻	内：ナデ・指頭	
	68	弥 生	壺	—	8.2	[6.2]	25	外：にぶい橙色 内：にぶい黄褐色	やや粗 赤色粒	やや 堅緻		
	69	弥 生	壺	—	(7.8)	[6.4]	25	外：黄灰色 内：にぶい黄褐色	やや粗 大砂粒・赤 色粒	やや 堅緻	外：ヘラミガキ	
	70	弥 生	壺	—	(8.0)	[6.5]	25	外：にぶい黄褐色 内：灰黄褐色	やや緻密 砂粒	やや 堅緻	外：板ナデ 内：板ナデ	
	71	弥 生	壺	—	(8.3)	[6.7]	25	外：橙色 内：灰褐色	やや粗 大砂粒	やや 堅緻	外：板ナデ 内：指頭	
	72	弥 生	壺	—	(8.0)	[5.3]	15	外：にぶい黄褐色 内：にぶい黄褐色	やや粗 赤色粒	やや 堅緻		
	73	弥 生	壺	—	(7.6)	[6.3]	40	外：橙色 内：灰黄色	やや粗 大砂粒	やや 堅緻	内：指頭	
	74	弥 生	壺	—	7.9	[6.4]	15	外：灰黄褐色 内：灰白色	粗 砂粒	やや 軟弱		
	75	弥 生	壺	—	(8.0)	[3.5]	25	外：にぶい黄褐色 内：にぶい黄褐色	やや粗 大砂粒	やや 堅緻	内：指頭	
	76	弥 生	壺	—	(8.2)	[4.1]	25	外：赤色 内：にぶい橙色	粗 大砂粒多	やや 堅緻		
	77	弥 生	壺	—	(8.0)	[3.5]	25	外：明褐灰色 内：灰白色	やや粗 大砂粒	やや 堅緻		
	78	弥 生	壺	—	(8.4)	[3.0]	25	外：灰白色 内：灰白色	やや粗 砂粒	やや 堅緻	内：板ナデ	
	79	弥 生	壺	—	(7.6)	[4.2]	25	外：灰褐色 内：褐灰色	やや粗 大砂粒	やや 堅緻		

遺構 番号	遺物 番号	種 別	器 種	法 量 (cm)			遺存度 (%)	特 徴			調 整	備 考
				口径	底径	器高		色 調	胎 土	焼成		
	80	弥 生	壺	—	(8.7)	[4.5]	15	外：にぶい 内：にぶい	やや粗 砂粒	やや 堅緻		
	81	弥 生	壺	—	(9.0)	[2.8]	25	外：橙色 内：にぶい	やや粗 砂粒	やや 堅緻	内：板ナデ	
	82	弥 生	壺	—	(7.2)	[3.8]	25	外：にぶい 内：にぶい	粗 大砂粒多	やや 堅緻		
	83	弥 生	壺	—	(8.0)	[2.9]	25	外：にぶい 内：にぶい	やや粗 大砂粒	やや 堅緻	外：ヘラミガキ	
	84	弥 生	壺	—	(5.6)	[2.3]	25	外：橙色 内：灰白色	やや粗 赤色粒	やや 堅緻	外：指頭 内：指頭	
	85	弥 生	壺	—	(9.0)	[6.3]	25	外：にぶい 内：にぶい	やや粗 砂粒	やや 堅緻	内：指頭	
	86	弥 生	壺	—	(7.2)	[6.0]	40	外：にぶい 内：にぶい	やや粗 砂粒	やや 堅緻	内：板ナデ	
	87	弥 生	壺	—	7.1	[5.0]	60	外：橙色 内：灰黄褐色	やや粗 砂粒	やや 堅緻		
	88	弥 生	壺	—	(6.6)	[2.0]	25	外：にぶい 内：にぶい	やや粗 砂粒	やや 堅緻	外：ヘラミガキ 内：板ナデ	
	89	弥 生	壺	—	(8.0)	[3.2]	25	外：橙色 内：褐灰色	やや緻密 砂粒	やや 堅緻	内：ヘラミガキ	
	90	弥 生	壺	—	(8.3)	[3.2]	25	外：橙色 内：灰白色	やや粗 砂粒	やや 堅緻	外：ナデ	
	91	弥 生	壺	—	7.1	[1.9]	65	外：橙色 内：浅黄褐色	粗 大砂粒多	やや 堅緻		
	92	弥 生	壺	—	5.2	[2.8]	90	外：にぶい 内：灰白色	やや粗 大砂粒	やや 堅緻	外：板ナデ 内：板ナデ	
	93	弥 生	壺	—	(6.4)	[4.3]	50	外：橙色 内：灰褐色	粗 大砂粒多	やや 堅緻		
	94	弥 生	壺	—	(7.7)	[3.6]	25	外：灰黄褐色 内：灰黄褐色	やや緻密 雲母	やや 堅緻	外：ヘラミガキ 内：ヘラミガキ	
	95	弥 生	壺	—	(6.0)	[3.4]	25	外：にぶい 内：にぶい	やや粗 大砂粒	やや 堅緻	外：指頭	
	96	弥 生	壺	—	(9.2)	[10.9]	40	外：にぶい 内：にぶい	やや粗 砂粒	やや 堅緻	内：板ナデ・指頭	
	97	弥 生	壺	—	(8.9)	[7.0]	25	外：にぶい 内：灰黄褐色	やや粗 大砂粒	やや 堅緻	内：ヘラミガキ	
	98	弥 生	甕 (甑転用)	—	7.4	[7.1]	90	外：灰黄褐色 内：にぶい	やや緻密 砂粒	やや 堅緻	外：ヘラミガキ・板ナデ 内：ヘラミガキ	焼成後穿孔 (1.6×1.9cm)
	99	弥 生	甕	(14.0)	—	[4.8]	15	外：にぶい 内：にぶい	やや緻密 砂粒	やや 堅緻	外：指頭 内：指頭	
	100	弥 生	甕	(12.4)	—	[3.6]	15	外：にぶい 内：にぶい	やや緻密 砂粒	やや 堅緻	外：ナデ 内：ナデ	沈線 (1条)
	101	弥 生	甕	(24.0)	—	[17.6]	20	外：にぶい 内：浅黄褐色	やや粗 砂粒多	やや 堅緻	外：刻み目・ナデ 内：ナデ・指頭	沈線 3条 口：刻み目 スス付着
	102	弥 生	甕	—	—	[11.1]	破片	外：灰黄褐色 内：褐灰色	やや粗 砂粒	やや 堅緻	内：ナデ	沈線 2条 口：刻み目
	103	弥 生	甕	—	—	[5.4]	破片	外：にぶい 内：にぶい	やや粗 大砂粒	やや 堅緻	外：ナデ 内：指頭	沈線 4条・ 斜沈線 口：刻み目
	104	弥 生	甕	—	—	[6.9]	破片	外：灰褐色 内：にぶい	粗 大砂粒	やや 堅緻	外：指頭	沈線 3条 口：刻み目 スス付着
	105	弥 生	甕	—	—	[7.2]	破片	外：にぶい 内：灰黄褐色	やや粗 大砂粒	やや 堅緻		沈線 3条 口：刻み目
	106	弥 生	甕	—	—	[4.9]	破片	外：にぶい 内：にぶい	やや緻密 砂粒	やや 堅緻	外：指頭 内：板ナデ	沈線 2条 口：刻み目
	107	弥 生	甕	—	—	[3.9]	破片	外：浅黄褐色 内：浅黄褐色	やや粗 砂粒	やや 堅緻	外：指頭	沈線・刺突文 口：刻み目
	108	弥 生	甕	—	—	[6.6]	破片	外：にぶい 内：にぶい	やや緻密 砂粒	やや 堅緻	外：指頭	沈線 2条 口：刻み目

遺構 番号	遺物 番号	種 別	器 種	法 量 (cm)			遺存度 (%)	特 徴			調 整	備 考
				口径	底径	器高		色 調	胎 土	焼 成		
	109	弥 生	甕	-	-	[2.3]	破片	外：灰黄褐色 内：にぶい黄橙色	やや粗 砂粒	やや 堅緻	外：ナデ・指頭 内：指頭	沈線 2 条
	110	弥 生	甕	-	-	[5.2]	破片	外：にぶい黄橙色 内：灰黄褐色	やや緻密 大砂粒	やや 堅緻	外：ナデ 内：ナデ	沈線 2 条
	111	弥 生	甕	-	-	[6.4]	破片	外：にぶい黄橙色 内：にぶい黄橙色	やや緻密 大砂粒	やや 堅緻		沈線 4 条
	112	弥 生	甕	-	-	[5.1]	破片	外：灰黄褐色 内：灰黄褐色	やや粗 赤色粒	やや 堅緻		沈線 3 条
	113	弥 生	甕	-	-	[4.6]	破片	外：灰褐色 内：灰褐色	やや緻密 砂粒	やや 堅緻	外：ヘラミガキ 内：指頭	沈線 3 条
	114	弥 生	甕	-	-	[3.3]	破片	外：灰黄褐色 内：にぶい黄橙色	やや粗 大砂粒	やや 堅緻	外：ナデ	沈線 2 条
	115	弥 生	甕	-	-	[4.0]	破片	外：にぶい橙色 内：灰白色	やや粗 大砂粒	やや 堅緻		沈線 3 条
	116	弥 生	甕	-	-	[4.4]	破片	外：にぶい黄橙色 内：にぶい黄橙色	やや粗 砂粒	やや 堅緻	外：ナデ 内：ヘラミガキ	沈線 (3 条)
	117	弥 生	甕	-	-	[2.9]	破片	外：にぶい黄橙色 内：にぶい黄橙色	やや粗 砂粒微少	やや 堅緻	外：板ナデ 内：ナデ	沈線 1 条 口：刻み目
	118	弥 生	甕	-	-	[2.6]	破片	外：にぶい黄橙色 内：にぶい黄橙色	やや粗 砂粒	やや 堅緻	外：ナデ	沈線 (4 条)
	119	弥 生	甕	-	-	[5.2]	破片	外：灰褐色 内：にぶい褐色	やや粗 砂粒	やや 堅緻	外：ナデ 内：指頭	沈線 2 条
	120	弥 生	甕	-	-	[4.6]	破片	外：にぶい黄橙色 内：にぶい黄橙色	やや緻密 砂粒	やや 堅緻	外：指頭	沈線 3 条 口：刻み目
	121	弥 生	甕	-	-	[3.2]	破片	外：にぶい橙色 内：にぶい橙色	やや粗 大砂粒	やや 堅緻	外：ナデ 内：ナデ	沈線 2 条
	122	弥 生	甕	-	-	[3.4]	破片	外：褐灰色 内：にぶい黄橙色	やや粗 大砂粒	やや 堅緻		沈線 1 条 口：刻み目
	123	弥 生	甕	-	-	[3.0]	破片	外：灰黄褐色 内：にぶい黄橙色	やや粗 砂粒	やや 堅緻	外：指頭	口：刻み目
	124	弥 生	甕	-	-	[3.2]	破片	外：灰白色 内：灰白色	やや粗 砂粒	やや 堅緻		口：刻み目
	125	弥 生	甕	-	-	[2.1]	破片	外：にぶい黄橙色 内：にぶい黄橙色	やや緻密 砂粒	やや 堅緻	外：ナデ・指頭 内：ナデ	口：刻み目
	126	弥 生	甕	-	-	[7.2]	破片	外：灰褐色 内：明褐灰色	やや粗 雲母	やや 堅緻	外：ナデ 内：ナデ	沈線 3 条
	127	弥 生	甕	-	-	[6.8]	破片	外：にぶい橙色 内：にぶい黄橙色	やや粗 大砂粒	やや 堅緻	外：指頭	口：刻み目
	128	弥 生	甕	-	-	[4.9]	破片	外：にぶい黄橙色 内：にぶい黄褐色	やや緻密 砂粒	やや 堅緻	外：板ナデ・ナデ 内：指ナデ・指頭	
	129	弥 生	甕	-	-	[3.4]	破片	外：灰黄褐色 内：黒褐色	やや緻密 砂粒微少	やや 堅緻	外：ナデ・指頭 内：ヘラミガキ・ナデ	
	130	弥 生	甕	-	-	[11.3]	破片	外：灰黄褐色 内：にぶい橙色	やや緻密 砂粒	やや 堅緻	外：ナデ・指頭 内：板ナデ・ナデ・指頭	
	131	弥 生	甕	-	-	[3.9]	破片	外：にぶい黄橙色 内：にぶい黄橙色	やや粗 大砂粒	やや 堅緻	外：ナデ・指頭 内：ヘラミガキ	口：刻み目
	132	弥 生	甕	-	-	[5.4]	破片	外：灰褐色 内：黒褐色	やや粗 大砂粒・雲 母	やや 堅緻	外：ナデ 内：ナデ	口：刻み目
	133	弥 生	甕	-	-	[6.9]	破片	外：にぶい黄橙色 内：にぶい黄橙色	やや粗 大砂粒	やや 堅緻	外：ナデ 内：ナデ・指頭	口：刻み目
	134	弥 生	甕	-	-	[2.2]	破片	外：灰白色 内：灰白色	やや粗 砂粒	やや 堅緻	外：指頭	口：刻み目
	135	弥 生	甕	-	-	[1.7]	破片	外：灰黄褐色 内：にぶい黄橙色	やや緻密 大砂粒	やや 堅緻	外：ナデ 内：ナデ	口：刻み目
	136	弥 生	甕	-	-	[2.4]	破片	外：灰黄褐色 内：浅黄橙色	やや粗 大砂粒	やや 堅緻	外：ナデ・指頭	
	137	弥 生	蓋	(4.4)		[3.6]	50	外：灰黄褐色 内：褐灰色	やや粗 砂粒	やや 堅緻	外：指頭	
	138	弥 生	蓋	5.6~ 6.0		[4.0]	75	外：浅黄橙色 内：褐灰色	やや粗 大砂粒	やや 堅緻	外：板ナデ・ナデ 内：ヘラミガキ	



遺構番号	遺物番号	種別	器種	法量 (cm)			遺存度 (%)	特徴			調整	備考
				口径	底径	器高		色調	胎土	焼成		
	139	弥生	蓋	(7.0)	-	[4.0]	25	外：黒褐色 内：にぶい褐色	やや粗砂粒	やや堅緻	外：ヘラミガキ・板ナデ 内：ナデ	
流路	1	弥生	甕	(19.2)	-	[7.1]	15	外：褐灰色 内：褐灰色	やや緻密雲母	やや堅緻	口：ヨコナデ 内：ヘラミガキ	口：凹線1条
	2	弥生	甕	-	-	[4.2]	破片	外：黒褐色 内：にぶい黄褐色	やや粗大砂粒	やや堅緻	外：ヘラミガキ 内：板ナデ	刺突文
	3	弥生	甕	(19.8)	-	[13.3]	25	外：灰黄褐色 内：にぶい黄橙色	やや緻密砂粒微少	やや堅緻	口：ヨコナデ 外：ハケ・ナデ 内：ハケ・板ナデ・指頭	刺突文 口：凹線2条
	4	弥生	甕	-	-	[12.5]	破片	外：灰黄褐色 内：にぶい黄橙色	やや緻密砂粒	やや堅緻	外：ハケ・ヘラミガキ 内：ヘラミガキ・ヘラケズリ	刺突文
	5	弥生	甕	-	-	[5.4]	破片	外：褐灰色 内：にぶい黄褐色	やや緻密雲母	やや堅緻	外：ヘラミガキ 内：ヘラミガキ・ヘラケズリ	刺突文
	6	弥生	壺	-	-	[3.2]	破片	外：灰黄褐色 内：黒褐色	やや緻密砂粒微少	やや堅緻	外：ヘラミガキ 内：板ナデ	楕描波状文4条2段
	7	弥生	壺	-	-	[3.0]	破片	外：灰黄褐色 内：黒褐色	やや緻密砂粒微少	やや堅緻	外：ヘラミガキ 内：板ナデ	楕描波状文3条1段
	8	弥生	壺	-	-	[7.5]	破片	外：にぶい黄橙色 内：黒褐色	やや緻密砂粒微少	やや堅緻	外：ヘラミガキ 内：板ナデ・ハケ	楕描波状文4条3段
	9	弥生	壺	-	-	[1.5]	破片	外：褐灰色 内：褐灰色	やや緻密雲母	やや堅緻	口：ヨコナデ	口：凹線2条
	10	弥生	壺	-	(5.8)	[3.6]	40	外：灰褐色 内：褐灰色	やや緻密雲母	やや堅緻	外：板ナデ 内：板ナデ・指頭	
表採	1	土師質	甕	(32.0)	(22.4)	27.7	50	外：灰白色 内：灰白色	やや粗大砂粒	やや軟弱	外：ハケ・ナデ 内：指頭後ハケ・ナデ	沈線2条 印花文
	2	土師質	甕	(39.6)	-	30.1	25	外：灰白色 内：灰白色	やや緻密砂粒	やや堅緻	外：ハケ・ナデ 内：ハケ・ナデ	沈線2条 印花文
	3	須恵器	高台杯	-	(7.0)	[2.5]	50	外：灰色 内：灰色	やや粗砂粒	やや堅緻		ロクロ整形 回転ヘラ切り
	4	須恵器	高台杯	-	(7.0)	[2.0]	25	外：灰色 内：灰白色	やや緻密砂粒微少	やや堅緻		ロクロ整形
	5	須恵器	皿	(8.8)	(4.4)	2.0	15	外：灰白色 内：灰白色	やや緻密砂粒微少	やや堅緻		ロクロ整形 回転糸切り
	6	土師器	高杯	-	-	[7.6]	65	外：灰白色 内：灰白色	やや粗砂粒微少	やや堅緻	内：絞り目	

### 遺物観察表 (土製品)

※ 法量は現存値

遺構番号	遺物番号	器種	法量 (cm/g)				備考
			長さ	幅	厚さ	重さ	
SK03	23	鞆羽口	17.7	9.5	8.6	1150	孔径2.6~2.8cm
	24	鞆羽口	5.4	8.6	3.1	161.5	
	25	鞆羽口	10.2	9.3	9.0	620	孔径2.5cm
	26	鞆羽口	10.4	9.2	8.8	570	孔径2.5~2.6cm

## 遺物観察表（石製品）

※ 法量は現存値

遺構 番号	遺物 番号	器 種	材 質	法 量 (cm / g)				備 考
				長さ	幅	厚さ	重さ	
SB04	3	砥 石		[2.8]	[2.5]	[4.3]	22.4	一部欠損 2面に使用痕有
SK03	15	砥 石		10.1	4.35	3.6	244.7	一部欠損 4面に使用痕有 一先端面も多角的に使用か？
	16	砥 石		[8.1]	6.3	5.3	395.0	3面に使用痕有
	17	砥 石		5.2	4.4	2.5	61.3	3面に使用痕有
	18	砥 石		[10.3]	5.6	4.1	432.7	4面に使用痕有
	19	砥 石		[5.4]	[1.4]	[2.1]	8.7	1面に使用痕有 鉄分付着
	20	砥 石		[3.8]	[2.3]	[0.8]	3.9	1面に使用痕有 鉄分付着
	21	砥 石		[24.4]	[13.4]	11.0	3,680	2面に使用痕有
	22	鉄床石		[24.9]	[14.6]	8.8	4,300	一部に鉄分付着
SD02	83	石包丁	粘板岩	[2.5]	[3.4]	0.35	3.5	大部分欠損 表裏ミガキ調整不良（未成品か？）
	84	石 鏃	安山岩	1.9	1.55	0.3	0.5	一部欠損
	85	石 鏃	安山岩	2.1	1.3	0.25	0.6	
	86	楔形石器	安山岩	2.1	2.45	0.8	5.0	1側面に敲打痕有
	87	剥 片	安山岩	2.4	3.3	0.7	3.6	
	88	剥 片	安山岩	3.4	2.1	0.36	1.4	
	89	剥 片	安山岩	3.1	1.85	0.5	1.9	
	90	剥 片	安山岩	2.15	2.95	0.5	2.3	
	91	剥 片	安山岩	1.8	2.7	0.3	1.4	
	92	剥 片	安山岩	2.45	2.2	0.3	1.0	
	93	剥 片	安山岩	2.85	1.6	0.5	1.7	
	94	剥 片	安山岩	1.9	1.9	0.3	0.8	
	95	碎 片	安山岩	2.6	1.05	1.0	1.6	
	96	碎 片	安山岩	2.5	2.15	0.25	0.8	
	97	碎 片	安山岩	0.8	2.2	0.2	0.3	
	98	碎 片	安山岩	1.2	2.0	0.2	0.5	
	99	碎 片	安山岩	1.15	1.55	0.3	0.3	
100	碎 片	安山岩	1.5	1.65	0.3	0.8		
101	碎 片	安山岩	1.5	2.0	0.3	0.5		
102	碎 片	安山岩	1.75	1.25	0.4	0.6		
103	碎 片	安山岩	2.1	1.3	0.3	0.7		
104	碎 片	安山岩	1.3	1.9	0.2	0.4		
105	碎 片	安山岩	1.15	1.4	0.1	0.1		
106	碎 片	安山岩	1.5	0.75	0.3	0.3		
107	碎 片	安山岩	1.2	0.95	0.3	0.5		
SX01	140	石包丁	粘板岩	[6.1]	5.9	0.75	34.4	一部欠損 穿孔位置が表裏にズレあり 未成品か？
	141	石 斧	緑色片岩	12.5	5.7	4.0	480.1	刃部先端に使用痕有
	142	石 鏃	安山岩	[2.2]	1.9	0.5	1.9	先端部・基部部の両端を欠損
	143	石 鏃	安山岩	[1.5]	1.25	0.3	0.7	先端部・基部部欠損
	144	石 鏃	安山岩	4.45	1.55	0.95	5.3	未成品か？
	145	楔形石器	安山岩	1.7	2.35	0.4	1.8	
	146	楔状石器	安山岩	2.3	1.6	0.5	2.2	一部欠損
	147	加工痕のある剥片	安山岩	4.2	5.7	0.8	15.2	
	148	剥 片	安山岩	4.9	3.4	1.4	16.0	
	149	剥 片	安山岩	2.6	2.3	0.5	2.0	
	150	剥 片	安山岩	3.05	2.5	0.6	4.4	
151	剥 片	安山岩	2.5	2.6	0.7	4.7		
152	剥 片	安山岩	1.9	3.0	0.5	1.7		
153	剥 片	安山岩	4.1	4.6	1.7	21.8		
154	剥 片	安山岩	2.95	4.05	0.8	5.2		
155	剥 片	安山岩	2.5	3.7	0.5	3.1		
156	剥 片	安山岩	3.1	2.75	0.7	5.5		
157	剥 片	安山岩	2.7	1.4	0.45	1.4		
158	剥 片	安山岩	2.1	3.05	0.7	2.7		

遺構 番号	遺物 番号	器 種	材 質	法 量 (cm / g)				備 考
				長さ	幅	厚さ	重さ	
	159	剥片	安山岩	2.5	3.95	0.7	5.7	
	160	剥片	安山岩	2.45	2.9	0.5	3.0	
	161	剥片	安山岩	3.0	1.95	0.25	1.5	
	162	剥片	安山岩	3.9	2.0	0.4	2.5	
	163	剥片	安山岩	3.45	1.7	0.8	4.2	
	164	剥片	安山岩	2.65	3.4	0.8	5.0	
	165	砕片	安山岩	1.8	2.5	0.3	1.2	
	166	砕片	安山岩	1.7	2.4	0.3	1.3	
	167	砕片	安山岩	1.35	2.65	0.25	0.8	
	168	砕片	安山岩	1.5	2.5	0.55	1.4	
	169	砕片	安山岩	1.1	1.7	0.3	0.4	
	170	砕片	安山岩	1.2	2.1	0.3	0.6	
	171	砕片	安山岩	1.0	1.5	0.2	0.2	
	172	砕片	安山岩	1.0	1.8	0.15	0.2	
	173	砕片	安山岩	1.3	1.7	0.3	0.5	
	174	砕片	安山岩	0.8	1.35	0.4	0.3	
	175	砕片	安山岩	1.3	1.9	0.3	0.5	
	176	砕片	安山岩	1.2	1.8	0.15	0.5	
	177	砕片	安山岩	1.15	1.9	0.2	0.4	
	178	砕片	安山岩	1.9	1.85	0.2	0.5	
	179	砕片	安山岩	2.2	2.1	0.4	2.0	
	180	砕片	安山岩	1.9	2.3	0.5	1.9	
	181	砕片	安山岩	2.7	1.2	0.5	1.4	
	182	砕片	安山岩	2.4	0.9	0.55	0.9	
	183	砕片	安山岩	1.45	1.7	0.3	0.6	
	184	砕片	安山岩	1.2	1.6	0.3	0.5	
	185	砕片	安山岩	1.3	0.9	0.18	0.2	
	186	砕片	安山岩	1.1	0.95	0.13	0.1	
	187	砕片	安山岩	2.4	1.4	0.35	0.8	
	188	砕片	安山岩	1.4	1.5	0.5	1.0	
	189	砕片	安山岩	2.7	1.4	0.36	0.9	
	190	砕片	安山岩	2.25	1.65	0.3	1.0	
	191	砕片	安山岩	1.6	1.9	0.4	0.7	
	192	砕片	安山岩	1.9	1.6	0.35	1.2	
	193	砕片	安山岩	1.55	1.45	0.25	0.5	
	194	砕片	安山岩	2.35	1.3	0.23	0.7	
	195	砕片	安山岩	2	0.7	0.47	0.6	
	196	砕片	安山岩	1.25	1.1	0.2	0.2	
	197	砕片	安山岩	1.4	1.85	0.2	0.5	
	198	砕片	安山岩	1.5	0.6	0.3	0.2	
	199	砕片	安山岩	1.8	1.4	0.2	0.4	
	200	砕片	安山岩	1.1	2.4	0.28	0.7	
表採	7	石 鏃	安山岩	1.55	1.25	0.25	0.4	
	8	石 鏃	安山岩	[1.15]	[1.8]	0.2	0.6	先端部欠損

### 遺物観察表（鉄製品）

※ 法量は現存値

遺構 番号	遺物 番号	器 種	法 量 (cm / g)				備 考
			長さ	幅	厚さ	重さ	
SK03	27	円筒状	6.8	3.3~5.2	0.1~0.2	118.7	3つの部品で構成（2枚の円筒状のものと1枚の円盤状のものを接合） 長い円筒状の部分は、重なりが上部と下部で逆転 短い円筒状の部分の上部に孔が3箇所有（内、1つに鋸有） 表面に付着する木質物は、使用に伴うか廃棄後の付着かは不明 中に鉄滓が付着するが、廃棄後に付着した可能性大
	28	螺旋状	高さ2.35	0.4~0.6	0.1	2.2	
	29	棒 状	3.3	0.4	0.3	1.0	上端部欠損 棒状のものに3箇所鉄を巻いている サビ付着
	30	棒 状	2.3	0.4	0.3	0.6	両端部欠損
	31	棒 状	2.7	0.3	0.3	0.6	両端部欠損
	32	棒 状	1.8	0.2	0.16	0.3	両端部欠損
	33	棒 状	1.35	0.4	0.4	0.3	両端部欠損
	34	棒 状	2.3	0.4	0.4	1.1	両端部欠損
	35	鉄 滓	7.1	3.8	0.4	40.4	

## V ま と め

### 1 大型住居（SB04）について

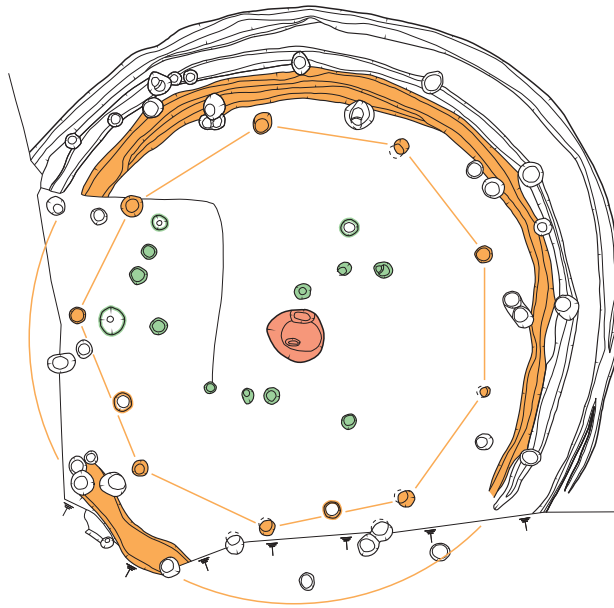
SB04は、径約8.5mを測る大型の住居である。遺構検出状況から2度の建て替えを行っていることが明らかとなった。

遺構の上層部は削平されて、一部床面が露呈した状況であったが、わずかに残る壁溝と柱穴の切り合い関係から、しだいに拡張していったことが明らかとなった。古い時期から順に第Ⅰ期、第Ⅱ期、第Ⅲ期とすると、規模(径)及び支柱数は、それぞれ第Ⅰ期が約7.1m、9本、第Ⅱ期が約7.5m、10本、第Ⅲ期が約8.5m、12本となる。規模の拡張とともに支柱の数も増やしているが、柱間寸法は平均1.8m強で、ほぼ同一である。また、柱穴の深さは45～68cmで、いずれも柱穴としてはかなり深いものである。また、興味深いのは、Ⅰ期では東半部の4本の柱、Ⅱ期では北側と南側の各2本ずつの柱が対になるように、またⅢ期では東側と西側の各1本ずつの柱が対になるように、いずれも住居中央に向かって斜めに掘り込まれていることである。柱痕跡は確認できなかったものの、住居規模から考えると決して細くない柱が使用されていたものと考えられ、柱穴の径のほとんどが20～30cmで、柱穴(掘り形)が柱径に対してそれほど大きく掘り込まれていなかったであろうことを考慮すると、柱は外側に向かって立てられていたことが想定できる。住居及び屋根構造を考える上で、示唆に富む資料と言える。また、住居中央部あたりでは、複数の柱穴を検出しており、規模も支柱穴と同等のものが少なくないことから、規則性は認められないものの、住居構造に関係するものと考えておきたい。なお、これらの柱穴が第Ⅰ期から第Ⅲ期のどの時期の所産であるかは明確にできなかった。

遺構の所属時期については、遺構の覆土がほとんどない状況で、出土遺物もすべて小破片であり、断定できるだけの資料はないが、遺構の平面形が円形であること、小破片ながら出土遺物の大半が弥生土器と考えられることから、弥生時代の所産であることは間違いないであろう。出土遺物は、時期の判別が困難なものが大半であるが、弥生時代前期と考えられるものも含まれている。友松遺跡群の状況が、今後の調査によりさらに明らかになってくれば、本遺構の所属時期についても手掛かりが得られるかも知れない。

なお、SX01などから石器の未製品と思われるものが複数出土しており、近隣地域に石器の工房跡が存在する可能性も考えられるが、本遺構からは工房に結びつくような遺構及び遺物は検出していない。

しかしながら、一般的に見ても、本遺構が大型の部類に属する竪穴住居であることなどから、友松遺跡群に広がる弥生集落の中で、特別な位置を占めていた可能性は十分に考えられる。すなわち、集落内で特別な位置にある人物の居住空間あるいは工房など集団で行う作業所的な施設であった可能性は指摘できよう。

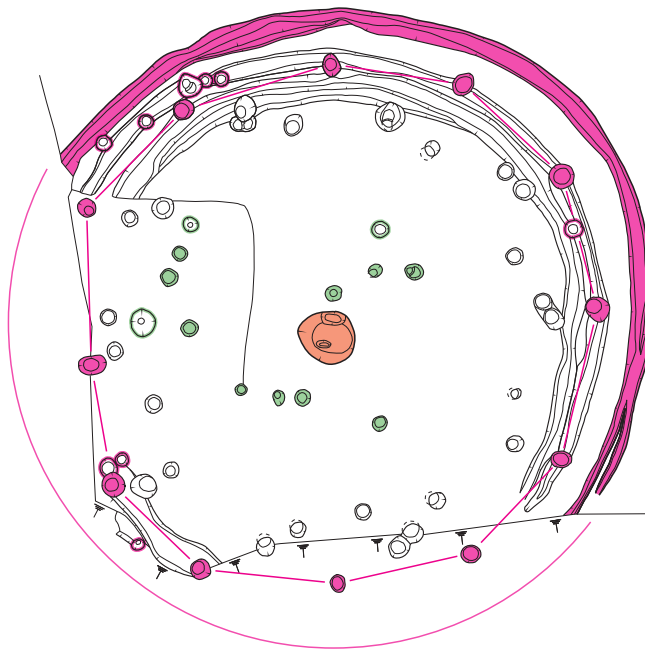
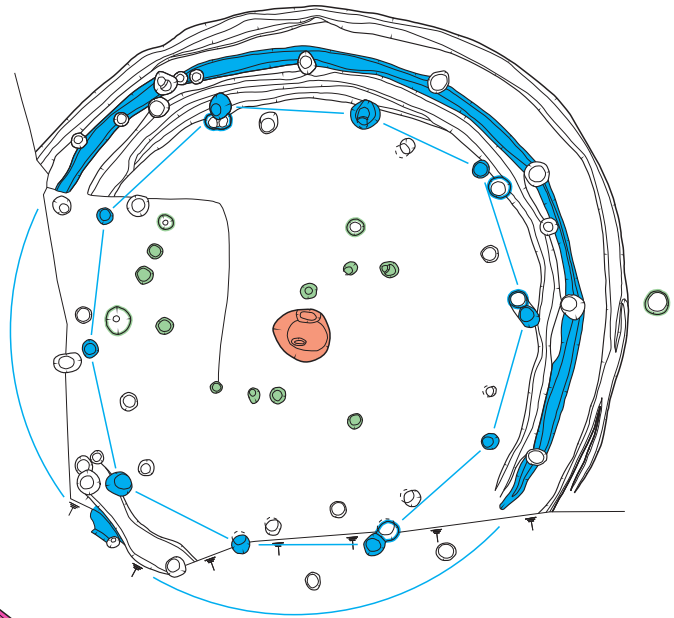


**第Ⅰ期**

壁溝外径：約7.1m  
 面積：約39.6㎡  
 主柱：9本(径約5.4m)  
 柱間距離：平均1.85m(1.65m～2.2m)

**第Ⅱ期**

壁溝外径：約7.5m  
 面積：約44.2㎡  
 主柱：10本(径約6.0m)  
 柱間距離：平均1.86m(1.7m～2.05m)



**第Ⅲ期**

壁溝外径：約8.5m  
 面積：約56.7㎡  
 主柱：12本(径約7.0m)  
 柱間距離：平均1.83m(1.6m～2.1m)

第52図 SB04 建替の変遷

## 2 友松遺跡群の弥生集落について

友松遺跡群は、友松1号遺跡から友松5号遺跡までで構成される<sup>(註1)</sup>が、この内、弥生時代の遺跡が確認されているのは、友松4号遺跡を除く4遺跡である。友松4号遺跡は、今回調査した友松3号遺跡とは小さな谷を挟んで東側に立地しており、友松2・3・5号遺跡とはやや立地を異にする。また、友松5号遺跡は調査範囲が限定的であり、弥生時代の様相は今のところやや不明瞭である。友松2号遺跡と友松3号遺跡は同一丘陵上に立地する。しかし、友松2号遺跡の調査範囲は限定的で、弥生時代の遺物も少なく、大半が時期の確定が困難であるが、中期と考えられるものは認められる。

また、今回の友松3号遺跡の調査区の南半部は谷地形で、友松1号遺跡とほぼ同一の標高である。友松1号遺跡では中期の竪穴住居跡を検出しており、今回の調査区南端部で検出した流路でも中期の土器が底面近くから出土していることから、友松1号遺跡と友松3号遺跡南側谷部は同一の集落が展開していると考えられる。この区域は谷地形となっていることから、友松1号遺跡を中心として弥生時代中期の集落が展開するにあたって、流路によって水位を下げる効果があったと考えることもできよう。

さて、友松2号遺跡から友松3号遺跡の北側丘陵上に展開する弥生時代集落について、前期と中期が想定されるが、中期については現段階で資料が限定的で不明瞭であることから、ここでは前期についてみておきたい。

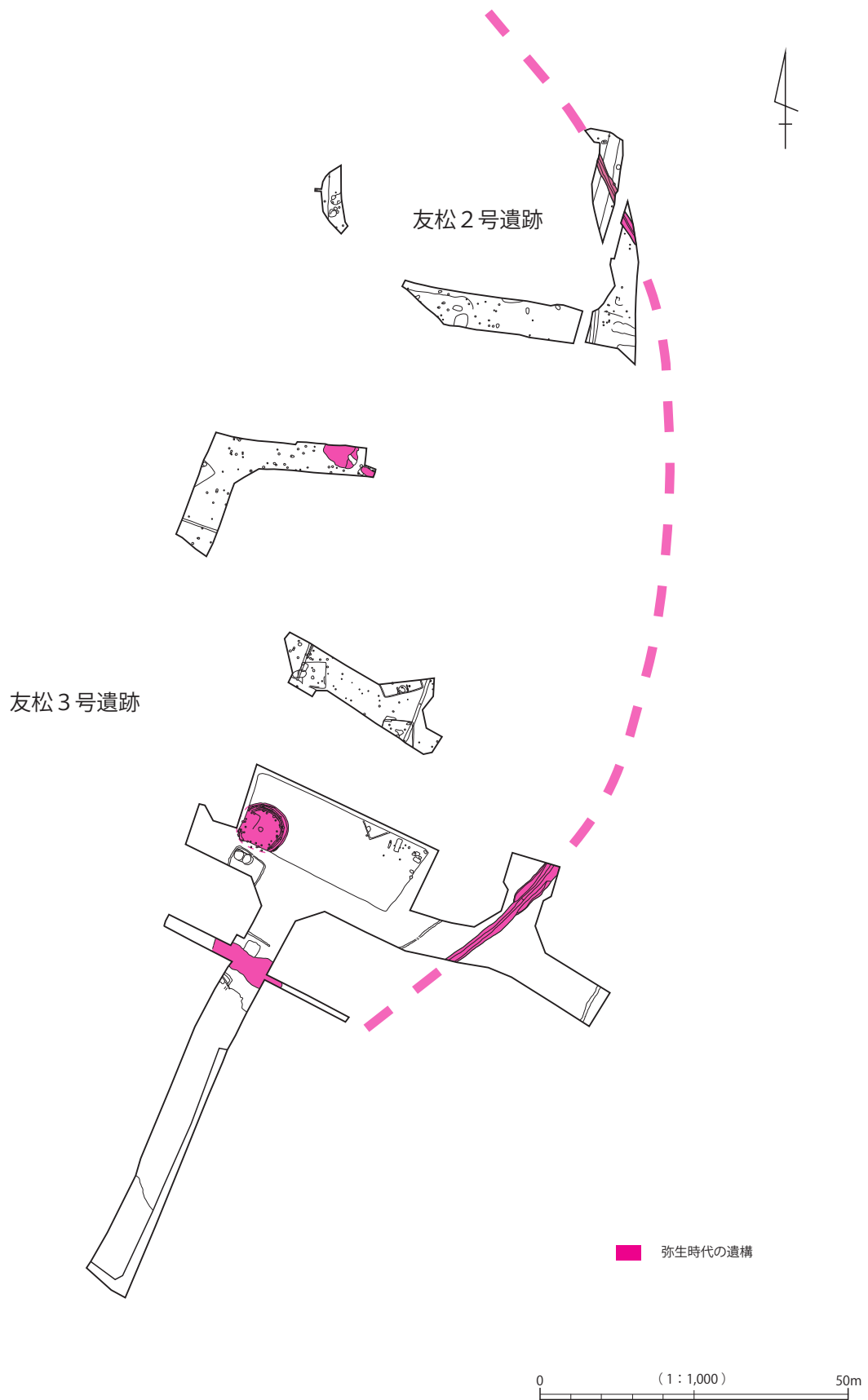
友松3号遺跡においては、今回の調査区域で明確に前期に位置づけられる遺構としては、SD02とSX01を検出している。SD02は、上層部が削平を受けていると考えられるが、V字形に近い断面形を呈しており、覆土からは小破片が多いものの、前期の弥生土器が多く出土している。友松2号遺跡においては、同様にV字形の断面形を呈する、No.101・No.208を検出している。出土遺物はほとんどなく、時期の確定は困難であるが、弥生土器の甕形土器か壺形土器の底部が出土している。遺構の検出状況からみると、同一の遺構として捉えることが可能であり、広範囲に広がる溝状遺構として、環濠の可能性が高い。また、SD02は南側が調査区域外へ展開しているが、遺跡全体が南に向かって谷が形成されていることから、SD02は谷部に向かって終息していくものと考えられよう。また、SD02は東側に入る小さな谷の縁辺部に構築されており、南側及び西側の谷地形を利用して構築されていると考えられる。

なお、県内では、福山市神辺町の亀山遺跡や大宮遺跡で弥生時代前期の環濠が検出<sup>(註2)</sup>されている。大宮遺跡は全容が不明のため規模は明らかにできないが、亀山遺跡は最大規模で約160m×130mとされる。友松2・3号遺跡で検出した溝状遺構を環濠とすれば、東西規模は不明であるが、南北規模は150m以上となり、規模の点からは亀山遺跡に匹敵するか、それ以上となる可能性も考えられる。

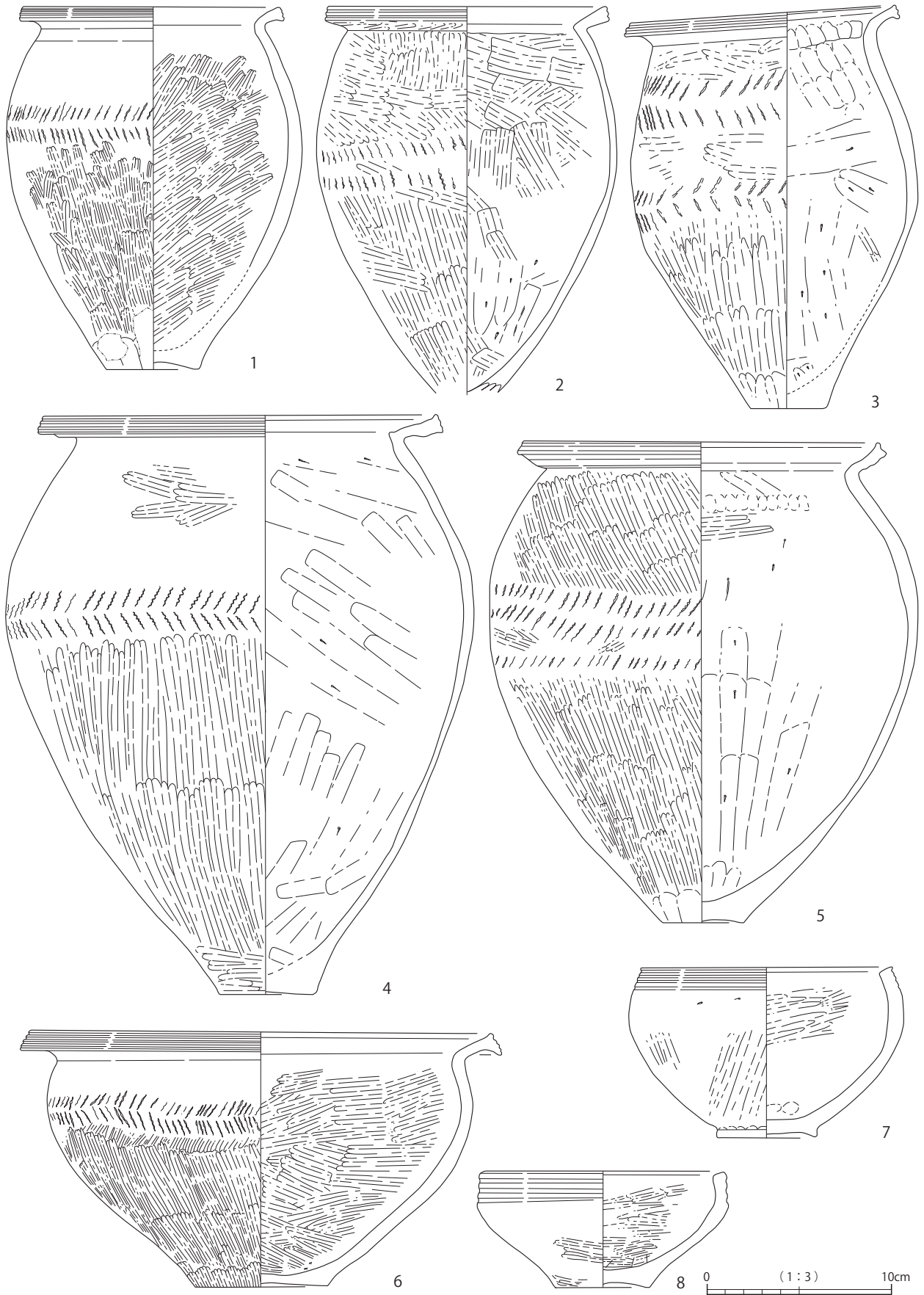
また、南側縁辺部で検出したSX01も、同時期の遺構として捉えられる。出土遺物は少なくないが、土器はほとんどが小破片で、石器も未製品や欠損品である。地形的にも集落的にも、縁辺部を利用した、土器などの廃棄遺構の可能性が考えられよう。

なお、現段階では、友松2・3号遺跡において、前期の所産に断定できる竪穴住居はないが、今後の周辺状況によっては、SB04が当該期に入る可能性は指摘しておきたい。

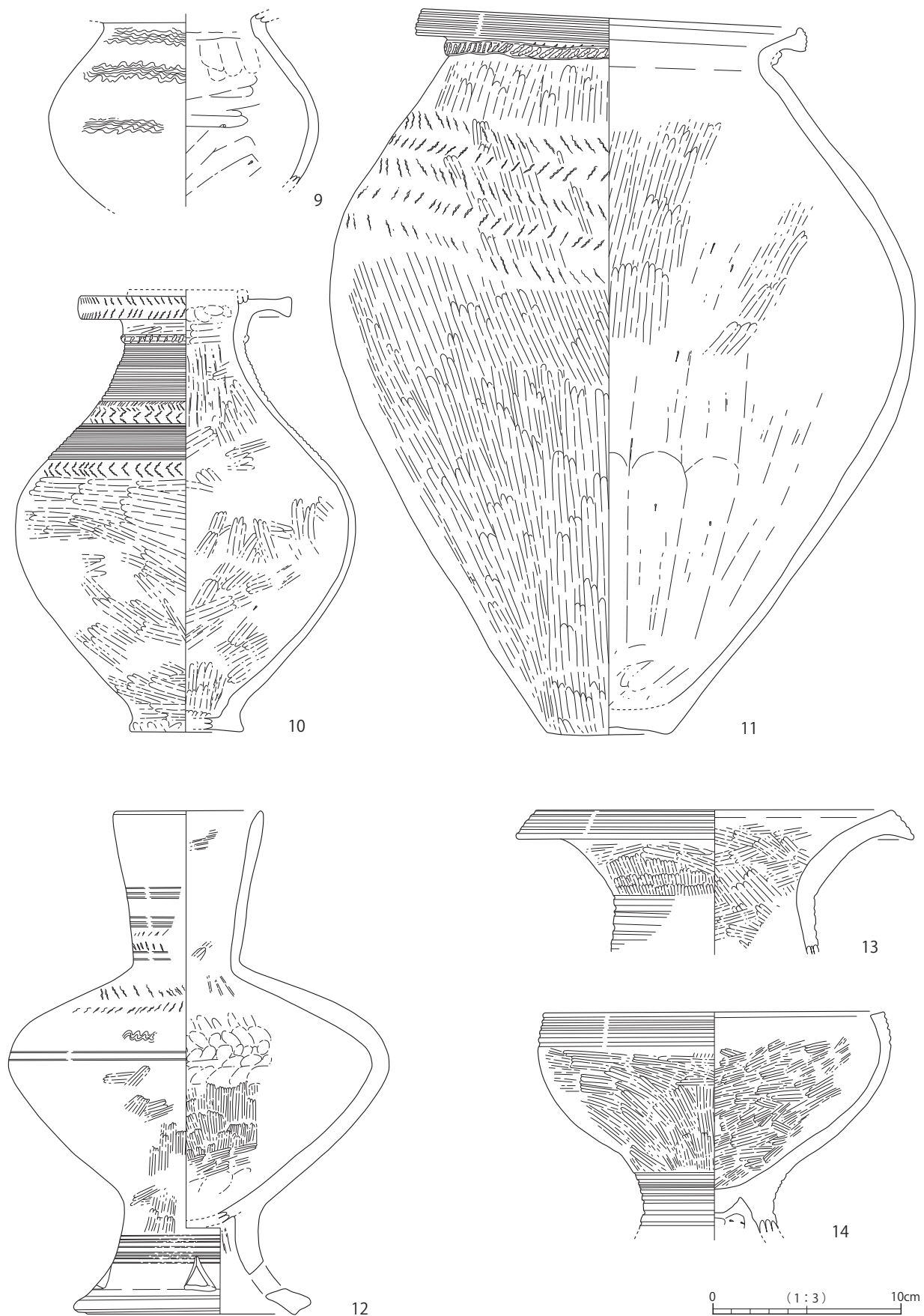




第53図 友松2・3号遺跡 弥生時代の遺構



第54図 友松1号遺跡 SB01 出土遺物実測図①



第55図 友松1号遺跡 SB01 出土遺物実測図②

友松遺跡群に展開する弥生集落は、これまでの調査範囲よりもむしろ西側にその中心部が展開していることが考えられよう。

次に、弥生時代前期の土器について、小破片が多いものの、資料としては比較的纏まって出土していることから、本遺跡での特徴を壺形土器と甕形土器に施文される文様から捉えて、弥生時代前期の中における所属時期をみておきたい。

S D 0 2 と S X 0 1 の出土土器は、ほぼ同様の傾向がみて取れる。施文は、頸部、胴・体部を中心に沈線、削出突帯、貼付突帯などが施される。施文の内、沈線は、壺形土器が40%前後を占め、甕形土器は100%である。小破片のため、何条施しているか不明なものもあるが、2～4条程度が主流と言える。また、甕形土器は頸部及びその直下あたりに施すが、壺形土器は頸部のほか、体部にも施すものが多いようである。なお、壺形土器の口唇部に凹線を施すものが若干認められる。削出突帯と貼付突帯は、壺形土器に見られる。削出突帯は50%前後を占め、貼付突帯は5～10%と少ないが、突帯部に刻み目を施すものも半数ある。なお、ヘラ描きによる平行沈線とともに、格子状の沈線を施すもの、刺突を施すもの、また、壺形土器の頸部に段を有するものも1点見られる。また、甕形土器は、口唇部に刻目を施すものも多い。

全体量が少ないため、こうした状況はあくまで概略的な傾向として捉えるべきであろうが、5条以下の沈線が主流となる時期にあって、壺形土器については削出突帯の割合がやや優勢となり、貼付突帯が出現してきた時期として捉えることができよう。

なお、S X 0 1 の19の土器は、口縁部内面に「し」の字状の凸帯を有するが、類似するものは平成24年度に発掘調査を実施した「友松3号遺跡」でも出土しており、2例目となる。県内では同時期の遺跡が少なく、この特徴を有する土器もあまり例を見ないが、中山貝塚のほか、福山市神辺町の亀山遺跡<sup>(註3)</sup>でも出土例が認められ、「し」の字が口縁に対して横向きに向かい合うように配置されるようである。また、広島市稗畑遺跡<sup>(註4)</sup>からも同様の凸帯を有する土器が出土しているが、中期の所産であり、山口県、愛媛県との関連性が指摘されている<sup>(註5)</sup>もので、口縁の形態も異にする。

(註1) 津田真琴『友松2・3号遺跡発掘調査報告書』東広島市教育委員会 2014年

石垣敏之・盛菜つみ『友松5号遺跡発掘調査報告書』東広島市教育委員会 2018年

(註2) 松井和幸「広島県」『弥生時代の環濠集落をめぐる諸問題』愛知考古学談話会 1988年

亀山遺跡：『亀山遺跡—第1次発掘調査概報』『同一—第2次』広島県教育委員会 1982年・1983年

『亀山遺跡—第3次発掘調査概報』『同一—第4次』『同一—第5・6次』広島県立埋蔵文化財センター  
1984年・1985年・1986年

大宮遺跡：『大宮遺跡第1次発掘調査概報』広島県教育委員会・広島県草戸千軒町遺跡調査研究所 1978年

『大宮遺跡第2次発掘調査概報』『同第3次』『同第4次』『同第5次』広島県教育委員会 1979年・  
1980年・1981年・1982年

(註3) 植田千佳穂『亀山遺跡—第4次発掘調査概報—』広島県立埋蔵文化財センター 1985年

(註4) 福原茂樹『稗畑遺跡』財団法人広島市歴史科学教育事業団 1992年

(註5) 田畑直彦「垂下口縁壺B類について」『考古学研究』264 考古学研究会 2020年

### 3 中世遺構（SK03）について

友松遺跡群において、中世の遺構はこれまで友松3号遺跡を除いて確認されていた。しかし、調査範囲が限定的なこともあり、遺構の性格や時期の詳細及び遺跡内の位置づけは明確にできていない。

今回の調査によって、友松3号遺跡においても中世の遺構としてSK03を確認し、遺構の性格や詳細な時期にある程度迫ることができる資料を得ることができた。

SK03は、遺構検出面が削平を受けているが、隅丸長方形の平面形は規格的にほぼ整っており、また、ほぼ並行して隣接するSK02からは鉄滓が数点出土していることから、一連の遺構の可能性はある。なお、遺構内部も廃棄された状態をほぼ保っていると考えられ、底面から5cm程度浮いて炭層が一面に広がっているが、これは意図的に敷き詰められたものと考えられ、遺物はほぼその炭層面で出土しており一括として捉えられる。なお、壁及び底面で火を受けた状況は確認できなかった。

遺物は、土師質土器の他、砥石、鉄床石、鞆の羽口、鉄製品などが出土する。土師質土器や石片には鉄成分物質が付着するものも多く、特に9の土師質土器は、欠損した断面にまで固形化した鉄成分物質が付着していることから、液状の鉄成分物質が入れられた後、割れて断面にまで流れ出たものと考えられる。砥石も、使用痕から相応に使用されたものと考えられる。

特殊な遺物として、円筒状鉄製品があるが、管見に触れる限りで、遺跡からの出土例が見当たらず、民俗資料をあたる必要があるだろう。遺物の詳細は、本文中で触れたとおりであるが、相対的に緻密な造りであり、特殊な用途に使用されていたものと考えられる。3つの穴や鋌の存在から、径の広い方に何かを差し込んで使用し、これと大きく段差を有する径の狭い方には何かに差し込んで使用したとも考えられる。近代の所産で、構造や形態はやや異なるが、島根県江津市の佃谷鋌跡から出土する鉄木呂<sup>(註1)</sup>や岩手県久慈歴史民俗資料館所蔵の吹差鞆に備え付けられている鉄木呂<sup>(註2)</sup>が類似する。また、本市の八本松歴史民俗資料館所蔵の鍛冶道具資料の中に、佃谷鋌跡の鉄木呂の形状に類似する土製羽口が4点あるが、内径が5.6～6.5cmと大型で、昭和前期の所産であるが、興味深い資料である。鋸鍛冶職人吉川金次氏によると、「大正12年頃に次のような鞆<sup>はぐち</sup>口も使った。「水鞆口」というもので、…（中略）…鉄板を筒状にして、その内部中央に鉄製鞆口を通して鞆の風孔と連結、…（中略）…。農鍛冶が使った。」<sup>(註3)</sup>とある。筒内には水を満たしていたようで、具体的な形状や使用方法は不明だが、気になる資料である。因みに、円筒状鉄製品の小径側は、外径が約3.2cmで、出土したいずれの羽口の通風孔の径よりも大きい。これらの類似資料や特徴などから、現段階では鉄木呂の可能性が高いと考えておきたい。

いずれにせよ、出土遺物からみると、鍛冶関連のものが多く出土していることから、遺構の性格については鍛冶関連遺構として捉えておきたい。

なお、時期を比定できる資料としては、14の瓦器がある。体部のヘラミガキはほとんど省略され、高台も形骸化して断面三角形のものが小さく付いており、13世紀後半頃まで下るものと考えられる。

(註1) 角田徳幸ほか『佃谷鋌跡発掘調査報告書』島根県古代文化センター・島根県埋蔵文化財調査センター 2005年

(註2) 角田徳幸氏のご教示による。

(註3) 吉川金次『神奈川大学日本常民文化叢書2 鍛冶道具考』平凡社 1991年



## Ⅵ お わ り に

東広島市は、昭和49年に4町が合併して誕生し、平成17年には1市5町が合併して、県内市町で人口第4位、面積第5位の市となった。その間、賀茂学園都市開発整備事業や中央テクノポリス構想のもと、急速に都市基盤整備を進め、また広島大学の統合移転や大規模な団地造成、官民の学術研究機関の集積や企業の立地など、大小の各種開発事業が進み、豊かな田園風景が広がる賀茂台地は、その姿が日々変化しつつある。

一方、これまでの田園風景に見られるように、古来よりその豊かな恵みを背景として、賀茂台地は弥生時代以降、人々の暮らしの拠点として、現代に勝るとも劣らないほどの人口の集積があったと考えられ、県内でも有数の遺跡の宝庫として知られている。

今回発掘調査を実施した友松3号遺跡の周辺地域でも、JR山陽本線の新駅が平成29年に開業し、それと前後するようにこの地域では急速に道路建設や民間の宅地造成などの開発事業が進んでいる。

市内でも遺跡が密集する地域の一つである寺家地区は、近年のこうした開発事業の増加に伴って、記録保存のための発掘調査も増加してきている。

遺跡は、その地域の歴史を大切に守り伝えてきた祖先の人々をはじめ、市民共有の貴重な財産であり、一度なくしてしまえば、二度と知ることのできない、貴重な歴史遺産である。こうした歴史遺産を可能な限り大切に保存し、止む無く開発の手が及ぶことになったとしても、記録として将来にわたって残していくことを、我々の責務として捉えておく必要がある。

今回の調査にあたっては、事業者の方や地域の人々、現地調査や整理作業に携わった多くの方々にご理解とご協力をいただいている。末筆ではあるが、感謝したい。

### 【調査体制】

東広島市教育委員会

教 育 長	津森 毅
生涯学習部長	國廣政和（平成31年度）、大畠 隆（令和2年度）
生涯学習部次長	岡田誠有（平成31年度）
文化課長	岡田誠有（平成31年度兼務）、石井隆博（令和2年度）
参 事	妹尾周三
専 門 員	藤岡孝司
調査係長	妹尾周三（平成31年度兼務）、石垣敏之（令和2年度）
主 査	中山 学、津田真琴、高尾里美（事務担当）
主任主事	広本綱紀（平成31年度）
埋蔵文化財調査員	竹野菜つみ・日浦裕子（平成31年度）、石井亜希子（令和2年度）
事務職員	片山由紀子



# 図 版



遺跡から龍王山を眺む(南から)





南側調査区調査前近景  
(南から)



調査前近景(南西から)



北側調査区調査前近景  
(西から)







遺跡から西条盆地を眺む  
(西から)



友松 3 号遺跡全景(上から)



北側調査区全景(南西から)





SB01完掘状況(北から)



SB01遺物出土状況(東から)



SB01遺物出土状況(東から)





SB02完掘状況(南から)



SB03完掘状況(南東から)



SB03遺物出土状況(南東から)





SB04・05完掘状況(西から)



SB04・05完掘状況(上から)



SB05完掘状況(西から)





SK02・03完掘状況(南から)



SK02完掘状況(南から)



SK03完掘状況(南から)



SK03ピット完掘状況(北から)



SK03遺物出土状況(南から)



SK03遺物出土状況(南東から)







SK03遺物出土状況(南から)



SK03炭化層検出状況(南から)



SK03炭化層検出状況(南東から)





SK04完掘状況(東から)



SK05~11完掘状況(南東から)



SK05・06完掘状況(東南から)





SK05完掘状況(東から)



SK06完掘状況(南西から)



SK06遺物出土状況(南西から)





SK07~10完掘状況(東から)



SK10完掘状況(南西から)



SK10遺物出土状況(南西から)





SD01完掘状況(南から)



北側調査区全景(北から)



SD02完掘状況(南西から)





SD02完掘状況(北東から)



SD02完掘状況(南西から)



SD02北壁土層堆積状況  
(南から)





SK04・SD03完掘状況(東から)



SD04完掘状況(北から)



SX01完掘状況(東から)





南側調査区全景(南西から)



流路完掘状況(南から)



流路遺物出土状況(西から)



SB01



SB02



SB03



SB03



SB04



SD01

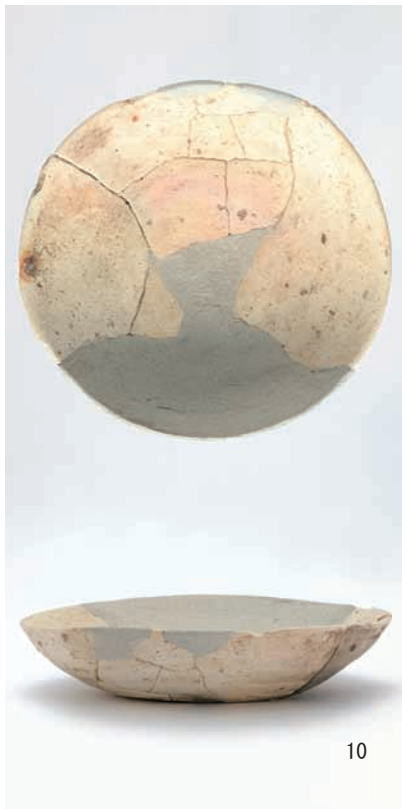


SD03





SK03



SK03





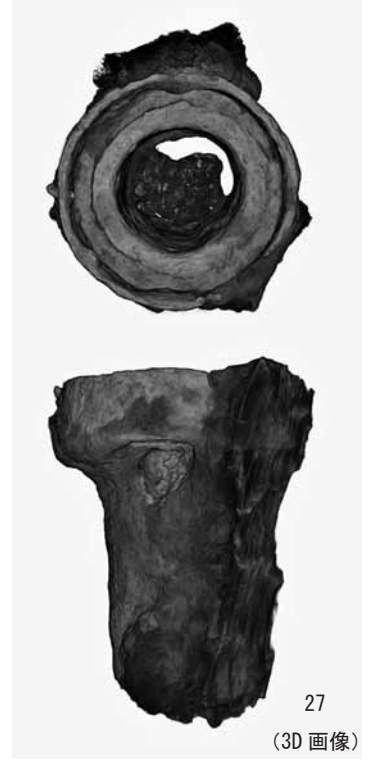
SK03



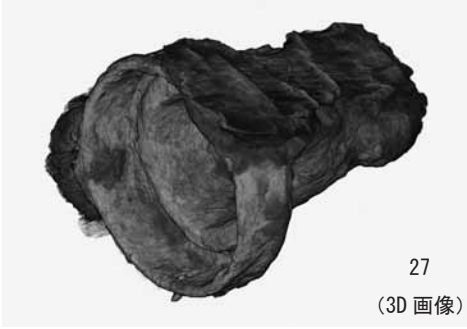
27



27



27  
(3D 画像)



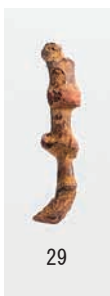
27  
(3D 画像)



27 (X 線 CT 画像)



28



29



30



31



32



33



34



35

SK05



SK07



SK10



SK10

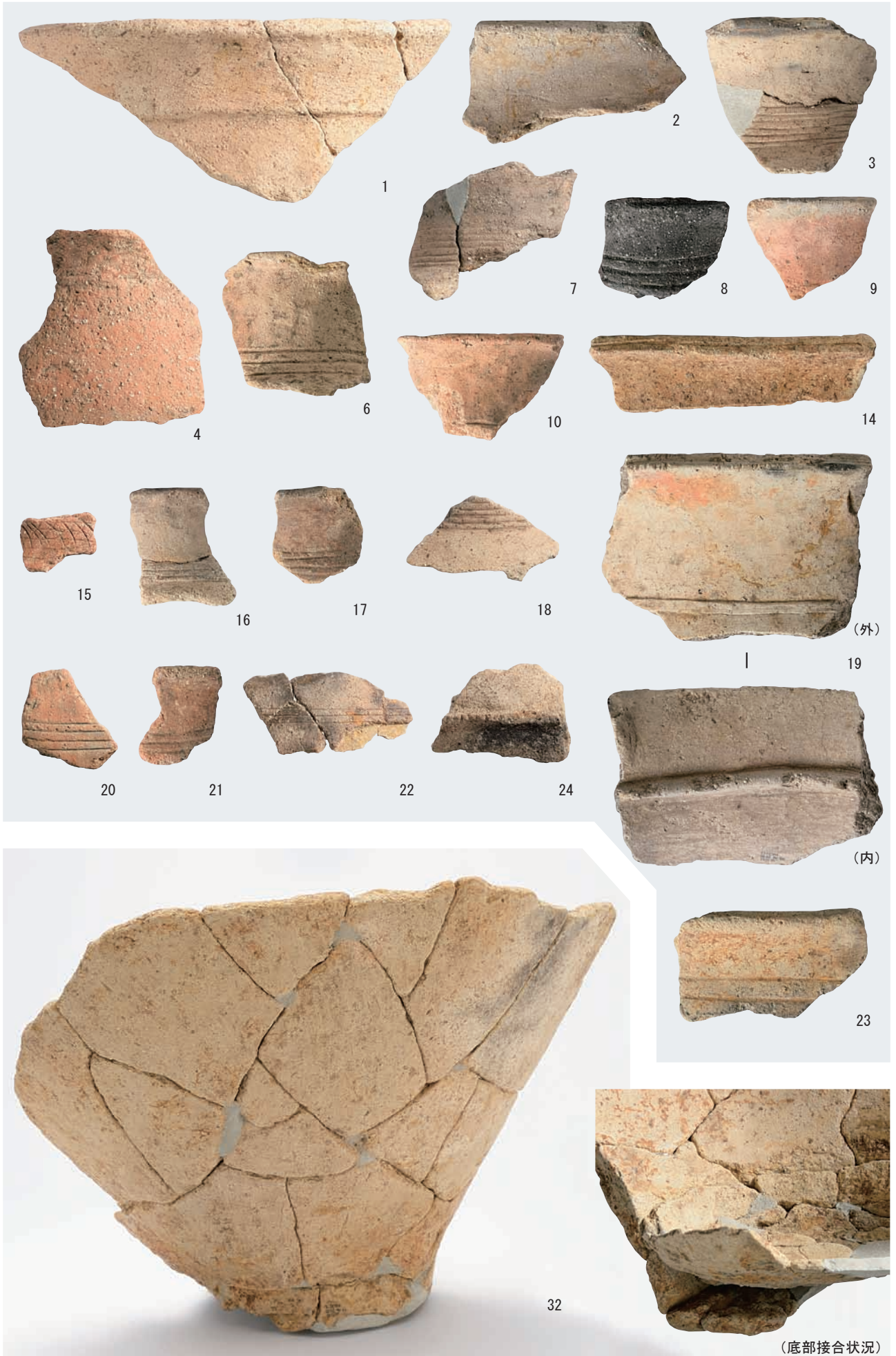


SD02



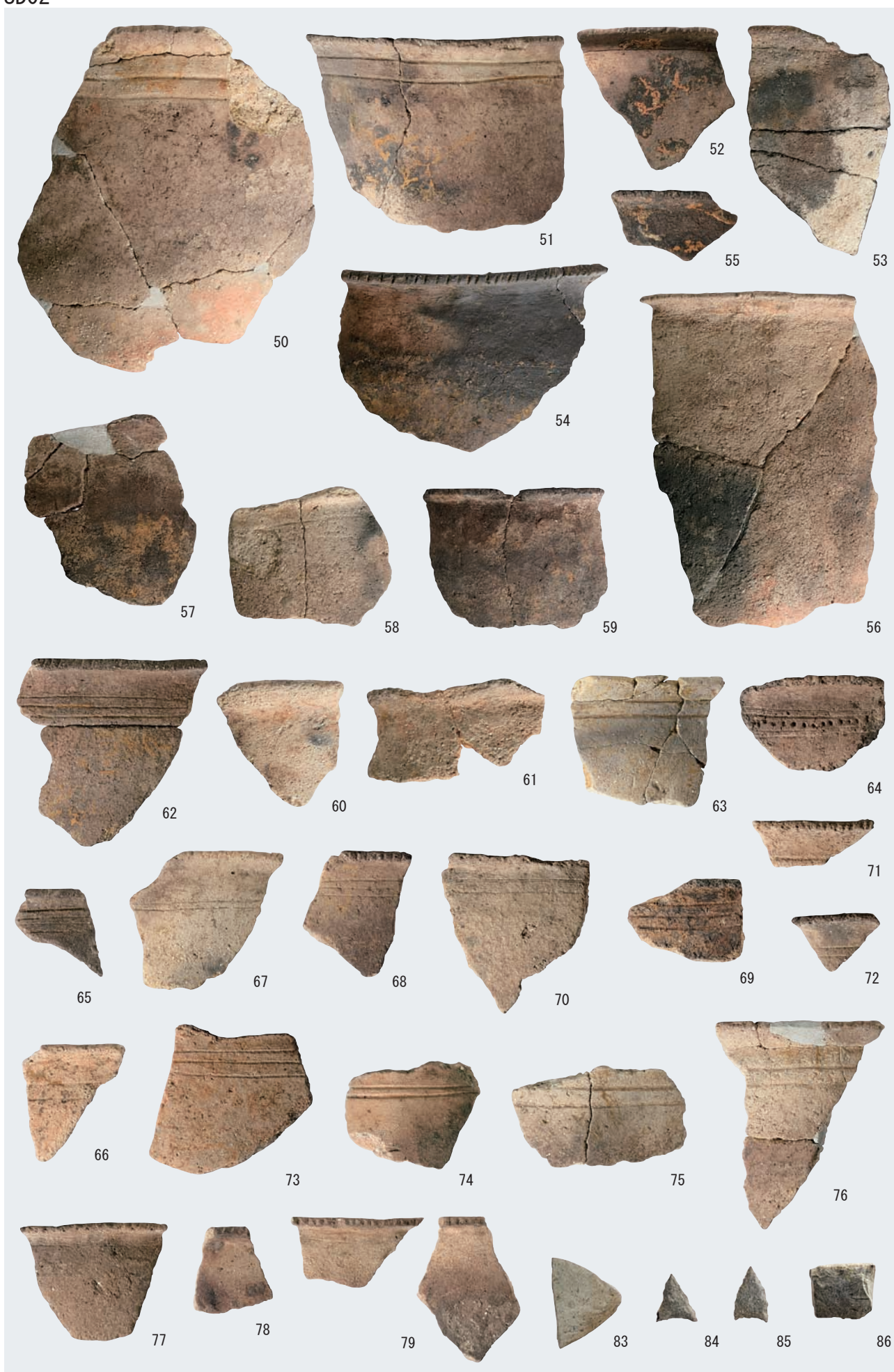


SD02





SD02

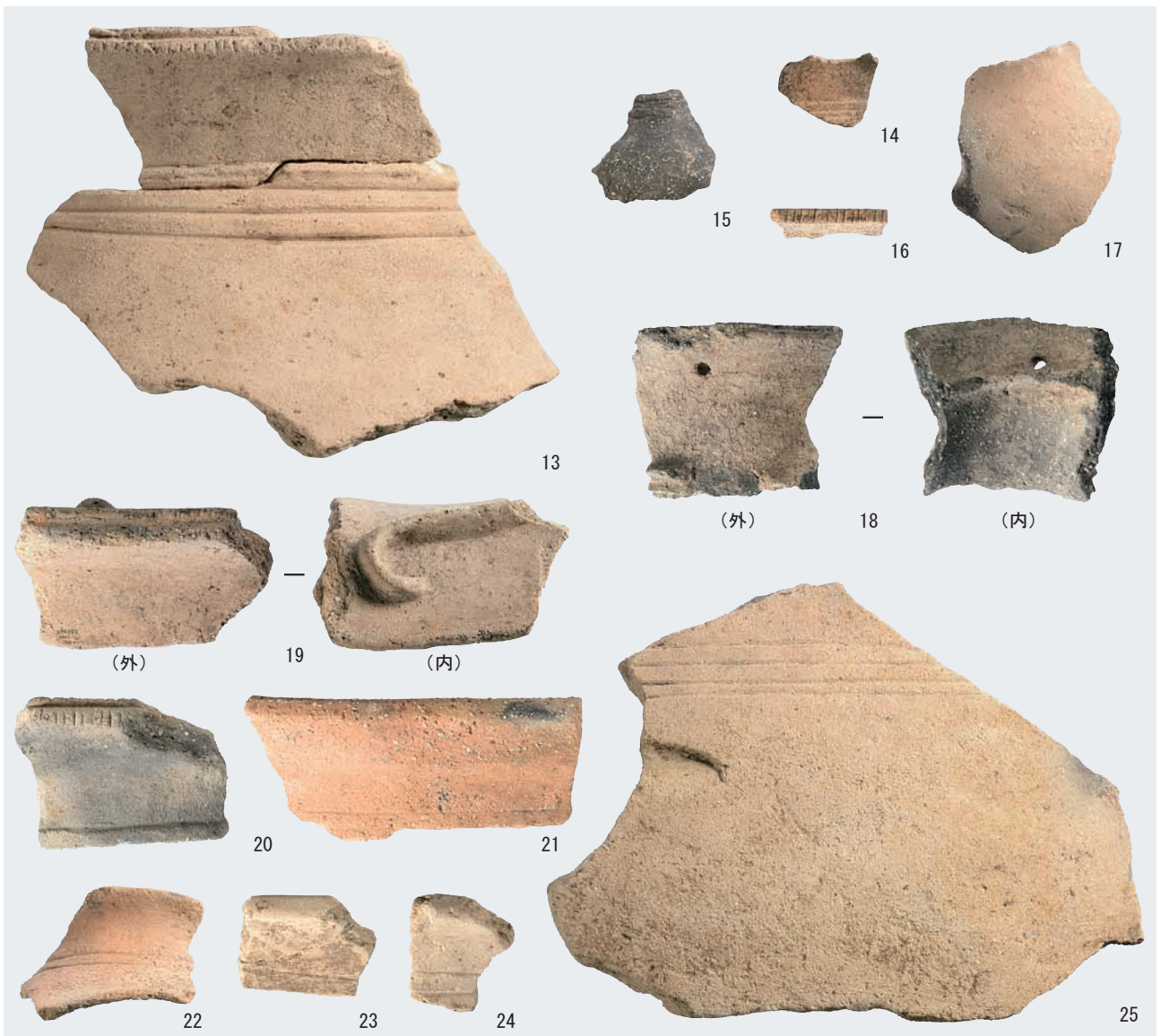




SX01

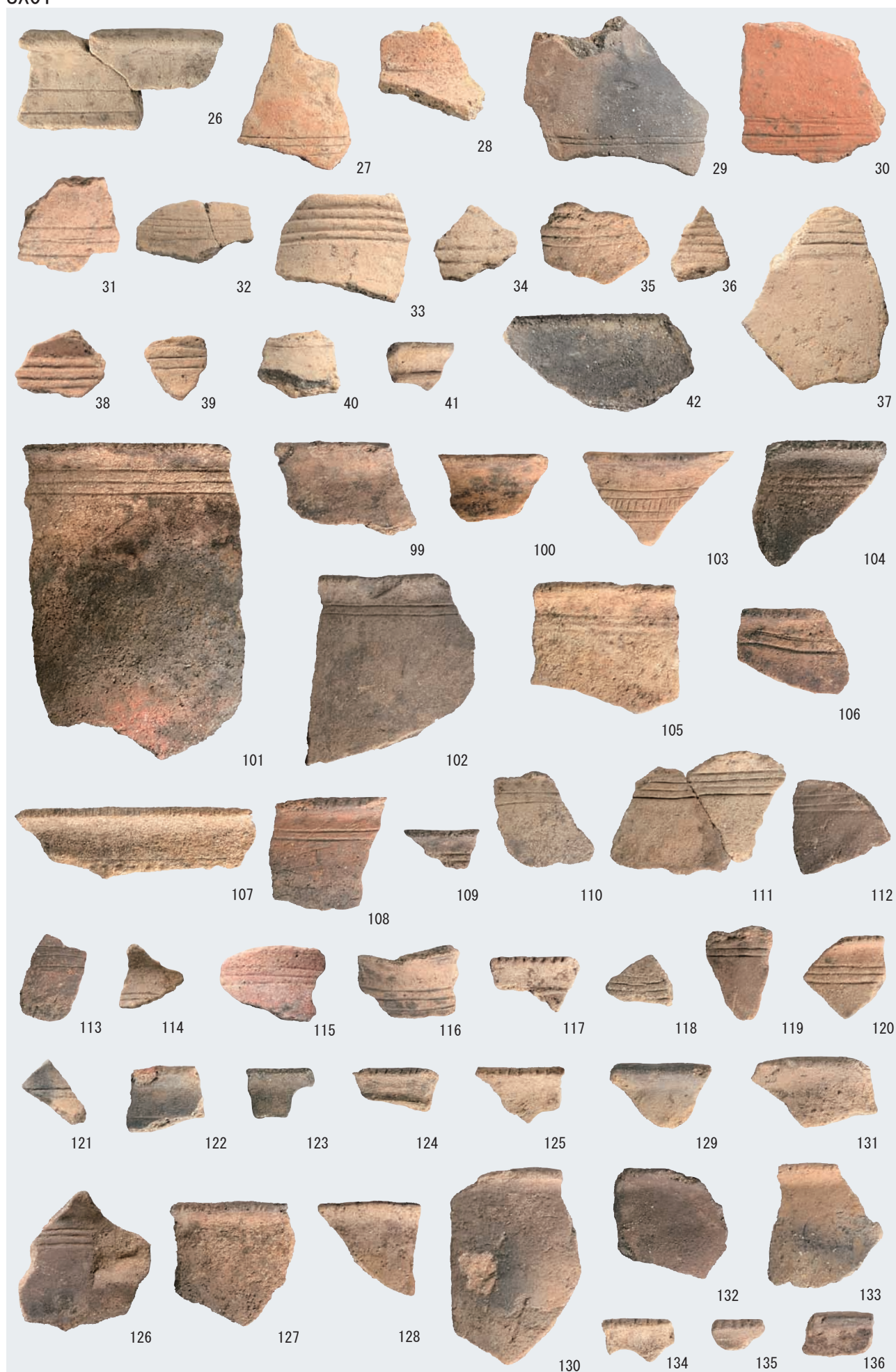


SX01





SX01



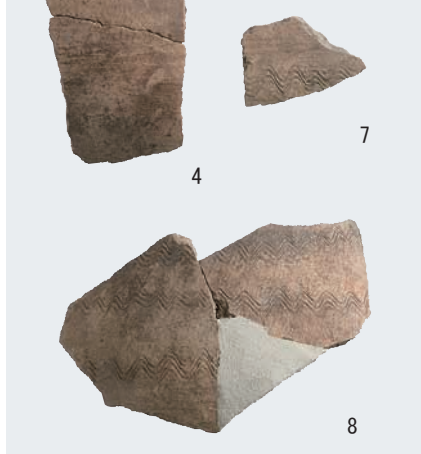


SX01



流路

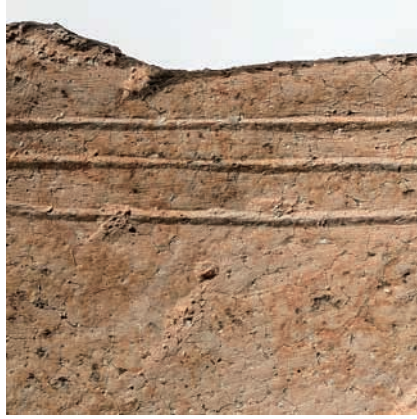
表採





施文技法

〔沈線〕



〔削出突帶〕



〔平行沈線+斜格子沈線〕



〔平行沈線+斜沈線〕



〔平行沈線+刺突文〕







# 報 告 書 抄 録

ふりがな	ともまつさんごういせきはくつちようさほうこくしょ							
書名	友松3号遺跡発掘調査報告書							
副書名	友松住宅開発事業に係る発掘調査							
巻次	-							
シリーズ名	東広島市教育委員会文化財調査報告書							
シリーズ番号	第65集							
編著者名	藤岡孝司、石井亜希子							
編集機関	東広島市教育委員会(東広島市出土文化財管理センター)							
所在地	〒739-2201 広島県東広島市河内町中河内651番7号 TEL 082-420-7890							
発行機関	東広島市教育委員会							
所在地	〒739-8601 広島県東広島市西条栄町8番29号							
発行年月日	西暦2021年3月30日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	(° ' ")	(° ' ")		(㎡)	
ともまつさんごういせきはくつちようさほうこくしょ 友松3号遺跡	ひがし ひろしま し 東 広 島 市 さいじょうじけ 西 条 町 寺 家	34212	983	34° 26' 04"	132° 43' 28"	20190507 ) 20190903	1,350	宅地造成
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
友松3号遺跡	集落跡	弥生時代 古墳時代 中世		堅穴住居跡 5軒 土坑 11基 溝状遺構 5条 性格不明遺構 1基 流路 1条		弥生土器 土師器・須恵器 土師質土器・瓦器 石斧・石鏃・石包丁 鉄製品・鞆羽口		弥生前期 環濠集落
要約	今回の調査によって、調査区北側の低丘陵上に展開する弥生時代前期及び古墳時代の集落は友松2号遺跡と、また調査区南側の谷部に展開する弥生時代中期の集落は友松1号遺跡と、それぞれ同一の集落として捉えることが可能となった。特に、弥生時代前期の集落は環濠を備えており、また石器の工房があった可能性も指摘できる。なお、中世の鍛冶関連遺構は、周辺での鍛冶遺構存在の可能性も窺えるものである。							



東広島市教育委員会文化財調査報告書第65集

## 友松3号遺跡発掘調査報告書

－友松住宅開発事業に係る発掘調査－

発行日 令和3(2021)年3月30日

編集 東広島市教育委員会  
(東広島市出土文化財管理センター)  
〒739-2201 広島県東広島市河内町中河内651番地7

発行 東広島市教育委員会  
〒739-8601 広島県東広島市西条栄町8番29号

印刷 山脇印刷株式会社  
〒725-0003 広島県竹原市新庄町29



